

# 若松と菊

— 旧秩父宮家いつくしみ



の品々

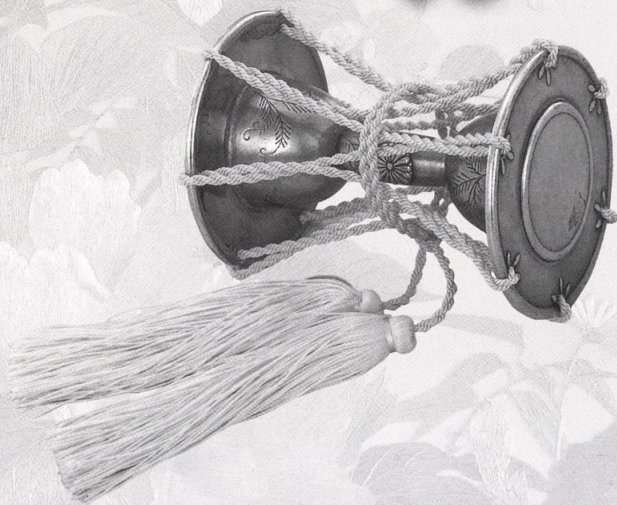




# 若松と菊

— 旧秩父宮家いつくしみ

の品々



平成16年1月6日(火)～3月7日(日)

宮内庁三の丸尚蔵館



## 目次

3	— あいさつ
4	— 旧秩父宮家と美術
9	— 図版
78	— 御年譜
83	— 作品解説
100	— 出品目録
104	— 主な参考文献
iv	— List of Exhibits
iii	— Foreword

## 凡例

- 一、本図録は、平成十六年一月六日(火)～三月七日(日)を会期とする展覧会「若松と菊―旧秩父宮家いつくしみの品々」の解説図録である。
- 一、図録に掲載する図版及び解説の番号は、展示番号と一致する。
- 一、会期中、作品の展示替を行う。
- 一、作品解説に記載する法量は、特に記さない限りは、縦(奥行)×横(幅)×高で、単位はcmである。
- 一、本展覧会の企画は、三の丸尚蔵館学芸室主任研究官・太田彩が担当し、同研究員・五味聖、岡本隆志がこれに協力した。
- 一、図録の執筆は、「旧秩父宮家と美術」は太田が担当し、作品解説は太田、五味、岡本と、主任研究官・大熊敏之が分担した。御年譜は太田と五味が担当した。
- 一、殿下御自作の陶磁器類については、御遺族の御厚意により、加藤土師萌氏の解説を使用させていただいた。
- 一、展示作品の写真は、当庁囑託カメラマンの撮影による。その他、「秩父宮家縁の地・施設」における写真については、それぞれの施設の協力を得た。



## あいさつ

平成八年に、故秩父宮妃から、およそ九百点の美術工芸品が当館にご遺贈されました。この度の展覧会では、その中から、秩父宮雍仁親王殿下、そして勢津子妃殿下が親しまれた美術品を通して、その文化のご活動の一側面を紹介するものです。

秩父宮家は、明治三十五年（一九〇二）六月二十五日、大正天皇の第二皇子としてご誕生された雍仁親王殿下が、大正十一年（一九二二）のご成年式を機に秩父宮を宣下され、創立された宮家でした。雍仁親王殿下は、昭和三年（一九二八）に松平勢津子様とご結婚、以後、お二人で共に皇族としての様々なご活動をされました。しかし、第二次世界大戦という混乱の時代を過ごされる中、殿下は結核を患われ、昭和二十八年に五十歳で薨去。その後、妃殿下は宮家当主として、また皇族の一人としてご活動を続けられました。雍仁親王殿下のお印は若松、妃殿下は菊でしたが、美術工芸品の品々を収める箱の中には、それぞれのご所有であることを示す若松印、菊印が記され、両殿下がそれらの品々を愛いとしましたことがうかがえます。

雍仁親王殿下は、スポーツに親しまれた殿下として知られておりますが、その一方で、幼い頃より美術展に頻繁にお出かけになるなど、文芸へのご理解も早くからありました。宮家には、明治天皇や大正天皇、そして御兄・昭和天皇と、三代にわたる天皇をはじめ、御母上・貞明皇后より、新古を問わず、日本、さらには諸外国の様々な美術工芸品が受け継がれています。また、殿下が結核をご発病になり、御殿場にて療養生活を送られる中では、自ら陶芸にも打ち込まれました。さらに妃殿下においては、書や絵画をたしなまれる一方、宮家に蔵する大切な品々を丹念にご整理されてもられました。

宮家が設立されて八十年、殿下が薨去されて五十年が過ぎ、そして妃殿下が薨去されて来年は十年になります。この機会に、宮家に伝えられた美術工芸品を通して、秩父宮同妃両殿下の足跡、お人柄に親しんでいただければ幸いです。

平成十六年一月

宮内庁三の丸尚蔵館



宮内庁三の丸尚蔵館所蔵 出品作品一覧 (第33回 若松と菊一旧秩父宮家いつくしみの品々)

作品番号	作品名	作者名	員数	時代	ページ
1-2	雍仁親王殿下・勢津子妃殿下御肖像	熊沢観明	三点	昭和23～25年(1948～50)	p. 14
1-3	勢津子妃殿下御肖像	藤田嗣治	一点	昭和23年(1948)	p. 15
1-4	勢津子妃殿下御肖像	林武	一点	昭和32年(1957)	p. 15
2	秩父霊峯春暁	横山大観	一幅	昭和3年(1928)	p. 16
3	奥秩父妙法嶽	和田英作	一点	昭和3年(1928)	p. 16
4	妙法山遠望図蒔絵巻苘箱	赤塚自得	一点	昭和3年(1928)	p. 17
5-1	鼓形若松に星文ボンボニエール		一点	昭和3年(1928)	p. 18
5-2	手箱形雲鶴文ボンボニエール		一点	大正11年(1922)	p. 18
5-3	文箱形松唐草文ボンボニエール		一点	大正11年(1922)	p. 18
5-4	鏡箱形雲に鳳凰文ボンボニエール		一点	大正～昭和前期(20世紀)	p. 19
6-1	雍仁親王殿下御愛用関係品 スキーヤー		一点	昭和3年(1928)	p. 19
6-2	雍仁親王殿下御愛用関係品 スカル(アイシス号)模型		一点	昭和30年(1955)	p. 19
7	陶彫唐獅子	沼田一雅	一对	昭和3～4年(1955～56)	p. 20-21
8-1-1	雍仁親王殿下御遺作類 方竹花筒 銘 園生		二点		p. 22
8-1-2	雍仁親王殿下御遺作類 茶碗(タイ国チュン ポット妃殿下と共に絵付)		一点	昭和26年(1951)	p. 22
8-1-3	雍仁親王殿下御遺作類 茶碗 銘 裾野春		一点	昭和27年(1952)	p. 24
8-1-4	雍仁親王殿下御遺作類 茶碗 銘 面影		一点		p. 25
8-1-5	雍仁親王殿下御遺作類 茶碗 銘 母衣		一点	昭和26年(1951)	p. 24
8-1-6	雍仁親王殿下御遺作類 茶碗 銘 冬籠		一点	昭和26年(1951)	p. 26
8-1-7	雍仁親王殿下御遺作類 茶碗 銘 若竹		一点		p. 26
8-1-8	雍仁親王殿下御遺作類 茶碗 銘 つゝ鳥		一点	昭和26年(1951)	p. 26
8-1-9	雍仁親王殿下御遺作類 茶碗 銘 紅富士		一点		p. 27
8-1-10	雍仁親王殿下御遺作類 茶碗 銘 不二月		一点	昭和26年(1951)	p. 27
8-1-11	雍仁親王殿下御遺作類 茶碗 銘 瑞光		一点	昭和27年(1952)	p. 27
8-1-12	雍仁親王殿下御遺作類 汲出茶碗 銘 残照		一点	昭和25年(1950)	p. 28
8-1-13	雍仁親王殿下御遺作類 汲出茶碗 銘 野分		一点	昭和25年(1950)	p. 28
8-1-14	雍仁親王殿下御遺作類 汲出茶碗 銘 牧場		一点	昭和25年(1950)	p. 28
8-1-15	雍仁親王殿下御遺作類 湯呑 銘 雪解		一点	昭和26年(1951)	p. 28
8-1-16	雍仁親王殿下御遺作類 大湯呑 銘 五輪		一点	昭和27年(1952)	p. 28
8-1-17	雍仁親王殿下御遺作類 栗鼠灰皿		一点	昭和25年(1950)	p. 29



8-1-18	雍仁親王殿下御遺作類 熊谷草灰皿		一点	昭和25年(1950)	p. 29
8-1-19	雍仁親王殿下御遺作類 殿下御染筆「仁以接事」	篆刻：清水柏翁	一面	昭和44年(1969)	p. 32
8-2-1	勢津子妃殿下御遺作類 御染筆茶碗 銘 篠	荒川豊蔵	一点	昭和40年(1965)	p. 30
8-2-2	勢津子妃殿下御遺作類 御染筆茶碗 銘 鶉	荒川豊蔵	一点	昭和40年(1965)	p. 30
8-2-3	勢津子妃殿下御遺作類 御染筆皿 富士に和歌	香蘭社	一点	昭和26年(1951)	p. 31
8-2-4	勢津子妃殿下御遺作類 御染筆茶碗 銘 椿	十二代中里太郎右衛門	一点	昭和33年(1958)	p. 31
8-2-5	勢津子妃殿下御遺作類 御染筆茶碗 富士山	五代尾西楽斎	一点	昭和26年(1951)	p. 31
8-2-6	勢津子妃殿下御遺作類 妃殿下御染筆「秩父湖」	篆刻：清水柏翁	一面	昭和3年(1928)	p. 32
8-2-7	勢津子妃殿下御遺作類 御染筆色紙(紫陽花、石榴、蝦夷透かし百合、郁子、秋草)		五点	不明	p. 33
9	堤中納言集(名家集切)	伝紀貫之	一卷	平安時代(11世紀)	p. 34-35
10	四季絵屏風(俊成卿九十賀屏風)	住吉広行	六曲一双	江戸時代(18~19世紀)	p. 36
11	承安五節舞絵巻		二巻	大正4年(1915)	p. 36-37
12	肇国創業絵巻	横山大観ほか	二巻	昭和14年(1939)	p. 38-39
13	漁村曙	横山大観	一幅	昭和15年(1940)	p. 37
14	四季草花図刺繍屏風	四代飯田新七	四曲一隻	明治35年(1902)	p. 40
15	百花模様刺繍卓被	四代飯田新七	一枚	大正期(20世紀)	p. 41
16	葱文大皿	加藤土師萌	一点	昭和5年(1930)	p. 42
17	孔雀緑鳥文鉢	加藤土師萌	一点	昭和32年(1957)	p. 42
18	鉄描銅彩松大皿	富本憲吉	一点	昭和28年(1953)	p. 43
19	紅地金襴手吉祥文手鉢	永楽和全か?	十客のうち	明治前期(19世紀)	p. 43
20	葆光白磁枇杷彫文花瓶	板谷波山	一点	昭和3年(1928)	p. 44
21	黒飴瓷茶碗	板谷波山	一点	昭和20年代	p. 44
22	青磁菊蘭文様茶碗	二代諏訪蘇山	二点	昭和10年頃(1935頃)	p. 45
23	草花文碗	河井寛次郎	一点	昭和15年(1940)	p. 46
24	草花文湯呑	河井寛次郎	二点	昭和18年(1943)	p. 46
25	花文扁壺	河井寛次郎	一点	昭和32年(1957)	p. 47
26	鉄絵丸紋蓋物	濱田庄司	一点	昭和前期(20世紀)	p. 47
27	猿廻し	和彦	一点	明治期(19~20世紀)	p. 48
28	手遊壳	林芳山	一点	明治43年(1910)	p. 48
29	漁船	如月	一点	明治末期(20世紀)	p. 48
30	二童子	木村竜章	一点	明治43年(1910)	p. 49
31	鷹		一点	明治初期(19世紀)	p. 49



32	とうもろこし	中川竜英	一点	明治末期頃（20世紀）	p. 50
33	羽箒に子犬		一点	明治～大正期（20世紀）	p. 50
34	西洋蘭鉢植		一点	大正～昭和前期（20世紀）	p. 50
35	鷺鳥卵蒔絵盃		一点	明治後期（20世紀）	p. 51
36	ジャボン製蒔絵菓子器		二合	明治後期（20世紀）	p. 51
37	糸瓜製蒔絵花入		一点	明治後期～大正期（20世紀）	p. 52
38	金魚		二点	明治期（20世紀）	p. 52
39	桑木彫唐子象乗	三代原舟月	一点	明治前期（19世紀）	p. 53
40	兜形蒔絵香合		一合	明治後期（20世紀）	p. 53
41	月日貝蒔絵香合	松岡吉平	一合	明治前期（19世紀）	p. 54
42	山吹蒔絵文台・硯箱		一具	明治22年（1889）	p. 55
43	菊花蒔絵文台・硯箱	船橋舟珉	一具	大正11年（1922）	p. 55
44	日月春秋山水蒔絵料紙箱・硯箱		一具	明治後期（20世紀）	p. 56
45	近江八景蒔絵料紙箱・硯箱		一具	昭和3年（1928）	p. 56
46	桜花折枝蒔絵重硯箱		一合	大正4年頃（1915頃）	p. 57
47	桑地菊花蒔絵重硯箱		一合	昭和22年（1947）	p. 57
48	松竹梅蒔絵文箱・色紙箱		一具	昭和3年（1928）	p. 57
49	四季草花蒔絵硯箱	八代西村彦兵衛	一合	昭和3年（1928）	p. 58
50	紅葉散蒔絵硯箱		一合	大正～昭和前期（20世紀）	p. 58
51	竹に雀蒔絵蓆箱		一合	明治後期（20世紀）	p. 59
52	竹に月蒔絵蓆箱		一合	明治31年頃（1898頃）	p. 59
53	銀製観瀑図巻蓆箱	塚田秀鏡	一点	明治43年（1910）	p. 59
54	橘鉢植銀細工		一点	明治期（19～20世紀）	p. 60
55	百合鉢植銀細工		一点	明治期（19～20世紀）	p. 60
56	鼬		一点	明治期（19世紀）	p. 60
57	牛と童	沼田一雅	一点	大正～昭和前期（20世紀）	p. 61
58	鯉	大島如雲	一点	大正～昭和前期（20世紀）	p. 61
59	夕月	藤井浩佑	一点	大正11年（1922）	p. 63
60	みみずく	根箭忠緑	一点	昭和前期（20世紀）	p. 62
61	兎	杉田禾堂、工藝成形社	一点	昭和12年（1937）	p. 62
62	母と子の像	北村西望	一点	昭和54年頃（1979頃）	p. 63
63	熊坂長範	森川杜園	一点	明治26年（1893）	p. 64



64	還城楽	森川杜園	一点	明治26年（1893）	p. 64
65	楽土	平田郷陽	一点	昭和15年（1940）	p. 65
66	子雀	平田郷陽	一点	昭和30年前後（1955前後）	p. 65
67	粧い	町野君子	一点	昭和19年（1944）	p. 66
68	鈴を持てる児	野口光彦	一点	昭和期（20世紀）	p. 66
69	蓋付壺	エードヴァルド・ハルド （制作：オレフォッ シュ・ガラス工場）	一点	1920年代前半	p. 67
70	花紋硝子花瓶	各務鑛三	一点	昭和10年頃（1935頃）	p. 67
71	フォレスト遊園の雪景	アルペール・パケ	一点	1922年	p. 68
72	インクスタンド(罐と蝸牛)	フランス	一点	20世紀前期	p. 68
73	青磁菊唐草文鉢	高麗	一点	11～12世紀	p. 69
74	白搔落鹿文鉢	イラン	一点	11～12世紀	p. 69
75	白釉多彩花卉文皿	トルコ	一枚	17世紀	p. 69
76	弘前の秋－田園風景	バーナード・リーチ	一点	昭和28年（1953）	p. 70
77	鉢	ルーシー・リー	一点	1970年頃	p. 70



# 旧秩父宮家と美術

当館では、平成八年秋に収蔵した旧秩父宮家からの御遺贈品約九百点の整理、調査を逐次進めてきた。これまでの調査で、旧秩父宮家において、主に室内の装飾、調度として制作、あるいは他より贈られたこれら多種多様な品々は、昭和初期を中心とした皇室と美術品の制作事情、また文化との関わりを示すひとつの縮図とも言え、貴重な作品が含まれていることが判った。そこでこの度の展覧会では、宮家創立八十年を迎えたこの機会に、整理・調査の途上ながら、秩父宮両殿下とその美術品を通して、両殿下のお人柄に触れつつ、皇族として、また一個人として、わが国の美術、あるいは文化発展に遺された足跡を紹介しておきたい。

## へん 両殿下について

秩父宮家は、雍仁親王殿下が御成年式を迎えられた大正十一年六月二十五日に創立された宮家である。殿下は、明治三十五年六月二十五日、大正天皇と貞明皇后の第二皇男子として御誕生。誕生から七日目に命名式が行なわれ、祖父の明治天皇より、名を「雍仁(やすひと)」、称号を「淳宮(あつのみや)」と定められた。この時、大正天皇は葉山にて御静養中で、初めての対面は生後ほぼ一カ月後であった。十月には川村伯爵家に預けられ、迪宮殿下(昭和天皇)と二年余をここで過ごされた。明治三十八年一月三日は弟宮・光宮殿下(高松宮)が御誕生になり、その四月からは東宮御所の隣の皇孫御殿で兄宮、弟宮と共に過ごされるようになった。明治四十二年には学習院初等科入学、大正四年に同中等科入学、大正六年に中等科第二学年修了の後、陸軍中央幼年学校予科に入学。以降、同本科、陸軍士官学校、さらに陸軍大学校へと進まれ、陸軍に勤務された。

この間の大正十一年六月に御成年式、秩父宮が宣下された。秩父嶺の名から取られたこの宮号は、秩父が日本武尊の奥羽平定に縁の地であること、明治天皇が帝都と定められた武蔵国の名山であること、そして殿下が山登りが好きであることから相応しいと考えられてのものであった。また、大正十四年五月からは英国に留学され、オックスフォードなどの地で、日本での生活とは異なつた新鮮な雰囲気の中、伸び伸びと過ごされた。この英国での生活において殿下が受けられた影響は多大であったことは、御遺作文集『思い出の記』に記されている。そして大正天皇崩御のため、留学途中の昭和二年一月十七日に御帰国。その後は兄宮昭和天皇を補佐する、皇位継承第一位の直宮の立場となられた。

そして昭和三年九月二十八日に松平勢津子様と御結婚。お二人の生活が始まるが、殿下は直宮、皇族としての御活動と共に、陸軍での御勤務もあり、相当に多忙な日々を過ごされたことが、様々な資料から窺える。昭和十二年三月には、五月に行なわれる英国国王ジョージ六世戴冠式に御出席のため、妃殿下と共に御渡英。御渡英中、両殿下は体調を崩され、スイスで半月程御静養されるということがあった。帰国後も皇室行事、陸軍勤務などの多忙な日々を送られる。そして昭和十五年六月に結核を御発病され、療養生活が始まった。昭和十六年九月に御殿場御別邸に移られて、以後、長くこの地で日々を過ごされる。その間、昭和十九年には症状が相当に悪化した時期もあった。しかし、富士山の見えるこの地で、殿下は鶏や緬羊の家畜を飼い、陸稲や馬鈴薯をはじめとした種々の作物を栽培され、チューリップや蘭などの様々な草花をも育てられ、つましく、自然と共に過ごされた。地元の人たちとも気軽に交流されたという。そして、陶芸家・加藤土師翁の指導を仰いで、自ら陶磁器制作を始められ、さてこれからという昭和二十八年一月四日、五十歳で薨去された。

勢津子妃殿下は、外交官松平恒雄氏の長女として、明治四十二年九月九日、英国にて御誕生。重陽の節句にお生まれのことから、節子(せつこ)と命名された。その後は、父の仕事の関係で、長く外国(中国、米国)で生活されている。雍仁親王殿下との御結婚については、貞明皇后が深く関与されたいが、妃殿下の御著書『銀のボンボンエール』には、当時、駐米特命全権大使としてワシントンに在任していた松平氏のもとに、皇太后(貞明皇后)の使者として樺山伯爵が二度も訪ねてこられたことが記されている。結局一度はお断りになったものの、御結婚を決意された節子様は、昭和三年五月にワシントンのフレンド・スクールを御卒業後、六月二十二日に御帰国。九月十四日に御納采の儀、同十七日には、皇太后陛下の御名「節子(さだこ)」と御字が同じため、名を「勢津子」と改められ、九月二十八日の御婚儀を迎えられた。

御結婚後は、殿下と共に皇室行事や様々な場所へお出かけされる事になったが、殿下後発病後は、御静養の殿下の御看病と共に、東京との行き来をして皇族としての御活動もなさっている。また殿下と共に御別邸で畑仕事や家畜の世話もされ、地元の様々な行事にも参加された。明るい妃殿下であったと記されている資料が多い。そして殿下薨去の後も、殿下の御意志を継ぎながら、皇族の一人として、地方や外国へのお出かけもなされ、多くの人々と広く交流されたことが、御遺贈品やその他の資料からも十分に窺える。妃殿下は、平成七年八月二十五日、八十五歳で薨去された。

こうした両殿下の御事蹟を調べていく中で、両殿下御自身が記された文章、両殿下と親しかった人々の記述には、殿下の御母上や御兄弟への愛情、両殿下の互いの思いやりが感じられ、またどんな人へも気軽に接せられた両殿下に対す



る親しみが記されている。大正一昭和前期、殿下は天皇の弟宮、陸軍将校という難しいお立場での苦悩があったであろうことは様々に語られていることであるが、その一方で、殿下は「スポーツの宮様」「山の宮様」として知られ、庶民的な宮様として人気があったことも良く知られている。御殿場のあった静岡の人達は「農業の宮様」とも呼んで、妃殿下共に親しまれていた。そして、御遺贈の作品の多くは、その収納箱に、一つ一つ、簡略ながら丁寧な、作品の由来などを書き記した紙が貼附されており、それによつて作品調査の手掛かりを得たものも多い。中には、妃殿下御直筆の書き付けもあり、特に一五〇点に及ぶボンボニールは一点ずつ、きちんと整理されていた。旧宮家の方によれば、妃殿下がお側の方々と、丹念に整理されていたと言う。これによつて知られる作品の由来から、これらの美術品を通して、皇族という大きな意味での家族の絆、また両殿下が品々を大切にされる姿勢を感じる事が出来た。と同時に、皇族という立場上、美術品制作においては当時を代表する作家が関わっており、その制作事情と作品を調査することで当時の美術制作の実情が少しずつでも明らかになっていく点でも、宮家の遺された美術工芸品は日本美術さらには文化の歴史を探究する資料として貴重であることを再認識した。さらに、殿下が最後に自ら制作された陶磁器類からは、自然が育んだ素材を用いて心、想いを形にすることに喜びを感じられたであろう御様子、そしてそれを見守り、御自身も共にその喜びを感じられた妃殿下の御様子が察せられ、お二人が愛しまれた品々が伝えてくれるものの多さに、驚き、また感激するものでもある。

## 〈二〉宮家と美術——継承と制作の品々——

今回の展示作品は、①皇室の美術品で、何らかの折に継承された作品、あるいは制作された作品、②両殿下御自身の作品、あるいは関連する作品、③宮家の御慶事を中心に外部より献上された作品、の三点から選んでいる。各々の詳細は各作品解説を参照されたい。ここでは①②について概略的に触れておくこととする。

ところで、『雍仁親王実紀』（以下『実紀』）に記される事項を見ていくと、御幼少の頃から展覧会にも頻繁に出かけられている。幼い頃は展覧会よりは動物園の方が好きだったのではないかと察するが、動物園と帝室博物館、動物園と美術展覧会など、春と秋を中心に、迪宮殿下、光宮殿下と共ににお出かけである。成長されてからは、なお一層に様々な展覧会を御覧になっている。

秩父宮殿下の美術に対する関心は、学究的な素質と相まって、かなり専門的なものであったらしい。作品制作にあたって殿下と直接関わった朝倉文夫や沼田一雅らの作家達も、後に記している（後述）。また、『雍仁親王御事蹟資料 一（六）』（以下『御事蹟資料』）の記事を見ていくと、例えば地方へお出かけの折に殿

下の御宿を引き受けた旧家の当主は、殿下が次々と室の飾り付けの品々をたどり過ぎられた後に、驚くほど専門的な御質問をされたことを記し、また別には「茶席に御案内して、私の道具をいろいろと鑑賞願ったところ、殿下の御趣味の広いのには、多少、その道を嗜んだ私は、殿下のお顔を見返すほど感心した。私の道具を御覧に入れると、この仁清は京極家にあつた釘隠しだ、この花生は赤星家にあつた古伊賀だと、即座におめききされ、主人役の私が恐れ入った」と記される。さらに、古美術に詳しく、自らも蒐集し、わが国の文化学術の発展に貢献した細川護立氏（一八八三—一九七〇）とは、山登りを通じても非常に懇意で、また東洋陶磁の専門家であつた奥田誠一氏（一八八三—一九五五）、東京美術学校校長の正木直彦氏（一八六二—一九四〇）ら、美術界でその名を知られる人達との交流も実に多かつた。美術に親しまれる御姿勢は、殿下御自身の御興味の有様と、恵まれた環境によつて自然と育まれていたものと言えよう。

そして、殿下のそうした御資質、御環境は、日本の文化、美術にも深い御関心のあつた貞明皇后の御影響、御配慮もあるのではないかと考えられる。貞明皇后について、殿下御自身が「宮中の伝統、特に明治天皇と昭憲皇太后の先例を正しく継承されることをとめられた」一方で「外国のことには非常に関心を持たれ、…世界の動き、列国の風物には、大きな注意を払られた。…国外に一步も出られたことのない身で、これほどまでに外国のことに興味を持たれるということは、特筆に値するのではないかと思う。…といて、外国のことを直輸入はなさらない。外観的形式はとらないで、よい精神的内容をとられたのであつた。」と記されている（「亡き母上を偲ぶ」〔「思い出の記」所収〕）。また妃殿下もその御著書の中で、「…皇太后さまは、絶えず対外的に日本がどうなっていくのか、どうあるべきかをお心におかれ、国際的な視野で外国の事情や文化をご勉強あそばしていたようでございます。…あらゆる分野にご精通になつていらして、…大した方であられたと今なお思うばかりでございます。…」と記される。さらに高松宮殿下の美術品に対する鑑識眼の高さについて、日本工芸会会長の細川護貞氏は、貞明皇后の素質を受け継がれたからであると述べている（「高松宮宣仁親王」平成三年、朝日新聞社）。貞明皇后の幅広い素養と思慮深さは、皇子達に大きな影響を与えているのである。御遺贈品の由来を見ても、貞明皇后が何らかの折々にお心遣いされてお譲りになっている作品が実に多い。

さて、殿下が皇室の美術品を正式に継承された最初は、『実紀』大正元年十二月二十六日に記される「皇太后より先帝の御遺品を賜つた十歳の時であらう。明治天皇の御遺品で、その数点は当館収蔵作品にも含まれ、本展示で紹介している。同様のものは、高松宮家等にも伝来している。明治天皇の御遺品は、その後も大正天皇が引き継がれたものが、さらに貞明皇后より秩父宮家に譲られて現存しているものも少なくない。



また、御成年式、御婚儀の際には、御物の中から調度などに用いるための品が選ばれて譲られているが、特別に制作を作家に命じられた作品もあった。特に、昭和二年の赤坂表町御殿造管お祝いとして陛下より朝倉文夫に下命された「殿下登山の像」、御殿玄関脇に飾るために殿下の依頼によって制作された沼田一雅の「陶彫唐獅子」、昭和七年に貞明皇后が殿下陸軍大学校御卒業のお祝いとして制作を依頼された、同じく沼田の「殿下御馬上姿の銅像」は、朝倉、沼田の代表作である。また昭和三年の御婚儀の際には、当時、東京美術学校長であった正木直彦が名家制作の飾皿を依頼されている(三峯山博物館に現存、P74参照)。

さらに、雍仁親王殿下と松平節子様の御結婚に心を尽くされた貞明皇后からは、御婚儀前の七月十二日の御内宴において、自らデザインされたという鼓形のボンボニエールがお二人に渡されている。然るべき作家の手によると思われる手作りのもの。妃殿下御著書『銀のボンボニエール』には、「宴の後、宮さまと私にお手ずから賜りました。皇太后さま御自らデザインあそばしたとのこと。全長六センチくらいで、鼓の形というのも珍しく、締めひもとも呼ばれる調緒はローズピンク、胴の部分には宮さまのお印の若松の模様と星の模様が、小さく幾つも浮き彫りにされており。ローズ色は英国の国の色であり、星は星条旗、つまり米国の意味しているのです。英国で勉強あそばしました宮さまと、米国内でいくらか勉強いたしました私とが、それぞれ縁ある英国と米国との親善に一生努めるようにという、皇太后さまの深いおぼしめしが込められているのです。」とあり、その後妃殿下が頂戴された方は戦災で焼失し、残っているのはお倉に入っていた宮様の分であることが記されている。従って、現存しているのは殿下が貞明皇后から戴かれたもの。母の想いが満ち溢れた品である。このボンボニエールと同様のデザインのものが、この日の内宴に招かれていた人達に渡されているが、殿下が頂戴されたものとは質感などが異なっており、両殿下の分のボンボニエールはまさに貞明皇后によつて特別に制作された品であった。

ところで、今回の展示作品の中には、殿下が展覧会でお買上になった作品も含まれている。一つは、昭和五年十一月九日、第十一回帝展に出かけられた折にお買い求めになった加藤土師蒔の「葱文大皿」、そして日仏芸術社の展覧会でお買い求めになった高麗青磁鉢など三点がそれに当たる。加藤土師蒔のこの皿は、御殿場御別邸にも飾られ、この皿の行方を探していた加藤氏が御別邸に訪ねたことが契機となつて、殿下の陶器制作が始まった。また日仏芸術社に關しては、その主宰者の一人である黒田鵬心(一八八五―一九一四)が、大正十一年(昭和六年)に開催された第一回十回の仏蘭西現代美術展覧会に殿下が出かけられ、昭和五年二月の「ベルシヤ古工芸、仏蘭西玻璃器展」ではベルシヤの漆器を一点御買上されたと『御事蹟資料』に記している。殿下がお買い上げになったという事情が明確な作品は当館収蔵品の中には少ないが、様々な展覧会にお出かけ

になっていたこと、美術品についても御興味が大旺盛であったことから察すると、宮家にはかなりの御買上品もあったのではないかと推察される。

そして最後に、御自身が手掛けられた作品類について紹介しておきたい。特に殿下においては、加藤土師蒔氏の指導のもとに制作された陶磁器類が遺され、わずかな期間の制作だったにも拘わらず、陶芸家・加藤土師蒔をも唸らせる出来栄であったことは、『秩父宮遺作図録 玉葉流芳』(加藤土師蒔編 昭和二十九年、秩父宮御遺作図録刊行会)に詳しい。

殿下はすでに陶磁器には大へん御興味がおありで、古陶磁も愛蔵されていたようであるが、河井寛治郎、富本憲吉、浜田庄司らの作品を好まれていたことは、御遺品の美術品などからも知ることが出来る。御殿場御別邸に窯が造られたのが昭和二十五年八月。その九月に最初の窯入れ、そして昭和二十六年十一月、同二十七年七月と、わずか三窯で終わった。作品は、茶碗、灰皿、皿、湯呑、香合など様々で、紐作りのもの、轆轤引きのものなどを制作されている。殿下薨去の年の十一月―十二月に、東京と大阪で「秩父宮御遺作展」が開催され、多くの人々を集めた。この展覧会の内容は、同展図録『玉葉流芳』によつて知ることが出来る。この遺作展に出品された作品のうち、当館にはその大部分の18件19点が遺贈されており、本展でその全てを紹介している。そしてこれらの作品については、『玉葉流芳』より、殿下の陶磁器制作の詳細、作品の解説を行なった加藤土師蒔氏の文章の一部をそのまま掲載させていただいた。殿下と直に接して陶器制作を行なった加藤土師蒔氏の文章こそ、殿下の陶器制作を紹介するのに最も相応しいものである。

殿下と加藤氏が築かれた御殿場御別邸の窯は、殿下によつて「三峰窯」と命名された。御別邸から見える富士、箱根、愛鷹の三嶺と、宮号の因む秩父三峰とからの命名である。この窯で焼かれた陶器のうち、最も出来の良い茶碗は貞明皇后のもとへ届けられ、貞明皇后はお亡くなりになる直前まで愛用され、御陵にも埋められたと言われる。また茶碗「銘 紫影」は加藤土師蒔氏、茶碗「銘 瑞光」は藤原銀次郎氏(後に御遺族より妃殿下に返上)に差し上げたほか、親しかった登山家・楨有恒氏がマナスル登頂に挑んだ際に託されて埋められた茶碗もあった。御自作とは言えないが、同じ窯で焼いた三峰窯の作品は、さらに医師の遠藤博士をはじめ、ごく身近で親しくされた方にもお譲りのようであるが、大部分は妃殿下が大切にされ、妃殿下薨去の後、当館以外には御殿場御別邸のある秩父宮記念公園などの縁の地にも分与されている。

殿下御在世時にわずか三窯で終わってしまった三峰窯であったが、その後は高松宮殿下を中心に、皇族の方々や山登りの友人らによつて、毎年一回、ここで三峰窯の集いが行なわれた。「三峰窯に火が入り煙が立ちのぼれば、宮さまも喜びになると思つたからです。」と妃殿下は御著書に記されている。そして妃殿下



の御歌「御かたみの窠に今年も煙たて たのしく集ふ土ひねりして」には、殿下の御遺志を受け継ぎたいという妃殿下のお心が詠まれている。

一方、妃殿下は、書や絵画の作品を遺されている。特に絵画技法を学ばれた様子は資料からは窺えないのではあるが、草花を描かれた色紙が当館収蔵品に含まれている。『御事蹟資料』には、ある人が御殿場御別邸に参邸した折に、妃殿下の敦盛草の写生の絵を拝見させて戴いたとする記事があるが、両殿下共に植物に大変ご関心があり、表町御殿のお庭にも、御別邸のお庭にも、様々な草花木を植えられていた。そうした草花木の写生を妃殿下は楽しんでおられたようであるが、展示作品はしっかりと写生に基づき丁寧に彩色された色紙で、その描写は、芯のお強さ、明るさといった妃殿下のお人柄を感じさせるものである。また流麗な文字の書、数多く詠まれた和歌には、皇族の一人として、外国生活の長かった妃殿下が、日本文化の伝統の重さとそれを大切する必要性を感じられ、常にそれらに親しまれようとした御様子が窺える。そして、殿下が大切にされた交友関係と共に、殿下がお好きであった美術品にも積極的に関わられていたことは、御染筆の陶磁器などからも知られる。殿下の薨去後、妃殿下は宮家の当主として、しっかりと殿下の足跡を継承、発展されたのであった。

### 〈三〉朝倉文夫と沼田一雅との関わり

最後に、秩父宮家御遺贈品の中で、制作事情が明らかで、秩父宮家にとって重要な意味深い作品であり、またそれを制作した作家にとっては代表作とも言える作品とその所在について紹介しておきたい。

#### ①朝倉文夫の作品

昭和二年に造営された表町御殿(挿図1)の御祝いとして、昭和天皇の御下命により彫刻家・朝倉文夫(一八八三―一九六四)が制作したのは「殿下登山の像」である。この像は、翌年完成して納められ、御殿の庭を望むベランダに設置されて、表町御殿のモニュメント的存在となっていた(挿図2)。この像の制作に関しては、『御事蹟資料』に朝倉自身が寄稿した文章が載せられている。それによれば、まず「殿下に初めて拝謁したのは、多分大正五年であったか、帝展(帝国美術院展)に成らせられた時で、丁度、彫塑部の御案内役をつとめたので、最初からお側近く拝したのであった。」という。この記述の後に、この時殿下は陸軍幼年学校に入られていたとあるが、大正五年はまだ文展(文部省美術展覧会)であることなどから、この年次は朝倉の記憶違いで、『実記』の記録から見ても、大正八年十月二十六日の「帝国美術院展御覧」の時かと考えられる。この時、朝倉は既に審査員を務める立場にあった。ともかく、この後も大正十年から始まった東台彫塑会展覧会や帝展に行かれた際に、朝倉は度々御案内していた。

朝倉文夫は、大分県生まれ。明治三十六年、二十歳で東京美術学校彫刻選科入学。その年から展覧会に出品し始めて受章を重ね、秩父宮殿下を御案内する頃は、すでにこの分野の第一人者となっていた。昭和二十三年に文化勲章を受章、昭和二十六年には文化功労者となった。

「殿下登山の像」の制作に着手して八九分通り進捗した時にその旨を申し上げると、アトリエでそれを御覧になりたいとのことで、昭和二年十二月二日午後三時、殿下が谷中にある朝倉のアトリエを訪ねられた(挿図3)。この時は、東京美術学校教授(美術史)の田辺孝次らも同席したが、会話がはずみながらも「殿下は常に制作の方をお向きになって、姿勢を乱さず、モデルとなる要領を充分に心得ていらせられるように拝したのであった。」と記す。

またこの日、朝倉は、ほぼ出来上がっている像だけをお見せしたのでは面白くないと考え、彫塑の制作工程を御覧入れるために制作した「殿下の胸像」も用意していた。この胸像は「今日の記念に献上させて戴きます」と言った朝倉の申し出により、「後日、鋳銅にして、御殿の御書斎に安置した」と言う。この胸像は昭和五年七月に納められた。結局、朝倉は殿下の像を二点制作したのである。

この二点のうち、昭和陛下御下命の「殿下登山の像」は、昭和十九年に御静養されていた御殿場御別邸に移設された。御殿場御別邸は、妃殿下の御遺言によって御殿場市に寄贈され、現在は秩父宮記念公園として公開されているが、茅葺き屋根の母屋の前に、凛々しく富士山を望んで建つ本像がある(P71参照)。像の台座は角を丸くして各面の中央に鋳造の羊を嵌め込んだ四角い石柱で、これも表町御殿に設置時からのものである。

朝倉は、本像を制作した際、もう一体を鋳造し、昭和三年の第二回朝倉塾彫塑展覧会に特別陳列した。朝倉塾彫塑展覧会の像は、現在も朝倉彫塑館(財団法人 台東区芸術文化財団)に所蔵されている。さらに、本像の原型も朝倉彫塑館に残されているが、秩父宮記念スポーツ博物館に所蔵される同像(P75参照)は、朝倉文夫からの寄贈となっていることから、スポーツ博物館が開設された昭和三十

挿図1 お庭側から見た表町御殿  
ベランダの殿下登山像  
挿図2 朝倉文夫のアトリエにて



四年頃に、この博物館のために新たに鑄造されて納められたものと考えられる。従って、「殿下登山の像」は、三カ所に所在しているのである。

一方の「殿下胸像」は、現在のところ、秩父宮記念スポーツ博物館に所蔵されている像(P75参照)を確認しているのみである。この像も登山像と同様、博物館開設時に朝倉から寄贈されていることから、朝倉の手元に残っていた原型から鑄造し直したものである。宮家書斎に納められた本像の所在が判明していないが、表町御殿は昭和二十年五月の空襲で大部分が焼失しているので、現存していない可能性もある。どなたかのもとに残っていることを祈りたい。

## ②沼田一雅の作品

わが国近代の陶彫(陶磁彫刻)作家として知られる沼田一雅(本名勇次郎、一八七三―一九五四)の代表作と言える二点の作品も秩父宮家に所蔵されていた。沼田は福井県生まれ。もともとは彫刻を志したが、フランスのセーブル製陶所に学び、見事な陶彫を制作する技術を習得。帰国後、この陶彫技法による動物や肖像彫刻を制作し、その第一人者として活躍した。フランス政府より二度の勲章を、また昭和二十九年に日本芸術院恩賜賞を受章した。

この沼田が、昭和三十四年にかけて制作した作品が「陶彫唐獅子」一对(展示No.7)である。制作については「御事蹟資料」の沼田自身の記述、東京美術学校校長・正木直彦の「十三松堂日記」にも記され、その内容は作品解説で触れられている。沼田の記述によれば、「殿下から、特に、ブロンズでは面白くないから、是非、陶彫でとの御思召により、陶彫一对を製作、同年十月、これをお納め申上げたところ、大へん御意に召し、更にもう一对、同じ物を自分のものにしたところのお言葉で、御下命下さった。なお、この唐獅子にかけた老緑錆色の釉薬を御覧になられ、「この青色は酸化銅ですか」と御質問になったが、このやうに専門的な釉薬原料のことまで、殿下がよく御承知で居られたことに、私は恐入った次第である。」とのこと。この二対の唐獅子は、一对が当館に、もう一对は殿下御在世中に三峯神社に下賜されて(P73参照)、いずれも現存している。どちらが最初に制作されたもので、玄関脇に置かれていたのかなど、二対それぞれの制作順、設置場所については判断出来ないが、沼田制作の現存する大型の陶彫作品が少ない中、その優れた技術を伝える貴重な作品と言える。

さて、沼田は、昭和七年には前年の十一月に陸軍大学校を御卒業された殿下への御祝いとして、貞明皇后からの依頼で「殿下馬上の御像」を制作した。これについては、昭和二十八年三月一日の朝日新聞に沼田自身のコメントが掲載されている。それによれば「…演習中の映画や写真を参考にして制作したが、皇后さまは、こんななについ顔ではない」とおっしゃられた。そして赤坂の本邸で一時間ばかり宮さまとお話する機会を与えられたわけだが、なるほどおやさしいお顔だった。しかし演習中はキリッとひきしまった表情におなりになるのだ。ポ

ーズは馬上の演習姿だから強い表情が正しいわけだ

けど、このときだけは芸術家の良心を殺して母君の御心情通りに「やさしい宮さま」をブロンズで二個献上しました。〔近代陶彫の創始者沼田一雅遺作展〕所収 昭和五十二年、福井県陶芸館)とあり、この仕事が数多くの仕事

事の中で、最も感銘深いものであったとも語っている。この二点のブロンズ像は、一点は秩父宮記念スポーツ博物館(P75参照)に、もう一点は昭和三十四年六月に竣工した青森県立体育館の秩父宮記念室へ、殿下ご使用のスキーなどと共に寄贈された。青森県立体育館は、殿下が陸軍歩兵少佐三十一聯隊大隊長として、妃殿下と共に約一年四ヶ月を過ごされた縁の地、弘前に建設された。その後、同体育館は廃止され、現在、御寄贈品は青森市の県総合運動公園内にあるスポーツ資料館に所蔵、展示されている(挿図4)。この二点の像いずれにも、その台座裏に刻銘があり、「原型 沼田一雅/鑄造 高村豊周、丸山不忘」とある。高村と丸山は、当時、東京美術学校鑄金科の助教、講師を務めていた人物であった。

その後、昭和十年に沼田は京都陶磁器試験所を指導するようになるが、同十二年二月には両殿下がこの試験所を御視察。二時間にわたって御熱心に御覧になる両殿下を、沼田は御案内し、大きな感動を覚えている(『御事蹟資料』挿図5)。

朝倉と沼田のこれら秩父宮家に縁の作品が、こうして現存していたことは、大きな収穫であった。いずれも宮家、殿下の記念的な作品であり、当時を代表する彫刻家の作品として再評価し、今後も伝えていくべき作品である。

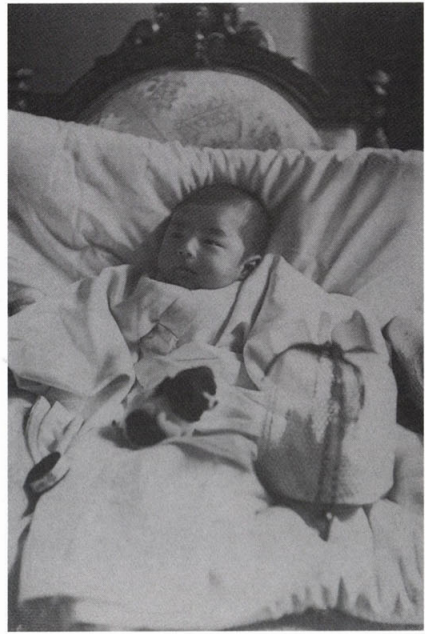
今回の展示作品は、秩父宮家が御所蔵になっていた総ての美術品から見れば、ほんの一部の品々であろうと思われる。しかしこれだけの作品の中からも、作者と両殿下の関わり以上に多くのことが見いだせた。一つの宮家と美術、あるいは文化との関わりは、皇室と美術の関わりを考えることになる。それはまた、当時の美術界の実情を捉え、作家たちの活動の有様を捉えることにもなった。

秩父宮雅仁親王殿下、同妃勢津子殿下、そして秩父宮家の存在は、次第に薄れつつある。両殿下の御活動が風化してしまわないうちに、今後も様々な方々の協力を得て、調査しておく必要性を痛感している。

太田 彩(おおたあや/当館学芸室主任研究官)



1 両殿下御肖像  
1-1 両殿下御写真



① 明治35年8月 淳宮殿下御誕生後初の御写真、生後50日頃



③ 明治37年7月 木馬遊び

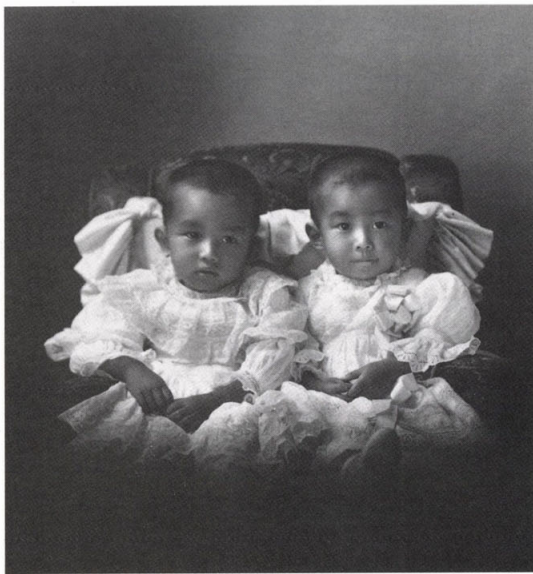


⑤ 昭和38年7月

(丸付数字は展示されるもの)



② 明治37年 沼津御用邸にて、大正天皇、迪宮殿下(昭和天皇)と



④ 明治37年7月 迪宮殿下(昭和天皇)と



⑥ 明治38年7月 迪宮殿下(昭和天皇)と



⑦ 明治39年6月 迪宮殿下(昭和天皇)、  
光宮殿下(高松宮)と



⑧ 明治40年9月



⑨ 明治44年5月 迪宮殿下(昭和天皇)、  
光宮殿下(高松宮)と



⑩ 大正8年11月 高松宮殿下と



⑪ 大正10年5月



⑫ 大正11年6月 御成年式の御装束にて



⑭大正14年 御渡英前、貞明皇后と



⑬大正13年3月



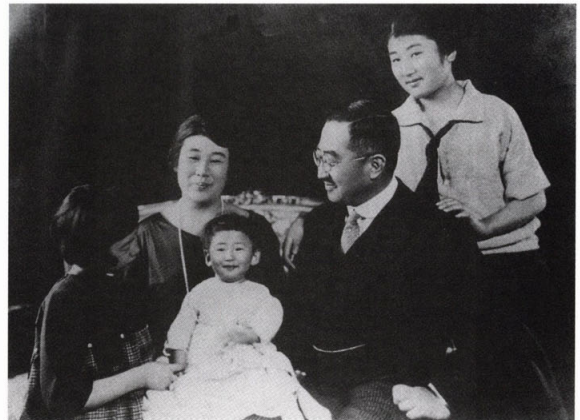
⑮明治42年9月 松平節子様、ロンドンにて御誕生



⑰昭和3年7月 節子様、皇太后陛下(貞明皇后)より青山東御所に招かれる



⑯ワシントン大使公邸にて、松平大使御一家(節子様、15歳)





⑱昭和3年9月28日 御婚儀



⑲昭和3年9月28日 御婚儀



⑳昭和3年



㉑表町御殿のお庭でお二人で



⑳ 昭和12年夏 スイス・グリンデルワルトにて



㉒ 昭和12年5月 英国国王戴冠式参列、ロンドンにて



㉔ 昭和24年 御殿場御別邸にて



㉔ 昭和40年代後半



㉕ 昭和23年頃 御殿場御別邸にて





1 | 2 両殿下御肖像 熊沢観明

① 雍仁親王殿下 昭和24年

③ 雍仁親王殿下(スケッチ) 昭和23年

② 勢津子妃殿下 昭和25年



1 | 3 勢津子妃殿下 藤田嗣治 昭和23年

1 | 4 勢津子妃殿下 林武 昭和32年



2 秩父霊峯春暁 横山大観 昭和3年



3 奥秩父妙法嶽 和田英作 昭和3年





4  
妙法山遠望図蒔絵巻筒箱  
赤塚自得  
昭和3年



蓋表

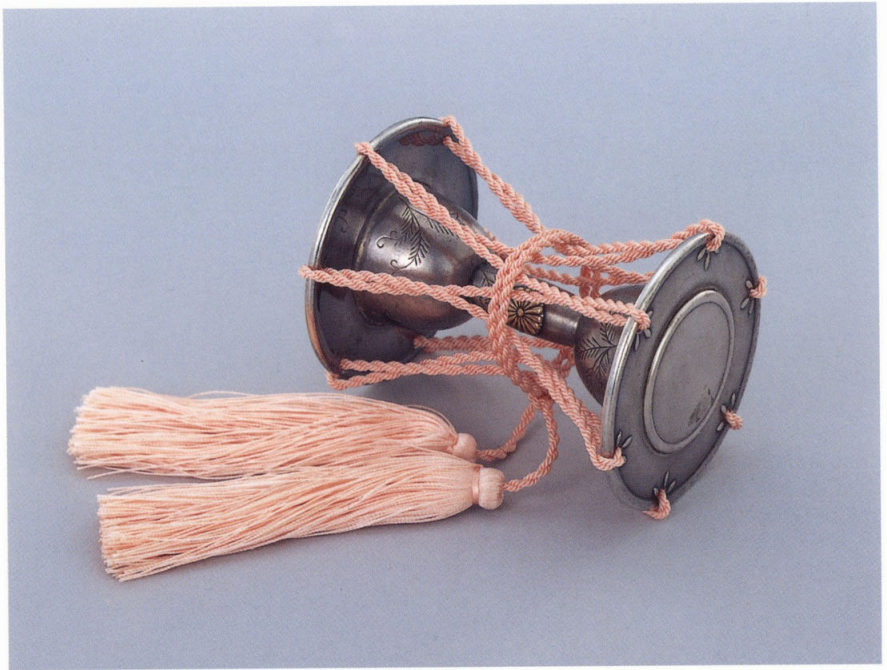


姿



5 ボンボニエール

5-1 鼓形若松に星文ボンボニエール  
昭和3年御婚儀前御内宴



妃殿下による御由緒書付

5-2 手箱形雲鶴文ボンボニエール  
大正11年御成年式

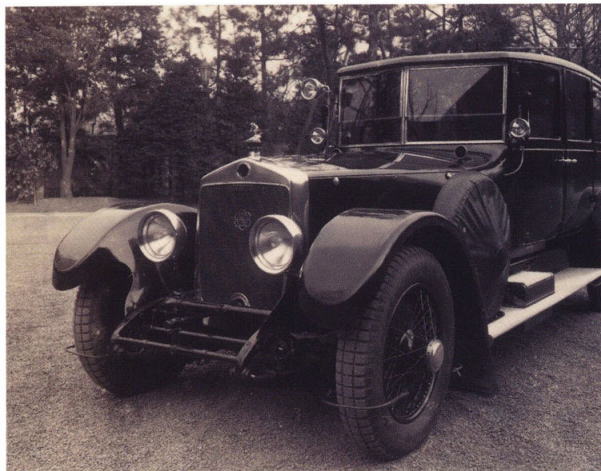


5-3 文箱形松唐草文ボンボニエール  
大正11年御成年式





5-4 鏡箱形雲に鳳凰文ボンボニエール



<参考> 英国製自動車ランチェスター

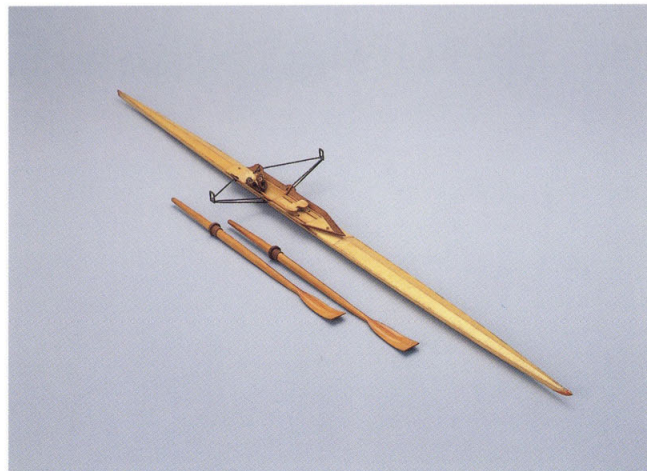
6-1 スキーヤー

(昭和3年御購入英国製自動車ランチェスター裝飾品)



6 雍仁親王殿下御愛用関係品

6-2 スカル(アイシス号)模型











背面と刻銘



8 両殿下御遺作類

8-1 雍仁親王殿下御遺作類

8-1-① 方竹花筒 銘園生



8-1-②

茶碗 竹馬と子供 昭和26年  
(タイ国チュンポット妃殿下と  
共に絵付)



昭和26年11月14日、スウェーデン国ラーガルフエルト公使  
夫妻参邸の折、三峰窯を案内される（左が加藤土師蒞氏）



御自作の「栗鼠灰皿」を御覧になる殿下



同上







妃殿下箱書



8-1-③ 茶碗 銘裾野春 昭和27年



8-1-⑤ 茶碗 銘母衣 昭和26年





妃殿下御歌

「ひたむきに  
ろくろひかししおもかけの

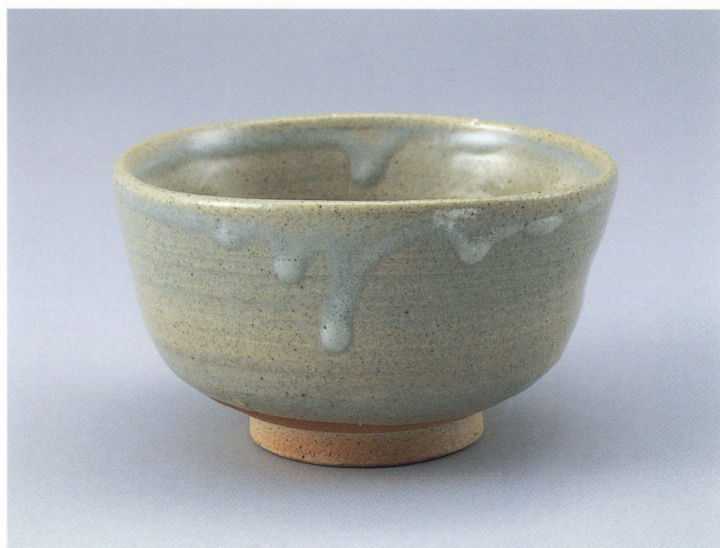
手にとるやかて目にかひくる

勢津子」



妃殿下箱書





8-1-⑥ 茶碗 銘冬籠 昭和26年



8-1-⑦ 茶碗 銘若竹



8-1-⑧ 茶碗 銘つゝ鳥 昭和26年



8-1-9 茶碗 銘紅富士



8-1-10 茶碗 銘不二月 昭和26年



8-1-11 茶碗 銘瑞光 昭和27年







8-1-12~14 汲出茶碗 右から残照、野分、牧場 昭和25年



8-1-15~16 右から大湯呑 銘五輪、湯呑 銘雪解 昭和26~27年

8 | 1 | ⑰ | ⑱  
右から栗鼠灰皿、熊谷草灰皿 昭和25年





8-2 勢津子妃殿下御遺作類  
8-2-① 御染筆茶碗 銘籬

荒川豊蔵 昭和40年

8-2-② 御染筆茶碗 銘鶯

荒川豊蔵 昭和40年

8-2-③ 御染筆皿 富士山に和歌 香蘭社 昭和26年

「ゆるきなき ひろき心をやしなはむ  
あした夕へに 富士をあふきて」

8-2-⑤ 御染筆茶碗 富士山 五代尾西楽斎  
昭和29年

8-2-④ 御染筆茶碗 銘椿  
十二代中里太郎右衛門 昭和33年



8 | 1 | ⑩ 殿下御染筆「仁以接事」

篆刻…清水柏翁 昭和44年

8 | 2 | ⑥ 妃殿下御染筆「秩父湖」

篆刻…清水柏翁 昭和38年



石榴



紫陽花



蝦夷透かし百合



秋草



郁子







10 四季絵屏風(俊成卿九十賀屏風) 住吉広行 江戸時代(18~19世紀)



11 承安五節舞絵巻 大正4年

五節参 舞姫参入



13  
漁村曙  
横山大観  
昭和15年



五節参 常寧殿への天皇の渡御

菊池契月

「大国主命国土奉獻」

中村岳陵

「豊葦原瑞穂国」

横山大観

「天照大神御神徳」

〈上巻〉

「彦五瀬命御奮戦」

岩田正巳

「神武天皇日向御進発」

安田鞞彦

「瓊瓊杵尊降臨」

「金璫の祥瑞」

吉村忠夫

「布都御魂の劔」

前田青邨

「熊野御難航」

〈下巻〉

長野草風

吉村忠夫

「橿原神宮御即位」

中村岳陵

「饒速日命帰順」

服部有恒





部分



15 百花模様刺繍卓被 四代飯田新七 大正期



部分



全図



16 葱文大皿 加藤土師蒔 昭和5年

17 孔雀緑鳥文鉢 加藤土師蒔 昭和32年

18

鉄描銅彩松大皿  
富本憲吉  
昭和28年



19

紅地金襴手吉祥文手鉢  
永楽和金か？  
明治前期







20  
葆光白磁枇杷彫文花瓶  
板谷波山 昭和3年



21  
黒飴瓷茶碗  
板谷波山 昭和20年代

22

青磁菊蘭文樣茶碗  
二代諏訪蘇山 昭和10年頃



23 草花文碗 河井寛次郎 昭和15年



24 草花文湯呑 河井寛次郎 昭和18年



25 花文扁壺  
河井寛次郎 昭和32年



26 鉄絵丸紋蓋物  
濱田庄司 昭和前期





28 手遊売 林芳山 明治43年



27 猿廻し 和彦 明治期



29 漁船 如月 明治末期

30  
二童子  
木村竜章  
明治43年



31  
鷹  
明治初期





32  
とうもろこし  
中川竜英  
明治末期頃



33  
羽箒に子犬  
明治、大正期



34  
西洋蘭鉢植  
大正、昭和前期



35

鶯鳥卵蒔絵盃  
明治後期



36

ジャボン製蒔絵菓子器  
明治後期





37 糸瓜製蒔絵花入 明治後期～大正期



38 金魚 明治期









42

山吹蒔絵文台・硯箱  
明治22年



文台



硯箱

43

菊花蒔絵文台・硯箱  
船橋舟珉  
大正11年



文台



硯箱



44 日月春秋山水蒔絵料紙箱・硯箱 明治後期



料紙箱



硯箱

45 近江八景蒔絵料紙箱・硯箱 昭和3年



料紙箱



硯箱

46

桜花折枝蒔絵重硯箱

大正4年頃



47

桑地菊花蒔絵重硯箱

昭和22年



48

松竹梅蒔絵文箱・色紙箱

昭和3年





49 四季草花蒔絵硯箱 八代西村彦兵衛 昭和3年



50 紅葉散蒔絵硯箱 大正、昭和前期





52 竹に月時絵巻苜箱 明治31年頃



51 竹に雀時絵巻苜箱 明治後期



53 銀製観瀑図巻苜箱 塚田秀鏡 明治43年







55  
百合鉢植銀細工  
明治期



54  
橘鉢植銀細工  
明治期



56  
鼬  
明治期

57 牛と童  
沼田一雅 大正～昭和前期



58 鯉  
大島如雲 大正～昭和前期





60  
みみずく  
根箭忠緑  
昭和前期



61  
兎  
杉田禾堂、  
工芸成形社  
昭和12年

59  
夕月  
藤井浩佑  
大正11年



62  
母と子の像  
北村西望  
昭和54年頃



63  
熊坂長範  
森川杜園  
明治26年



64  
還城楽  
森川杜園  
明治26年



65

楽土  
平田郷陽  
昭和15年

66

子雀  
平田郷陽  
昭和30年前後



67  
粧い  
町野君子  
昭和19年



68  
鈴を持てる児  
野口光彦  
昭和期

69

蓋付壺

エードヴァルド・ハルド(制作:オレフォッシュ・ガラス工場) 一九二〇年代前半

70

花紋硝子花瓶

各務鑑三 昭和10年頃





73 青磁菊唐草文鉢 高麗 11～12世紀



74 白搔落鹿文鉢 イラン 11～12世紀



75 白釉多彩花卉文皿 トルコ 17世紀





76

弘前の秋―田園風景

バーナード・リーチ

昭和28年

77 鉢

ルーシー・リー  
一九七〇年頃

## 秩父宮家縁の場所、施設

### 秩父宮記念公園（旧秩父宮家御殿場御別邸）

築後約280年のかやぶき屋根の母屋は、井上準之助侯爵の旧別荘を改修したもの。殿下が御発病の後、昭和16年9月より、この御別邸で静養された。妃殿下の御遺言により御殿場市へ遺贈され、記念公園として整備されて、平成15年4月5日に開園、公開されている。公園内には、母屋の傍の枝垂れ桜のほか、四季折々の草花も植えられている。

#### 母屋

母屋内には、両殿下が愛用された家具、調度類も置かれている。また棟続きの新館が記念館として整備され、展示室が設けられている。

#### 母屋の前、富士山に向けて設置される「殿下登山像」

昭和3年、表町御殿造営の御祝いとして、陛下より贈られた彫像。朝倉文夫作。昭和19年に移設。



### 母屋内部

#### 三峰窯

昭和25年7月、陶芸家・加藤土師萌氏の指導により完成した窯。御殿場御別邸からは「富士・箱根・愛鷹の三峰が眺められること、また秩父三峰との関連から、殿下自ら「三峰窯」と名付けられた。

#### 展示室（記念館）

ここでは、両殿下の御事績が紹介されると共に、御使用の品々やボンボニエールが展示されている。また、殿下遺作展に出品された「栗鼠置物」（1951年）をはじめ、両殿下が三峰窯で制作された茶碗などの陶磁器、加藤土師萌氏の作品、妃殿下の水墨画や衣装なども公開されている。

#### 秩父宮記念公園

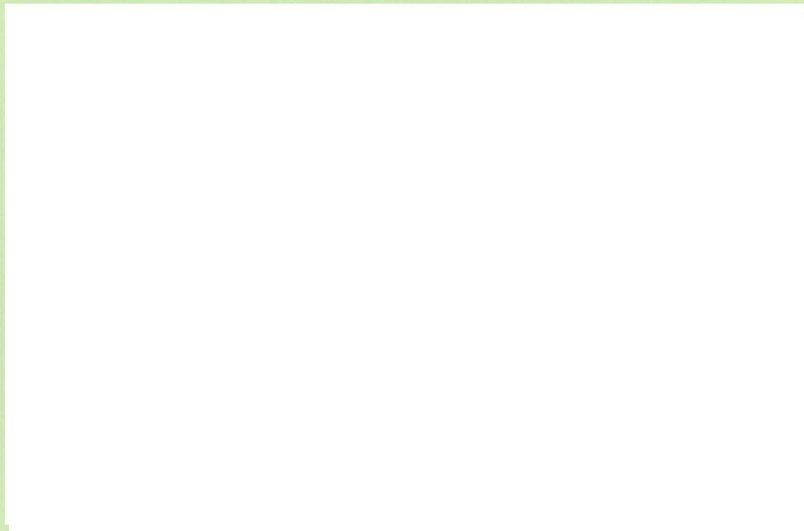
〒412-0026 静岡県御殿場市東田中1507-7  
TEL 0550-82-5110



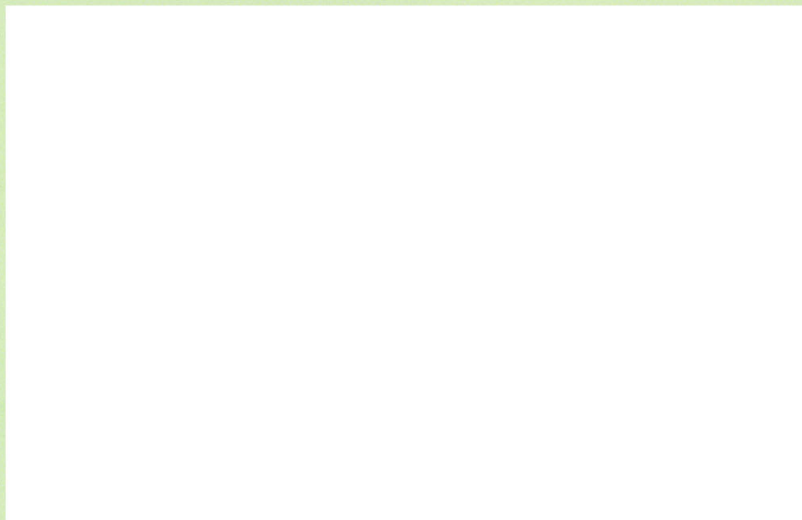
## 三峯神社・秩父宮記念三峯山博物館

三峯神社は、秩父山地の中、標高1102mの三峰山山頂に鎮座する。登山途中で道に迷った日本武尊が山犬(狼)に導かれたという創建伝説をもち、奥秩父の雲取山、白岩山、妙法ヶ岳の霊峰三山を望むことからその名が付けられた。

秩父宮家の設立後、大正14年5月に殿下が御参拝。その後、昭和8年8月には妃殿下と共に5日間にわたって滞在され、妙法嶽、地藏峠、長瀬などを巡られた。妃殿下お一人になられた後も、六度御登拝されている。



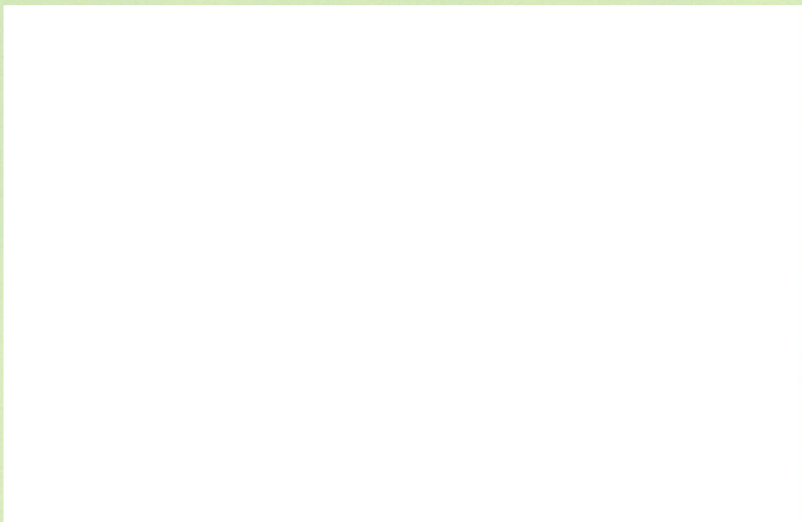
神社より雲取山、妙法ヶ嶽を臨む



秩父宮記念三峯山博物館

境内とその近隣には、秩父宮記念植林地、秩父宮台臨記念館、殿下御直筆の石碑、三峯山博物館、さらには殿下御命名の霧藻ヶ峰と両殿下の胸像レリーフ、妃殿下御命名の秩父湖など、両殿下と縁の深い地である。

秩父宮記念三峯山博物館は昭和52年4月に開館、社宝と共に、秩父宮家より下賜された蒔絵棚等の美術工芸品や殿下御自作の菓子皿等が展示されている。



陶彫唐獅子 沼田一雅



**飾皿 昭和3年**

(右上)雲錦 伊東陶山  
(右下)繡花文 清水六兵衛  
(中)高山植物 徳田八十吉  
(左上)仙桃 板谷波山  
(左下)赤絵鴛鴦  
中村秋塘

この他、  
「鯉魚 石野竜山」  
「萬年青 西川陶仙」  
「和蘭陀船 河村蜻山」  
「雷鳥 柄本暁舟」「牡丹  
由良孤舟」がある。

秩父宮雍仁親王殿下レリーフ  
北村西望 昭和29年

霧藻ヶ峰の秩父宮殿下レリーフ  
除幕式に御成りの妃殿下  
昭和29年9月(清水武甲氏撮影)

**三峯神社**

〒369-1902 埼玉県秩父郡大滝村三峯298-1  
TEL 0494-55-0241

## 秩父宮記念スポーツ博物館

この博物館は、「スポーツの宮様」として知られた秩父宮雍仁親王殿下のスポーツ界に対する御功績を永く記念するために、昭和34年1月6日に開設された総合スポーツ博物館で、日本のスポーツの発達史が理解できるよう、各種の記念資料を展示している。

館内の一角には秩父宮殿下遺品室があり、殿下御自身が御使用になったスポーツ用具や、殿下の彫像などが展示されている。

秩父宮殿下遺品室

殿下胸像 資生堂立体写真像部 昭和4年

殿下登山像 朝倉文夫作 原型：昭和3年

殿下胸像 朝倉文夫作 原型：昭和5年

殿下御乗馬像 沼田一雅 昭和9年

ラグビー群像 斎藤素巖 昭和3年

### 秩父宮記念スポーツ博物館

〒160-0013 東京都新宿区霞ヶ丘町10-2 国立競技場内  
TEL.03-3403-1159



## 京都国立博物館

秩父宮両殿下の御装束類は、文化庁に寄贈され、現在は京都国立博物館に所蔵されている。それらは、昭和3年9月の御婚儀、及び同年11月の昭和天皇の御大礼に際して両殿下の御料として調進された装束類のほか、殿下御誕生の折に調えられた童形服など、七種類に及ぶ。近代の装束とはいえ、有職に則った形式による公家装束の伝統を伝えている。

### 京都国立博物館

〒605-0931  
京都市東山区茶屋町 527  
TEL 075-541-1151

### 雍仁親王殿下御料 束帯(黒地雲鶴文袍他)

大正11年御成年式及び昭和3年御婚儀にて御着用

### 勢津子妃殿下御料 五衣・唐衣・裳(青地亀甲 繋ぎ窠に三つ葵文唐衣他)

昭和3年御婚儀にて御着用

## 文化学園服飾博物館

勢津子妃殿下の御着用になられた洋装類は、生前、妃殿下と親しかった田中千代氏との関係から、妃殿下薨去後は松平家等からこの博物館に寄贈され、保管されている。

### 文化学園服飾博物館

〒151-0053 東京都渋谷区代々木  
3-22-7 新宿文化クイントビル  
TEL 03-3299-2387

### 勢津子妃殿下御 着用 大礼服 (マントー・ド・クール)

昭和12年英国国王  
戴冠式参列の折、  
御着用

以上のほか、宮号と縁の深い**秩父神社**(埼玉県秩父市)も、両殿下の足跡を迎える場所である。秩父神社は、八意思兼命、知知夫彦命、天之御中主神を祭神とする関東屈指の古社で、この地方の総鎮守。12月3日の例大祭は「秩父夜祭」として知られる。当神社と秩父宮家は、宮号から関係が深く、殿下薨去の後には、祭神として祀っている。

境内には、秩父宮両殿下の御手植銀杏、妃殿下歌碑があるほか、平成殿2階には秩父宮記念室があり、殿下のお守り刀の他、殿下が御使用になっていた様々な遺品が展示されている。

御年譜

作品解説

出品目録

主な参考文献





# 御年譜

年(西暦)	殿下 年齢	殿下 年齢	月日	両殿下に関する事項	美術に関する事項	関連作品	
明治35年(一九〇二)	0		6月25日	青山御所内御産殿において、皇太子嘉仁親王(大正天皇)の第二皇子として御誕生。御母は皇太子妃節子(貞明皇后)。		秩父神社に御下賜	
			6月26日	天皇より御剣(御守刀)を賜る。			
			6月27日	印章を「若松」と命名。			
			7月1日	御命名式。御名雅仁(やすひと、淳宮(あつのみや)と称し給う。御浴湯の儀、読書の儀、鳴弦の儀を行う。			
			8月13日	賢所参拝。			
			10月16日	川村純義邸へ御移住、迪宮、昭和天皇と御同居。			
			10月23日	御箸初の式。			
			11月9日	川村家を引き払い、迪宮とともに沼津御用邸へ移られる。			
			1月3日	光宮(高松宮)御誕生。			
			4月14日	迪宮とともに皇孫仮御殿に移られる。			
			4月19日	迪宮と学習院女学部幼稚園へ。			
			6月25日	初めて袴御着用。			
			4月12日	学習院初等科御入学。			
			9月9日	松平節子様、英国にて外交官松平恒雄の長女として御誕生。母により、お印は「菊」とされる。			
			7月30日	明治天皇崩御。大正天皇践祚。			
			12月26日	皇太后より、先帝の御遺品を賜る(牙彫細箱五箱、朱樂時絵付菓子器一箱、鷲形盃時絵付一箱、瑠璃細工・銀製棚飾種々)。		明治天皇御遺品(展示番号30、33、36、37、39、54、55、56)	
			2月13日	天皇より、先帝の御遺品を賜る(魚鳥獣岩石の標本、飛行機模型等四十数点)。			
			4月11日	昭憲皇太后崩御。			
			4月2日	学習院初等科御卒業。			
			4月8日	学習院中等科御入学。			
			11月10日	即位礼。			
			11月16、17日	大饗。			
			12月2日	澄宮(三笠宮)御誕生。			
			3月30日	学習院中等科第二学年御修了。			
			4月9日	陸軍中央幼年学校予科御入学。			
			7月13日	幼年学校予科御卒業。			
			9月1日	幼年学校本科御入学。			
			9月	松平一家御帰国。			
			3月23日	幼年学校本科御卒業。			
			4月10日	歩兵第三聯隊御入隊。			
			10月1日	陸軍士官学校御入学。			
			5月24日				
			5月25日				
			6月24日	賜冠の儀。			
			6月25日	御成年式。秩父宮宣下。(皇族身分録)雅仁親王殿下ノ宮号ハ秩父嶺ノ名ニトリタルモナルガ、秩父嶺ハ明治天皇ノ興タマヘル帝都所在ノ武蔵国ノ名山ニシテ、殿下ノ住マセラルル青山御殿ノ西北遙ニ連レリ、往古景行天皇ノ御代ニ日本武尊奥羽御平定ノ後、甲斐ニ入ラセラルヤ、往復共ニ此ノ地方ヲ經由アラセラシハ之ヲ史乘ニ徴スベク、其ノ御遺蹟ハ秩父郡ノ各地ニ今猶存在シ古来御由緒モアル地方ノ山ナルヲ以テ斯ク御選定アラセララルナリ。			箱形雲鶴文ボンボニール(展示番号51)
大正11年(一九二二)	20	13			平和博覧会第一会場御覧。 同第二会場、仏国美術展覧会御覧。		
大正9年(一九二〇)	18	11					
大正7年(一九一八)	16	9					
大正6年(一九一七)	15	8					
大正3年(一九一四)	12	5					
大正4年(一九一五)	13	6					

\* 本年譜作成にあたっては、『雅仁親王実紀』『雅仁親王御事蹟史料』『十三松堂日記』『銀のボンボニール』等を参考にしました。



昭和4年(一九一九)	27	20	9月20日	世界動力会議(東京部会)総裁奉戴式に御臨場。		
			1月26日			
			12月24日	陸軍大学校入校式。		
			11月16日	大饗。		
			11月10日	即位礼。		
			11月4日			
			10月4日	赤坂離宮にて御披露宴。		
			9月28日	御婚儀。		
			9月26日	告期の儀。		
			9月24日			
			9月22日	「節子」から「勢津子」へと御改名。		
			9月17日	御納采の儀。		
			9月14日	皇太后より御婚儀用服を進せらる。		
			8月29日	晚餐に節子姫・松平大使夫妻をお招き。		
			7月20日	晚餐に節子姫・松平大使夫妻・長男一郎・二女正子・松平保男夫妻をお招き。		
			7月14日	英国よりお買い入れの自動車(ランチェスター)到着。		
			7月12日	皇太后主催晩餐会(殿下・節子姫・松平保男・松平恒雄夫妻・牧野内府・一木宮相・関屋次官・仙石宗秩寮総裁)。		
			6月22日	節子様、御帰国。		
			1月18日	子爵松平保男姪節子と御結婚御内約、勅許あり(御婚約)。		
			1月13日	節子様、叔父である松平保男子爵家に入籍。		
昭和3年(一九二八)	26	19	12月20日	彫刻家朝倉文夫宅へお成り(秩父宮御殿造宮の御祝のため、陛下よりの贈物として「殿下登山の像」を謹作するようにとの御下命がある)。	日仏芸術展御覧。	
			12月2日			
			10月24日			
			10月5日	新築表町御殿に御移転。		
			2月7日	大正天皇御大葬。		
昭和2年(一九二七)	25	18	1月17日	御帰朝。		
			12月25日	大正天皇崩御。		
			5月31日	英国「ヴィクトリア」大綬章御受領。		
			7月7日	ロンドン着。		
			5月24日	御渡欧(テジア、中近東経由)。		
			5月10日	陸軍歩兵中尉に御進級。両陛下御結婚満二十五年御祝宴。		
			2月	松平恒雄、駐米特命全権大使として赴任が決まり、一家、渡米前に青山御所へ参内。この折に、殿下と節子様は初めてご対面。		
大正14年(一九二五)	23	16	11月25日	東宮(昭和天皇)御結婚。	ベルギー国寄贈絵画展(社会局内)へ御成り。	アルベル・バケ「フオレスト遊園の雪景」 (展示番号7)
			12月5日	宮中御催の御成年式賜宴。(6日、7日、9日にも賜宴あり)。		箱形松唐草文ボンポニエール (展示番号5、3、4)
			10月25日	陸軍歩兵少尉に御任官。叙大勲位菊花大綬章。		
			11月26日	秩父地方へ御成。		
			9月13日	陸軍士官学校御卒業。歩兵第三聯隊に御帰隊、見習士官を拝命。	院展、二科展御覧。	
大正15年(一九二六)	24	17	9月20日	世界動力会議(東京部会)総裁奉戴式に御臨場。		
			1月26日			
			12月24日	陸軍大学校入校式。		
			11月16日	大饗。		
			11月10日	即位礼。		
			11月4日			
			10月4日	赤坂離宮にて御披露宴。		
			9月28日	御婚儀。		
			9月26日	告期の儀。		
			9月24日			
			9月22日	「節子」から「勢津子」へと御改名。		
			9月17日	御納采の儀。		
			9月14日	皇太后より御婚儀用服を進せらる。		
			8月29日	晚餐に節子姫・松平大使夫妻をお招き。		
			7月20日	晚餐に節子姫・松平大使夫妻・長男一郎・二女正子・松平保男夫妻をお招き。		
			7月14日	英国よりお買い入れの自動車(ランチェスター)到着。		
			7月12日	皇太后主催晩餐会(殿下・節子姫・松平保男・松平恒雄夫妻・牧野内府・一木宮相・関屋次官・仙石宗秩寮総裁)。		
			6月22日	節子様、御帰国。		
			1月18日	子爵松平保男姪節子と御結婚御内約、勅許あり(御婚約)。		
			1月13日	節子様、叔父である松平保男子爵家に入籍。		
昭和3年(一九二八)	26	19	12月20日	彫刻家朝倉文夫宅へお成り(秩父宮御殿造宮の御祝のため、陛下よりの贈物として「殿下登山の像」を謹作するようにとの御下命がある)。	日仏芸術展御覧。	
			12月2日			
			10月24日			
			10月5日	新築表町御殿に御移転。		
			2月7日	大正天皇御大葬。		
昭和2年(一九二七)	25	18	1月17日	御帰朝。		
			12月25日	大正天皇崩御。		
			5月31日	英国「ヴィクトリア」大綬章御受領。		
			7月7日	ロンドン着。		
			5月24日	御渡欧(テジア、中近東経由)。		
			5月10日	陸軍歩兵中尉に御進級。両陛下御結婚満二十五年御祝宴。		
			2月	松平恒雄、駐米特命全権大使として赴任が決まり、一家、渡米前に青山御所へ参内。この折に、殿下と節子様は初めてご対面。		
大正14年(一九二五)	23	16	11月25日	東宮(昭和天皇)御結婚。	ベルギー国寄贈絵画展(社会局内)へ御成り。	アルベル・バケ「フオレスト遊園の雪景」 (展示番号7)
			12月5日	宮中御催の御成年式賜宴。(6日、7日、9日にも賜宴あり)。		箱形松唐草文ボンポニエール (展示番号5、3、4)
			10月25日	陸軍歩兵少尉に御任官。叙大勲位菊花大綬章。		
			11月26日	秩父地方へ御成。		
			9月13日	陸軍士官学校御卒業。歩兵第三聯隊に御帰隊、見習士官を拝命。	院展、二科展御覧。	
大正15年(一九二六)	24	17	9月20日	世界動力会議(東京部会)総裁奉戴式に御臨場。		
			1月26日			
			12月24日	陸軍大学校入校式。		
			11月16日	大饗。		
			11月10日	即位礼。		
			11月4日			
			10月4日	赤坂離宮にて御披露宴。		
			9月28日	御婚儀。		
			9月26日	告期の儀。		
			9月24日			
			9月22日	「節子」から「勢津子」へと御改名。		
			9月17日	御納采の儀。		
			9月14日	皇太后より御婚儀用服を進せらる。		
			8月29日	晚餐に節子姫・松平大使夫妻をお招き。		
			7月20日	晚餐に節子姫・松平大使夫妻・長男一郎・二女正子・松平保男夫妻をお招き。		
			7月14日	英国よりお買い入れの自動車(ランチェスター)到着。		
			7月12日	皇太后主催晩餐会(殿下・節子姫・松平保男・松平恒雄夫妻・牧野内府・一木宮相・関屋次官・仙石宗秩寮総裁)。		
			6月22日	節子様、御帰国。		
			1月18日	子爵松平保男姪節子と御結婚御内約、勅許あり(御婚約)。		
			1月13日	節子様、叔父である松平保男子爵家に入籍。		
昭和3年(一九二八)	26	19	12月20日	彫刻家朝倉文夫宅へお成り(秩父宮御殿造宮の御祝のため、陛下よりの贈物として「殿下登山の像」を謹作するようにとの御下命がある)。	日仏芸術展御覧。	
			12月2日			
			10月24日			
			10月5日	新築表町御殿に御移転。		
			2月7日	大正天皇御大葬。		
昭和2年(一九二七)	25	18	1月17日	御帰朝。		
			12月25日	大正天皇崩御。		
			5月31日	英国「ヴィクトリア」大綬章御受領。		
			7月7日	ロンドン着。		
			5月24日	御渡欧(テジア、中近東経由)。		
			5月10日	陸軍歩兵中尉に御進級。両陛下御結婚満二十五年御祝宴。		
			2月	松平恒雄、駐米特命全権大使として赴任が決まり、一家、渡米前に青山御所へ参内。この折に、殿下と節子様は初めてご対面。		
大正14年(一九二五)	23	16	11月25日	東宮(昭和天皇)御結婚。	ベルギー国寄贈絵画展(社会局内)へ御成り。	アルベル・バケ「フオレスト遊園の雪景」 (展示番号7)
			12月5日	宮中御催の御成年式賜宴。(6日、7日、9日にも賜宴あり)。		箱形松唐草文ボンポニエール (展示番号5、3、4)
			10月25日	陸軍歩兵少尉に御任官。叙大勲位菊花大綬章。		
			11月26日	秩父地方へ御成。		
			9月13日	陸軍士官学校御卒業。歩兵第三聯隊に御帰隊、見習士官を拝命。	院展、二科展御覧。	
大正15年(一九二六)	24	17	9月20日	世界動力会議(東京部会)総裁奉戴式に御臨場。		
			1月26日			
			12月24日	陸軍大学校入校式。		
			11月16日	大饗。		
			11月10日	即位礼。		
			11月4日			
			10月4日	赤坂離宮にて御披露宴。		
			9月28日	御婚儀。		
			9月26日	告期の儀。		
			9月24日			
			9月22日	「節子」から「勢津子」へと御改名。		
			9月17日	御納采の儀。		
			9月14日	皇太后より御婚儀用服を進せらる。		
			8月29日	晚餐に節子姫・松平大使夫妻をお招き。		
			7月20日	晚餐に節子姫・松平大使夫妻・長男一郎・二女正子・松平保男夫妻をお招き。		
			7月14日	英国よりお買い入れの自動車(ランチェスター)到着。		
			7月12日	皇太后主催晩餐会(殿下・節子姫・松平保男・松平恒雄夫妻・牧野内府・一木宮相・関屋次官・仙石宗秩寮総裁)。		
			6月22日	節子様、御帰国。		
			1月18日	子爵松平保男姪節子と御結婚御内約、勅許あり(御婚約)。		
			1月13日	節子様、叔父である松平保男子爵家に入籍。		
昭和3年(一九二八)	26	19	12月20日	彫刻家朝倉文夫宅へお成り(秩父宮御殿造宮の御祝のため、陛下よりの贈物として「殿下登山の像」を謹作するようにとの御下命がある)。	日仏芸術展御覧。	
			12月2日			
			10月24日			
			10月5日	新築表町御殿に御移転。		
			2月7日	大正天皇御大葬。		
昭和2年(一九二七)	25	18	1月17日	御帰朝。		
			12月25日	大正天皇崩御。		
			5月31日	英国「ヴィクトリア」大綬章御受領。		
			7月7日	ロンドン着。		
			5月24日	御渡欧(テジア、中近東経由)。		
			5月10日	陸軍歩兵中尉に御進級。両陛下御結婚満二十五年御祝宴。		
			2月	松平恒雄、駐米特命全権大使として赴任が決まり、一家、渡米前に青山御所へ参内。この折に、殿下と節子様は初めてご対面。		
大正14年(一九二五)	23	16	11月25日	東宮(昭和天皇)御結婚。	ベルギー国寄贈絵画展(社会局内)へ御成り。	アルベル・バケ「フオレスト遊園の雪景」 (展示番号7)
			12月5日	宮中御催の御成年式賜宴。(6日、7日、9日にも賜宴あり)。		箱形松唐草文ボンポニエール (展示番号5、3、4)
			10月25日	陸軍歩兵少尉に御任官。叙大勲位菊花大綬章。		
			11月26日	秩父地方へ御成。		
			9月13日	陸軍士官学校御卒業。歩兵第三聯隊に御帰隊、見習士官を拝命。	院展、二科展御覧。	
大正15年(一九二六)	24	17	9月20日	世界動力会議(東京部会)総裁奉戴式に御臨場。		
			1月26日			
			12月24日	陸軍大学校入校式。		
			11月16日	大饗。		
			11月10日	即位礼。		
			11月4日			
			10月4日	赤坂離宮にて御披露宴。		
			9月28日	御婚儀。		
			9月26日	告期の儀。		
			9月24日			
			9月22日	「節子」から「勢津子」へと御改名。		
			9月17日	御納采の儀。		
			9月14日	皇太后より御婚儀用服を進せらる。		
			8月29日	晚餐に節子姫・松平大使夫妻をお招き。		
			7月20日	晚餐に節子姫・松平大使夫妻・長男一郎・二女正子・松平保男夫妻をお招き。		
			7月14日	英国よりお買い入れの自動車(ランチェスター)到着。		
			7月12日	皇太后主催晩餐会(殿下・節子姫・松平保男・松平恒雄夫妻・牧野内府・一木宮相・関屋次官・仙石宗秩寮総裁)。		
			6月22日	節子様、御帰国。		
			1月18日	子爵松平保男姪節子と御結婚御内約、勅許あり(御婚約)。		
			1月13日	節子様、叔父である松平保男子爵家に入籍。		
昭和3年(一九二八)	26	19	12月20日	彫刻家朝倉文夫宅へお成り(秩父宮御殿造宮の御祝のため、陛下よりの贈物として「殿下登山の像」を謹作するようにとの御下命がある)。	日仏芸術展御覧。	
			12月2日			
			10月24日			
			10月5日	新築表町御殿に御移転。		
			2月7日	大正天皇御大葬。		
昭和2年(一九二七)	25	18	1月17日	御帰朝。		
			12月25日	大正天皇崩御。		
			5月31日	英国「ヴィクトリア」大綬章御受領。		
			7月7日	ロンドン着。		
			5月24日	御渡欧(テジア、中近東経由)。		
			5月10日	陸軍歩兵中尉に御進級。両陛下御結婚満二十五年御祝宴。		
			2月	松平恒雄、駐米特命全権大使として赴任が決まり、一家、渡米前に青山御所へ参内。この折に、殿下と節子様は初めてご対面。		
大正14年(一九二五)	23	16	11月25日	東宮(昭和天皇)御結婚。	ベルギー国寄贈絵画展(社会局内)へ御成り。	アルベル・バケ「フオレスト遊園の雪景」 (展示番号7)
			12月5日	宮中御催の御成年式賜宴。(6日、7日、9日にも賜宴あり)。		箱形松唐草文ボンポニエール (展示番号5、3、4)
			10月25日	陸軍歩兵少尉に御任官。叙大勲位菊花大綬章。		
			11月26日	秩父地方へ御成。		
			9月13日	陸軍士官学校御卒業。歩兵第三聯隊に御帰隊、見習士官を拝命。	院展、二科展御覧。	
大正15年(一九二六)	24	17	9月20日	世界動力会議(東京部会)総裁奉戴式に御臨場。		
			1月26日			
			12月24日	陸軍大学校入校式。		
			11月16日	大饗。		



昭和13年(一九三八)	36	29	1月11日	大本営陸軍参謀仰せつけらる。			
			11月24日	ドイツ大使館より勳章贈進(ドイツ国勲一等鷲大綬章)。			
			10月15日	御帰国。			
			9月13日	ヒットラーと御会見。			
			8月3日	オランダ女王より御贈進の獅子大綬章御受領。			
			7月14日	御静養のためスイス、グリンデルワルトに御出発31日までスイスに御滞在。			
			6月29日	英国王より御贈進の英国「ヴィクトリア・チェイン」御受領。	殿下の正装御肖像をドーラズロ(Dora Laszlo)に描かしめらる。		
			5月19日	パッキンガム宮殿において御親書及び勳章を国王に捧呈さる。			
			5月13日	パッキンガム宮殿における大晩餐会に御出席。コロネーションメダルを御受領。			
			5月12日	英国ジョージ六世の戴冠式に御名代として御参列。英国皇帝・皇后戴冠記念章御受領。			
			3月18日	両殿下、英国ジョージ六世戴冠式に付、御渡英(カナダ、アメリカ経由)。			
昭和12年(一九三七)	35	28	2月14日	両殿下、英国ジョージ六世戴冠式に付、御渡英(カナダ、アメリカ経由)。	京都陶磁器試験場御成り(沼田一雅御案内)。		
			12月9日	御帰京。			
			12月1日	参謀本部附仰せつけらる。7日御離任。			
			8月9日	弘前へ御赴任(妃殿下御同伴)。			
			8月1日	陸軍歩兵少佐三十一聯隊大隊長に任ぜられる。			
昭和10年(一九三五)	33	26	3月20日		両殿下、帝展御成り。		
			11月24日		東京美術学校にて沼田一雅製作の秩父宮殿下馬上像鑄造完成。		
昭和9年(一九三四)	32	25	10月23日		両殿下、藤原銀次郎日瑞協会会長より瑞典国へ寄贈の茶室「瑞暉亭」を御覧。	秩父宮雅仁親王殿下騎馬像(青森・武道館、秩父宮記念スポーツ博物館所蔵)	
			12月14日				
			10月15日				
昭和8年(一九三三)	31	24	8月15、18日	御同列にて、秩父三峰地方御遊覧。三峯神社御参拝、妙法嶽御登頂ほか。	両殿下帝展御覧。		
			5月22日	参謀本部附勤務となる。	龍村平蔵、壁掛を秩父宮家へ納める。		
昭和7年(一九三二)	30	23	9月1日		両殿下、帝展御成り。		
			1月25日		正木直彦、皇太后陛下より宮殿下陸軍大学御卒業の御祝として、殿下御馬上姿の御銅像の製作を依頼される。	壁掛(天地逆旅)昭和2年、御結婚御祝の品として、昭和天皇より龍村平蔵へ御下命、昭和8年完成。戦災により焼失)	
			11月28日	陸軍大学校御卒業。天皇より軍刀一口御下賜。歩兵第三聯隊中隊長に任ぜられる。	妃殿下、皇太后陛下と共に帝展御覧。		
昭和6年(一九三一)	29	22	11月6日	エチオピア国皇帝より御贈進の神聖トリニティー大綬章御受領。	両殿下、河井寛次郎陶磁展(高島屋)へ御成り。		
			11月19日		帝展御覧。加藤土師蒔「葱文大皿」御買上。		
			11月16日		日仏芸術展御成り。		
			11月9日		資生堂にて立体写真像撮影。	雍仁親王殿下御胸像(秩父宮記念スポーツ博物館所蔵)	
			6月2日		両殿下、高松宮両殿下と共に、聖徳太子奉替展(上野)御成り。	殿下御胸像(資生堂立体写真像部謹製、秩父宮記念スポーツ博物館所蔵)昭和四年十月世界動力会議東京部会より献上。	
			5月		朝倉文夫「秩父宮御胸像」を献上。	葱文大皿(展示番号17)	
			4月13日		両殿下、ベルシャ展を御覧。		
			3月6日	陸軍歩兵大尉に任ぜられる。			
昭和5年(一九三〇)	28	21	2月15日		両殿下、帝展及びフランス美術展へ御成り。		
			11月2日		両殿下、藤田嗣治展へ御成り。		
			10月14日	晩餐にロレンス・ヴィニヨン(大英博東洋部長)夫妻をお招き(陪席者、英国大使・滝精一・正木美術学校長・大倉喜七郎ほか)。	10月11日、両殿下、英国水彩画展(黒田美術館)御成り。		
			10月9日				



昭和27年(一九五二)	50	43	1月20日	鶴沼御別邸へ御移転。		
			11月14日	岡元公使夫妻、スウェーデン国ラールフェルト公使夫妻参邸。		
			11月13日			
			11月12日			
			11月11日	タイ国皇族チュンボット両殿下参邸。		
			11月10日			
			10月27日	妃殿下、香蘭社にて御染筆。		妃殿下御遺作類(展示番号82)
			6月28日	御殿場御別邸に御帰邸。		
			5月19日	貞明皇后御舟入之御儀御参列のため御上京。以後、御葬儀等のため御滞在。		
昭和26年(一九五一)	49	42	5月17日	貞明皇后崩御。		
			2月21日	殿下、胸部手術第2回目。		
			9月6日			
			8月23日			
			8月20日			
			8月12日	殿下、胸部手術。		
昭和25年(一九五〇)	48	41	11月29日	横有恒、佐藤久一朗、加藤土師萌参邸。		
			8月24日			
			8月15日			
			8月11日			
			5月25日	帝都空襲により、宮城、大宮御所、表町御殿の大部分焼失。		
昭和20年(一九四五)	43	36	3月1日	陸軍少将に任ぜられる。		
			6月15日	御回復。		
			5月19日	御容態急変。		
昭和19年(一九四四)	42	35	12月8日	米英両国に宣戦布告。		
			9月16日	御殿場別邸へ御移転。		
			6月7日	葉山御別邸に皇太后行啓。		
昭和16年(一九四一)	39	32	3月1日	大本営参謀を免ぜられる。		
			10月6日	葉山御別邸に御移転。		
			8月1日	箱根に御転地。		
			6月21日	御発病。(気管支炎の御兆あり)7月29日に御床払いされるが、8月に入つて再び御発熱。以後、病をおして公務等を行われる。		
昭和15年(一九四〇)	38	31	1月15日	紀元二千六百年奉祝会役員総会に御臨席(20日、21日、25日、27日には百貨店開催の奉祝展に御成り)。		
			8月1日	陸軍歩兵大佐に任ぜられる。		
			6月28日	タイ国王より御贈進の「マハ・チャクリ」最高勲章御受領。		
			5月22日	妃殿下、財団法人結核予防会総裁に御就任。		
昭和14年(一九三九)	37	30	4月20日			紀元二千六百年奉祝展覧会(東京高島屋へ御成り)。
			9月3日	イタリア国王エテオピア皇帝より御贈進のサンティッシマIIアマンチアータ最高勲章御受領。		肇国創業絵巻(展示番号13)
			3月1日	陸軍歩兵中佐に任ぜられる。		
			4月10日	紀元二千六百年奉祝会総裁奉戴式に御臨場。		
			3月1日			



昭和28年(一九五三)	50	7月8日	御殿場御別邸に御滞在。	加藤土師萌参邸。陶器製作指導、ロクロ御稽古。	
		7月14、16日		加藤達美参邸、御作品窯詰め、素焼終了。	
		7月21日			
		7月23日	元ベルギー大使パッソン・ヒエール、オーストラリア大使ウオーカー夫妻ら参邸、御会食。お湯呑みに絵付けをしてお楽しみあり。		
		7月24日		加藤土師萌・達美参邸。窯詰め終了。	
		7月26日		窯出し。御自作抹茶茶碗等出来上がり御満足。	
		10月25日		藤原銀次郎参邸、殿下御自作の抹茶茶碗を賜る。	茶碗 銘「瑞光」(展示番号811⑩)
		11月5日		ドゥマンに御自作茶碗を賜う。	
		11月14日		加藤土師萌参邸。	
		12月31日	御重態。		
		1月4日	御危篤、薨去。		
	44	3月	妃殿下、赤坂日本館に戻られる。		
		11月24日		秩父宮御遺作展(29日まで、銀座松屋にて)。	殿下御遺作類(展示番号811)
		12月12日		秩父宮御遺作展(20日まで、心齋橋松阪屋にて)。	殿下御遺作類(展示番号811)
昭和29年(一九五四)	45	7月1日		秩父・霧深ヶ峰における殿下レリーフ除幕式御参列。	殿下御肖像レリーフ(北村西望作)
		12月		妃殿下、加藤土師萌個展(松坂屋)御覧。	
昭和30年(一九五五)	46	11月11日		妃殿下、浜田庄司窯御成り。	
昭和31年(一九五六)	47	7月29日		御殿場御別邸にて第一回三峰窯陶づくりの御集い。	
昭和32年(一九五七)	48	4月10日		妃殿下、河井寛次郎陶業四十年記念展御成り。	
昭和33年(一九五八)	49	2月8、9日		妃殿下唐津焼中里邸御成り。	
		11月12日		青森県立体育館秩父宮記念室へ殿下御使用のスキー、殿下騎馬像を御寄贈。	秩父宮雅仁親王殿下騎馬像
昭和34年(一九五九)	50	1月6日		秩父宮記念スポーツ博物館(国立霞ヶ丘陸上競技場)開設。殿下御使用のスポーツ用具、殿下騎馬像など御寄贈。	秩父宮雅仁親王殿下騎馬像、殿下立体写真御胸像、ラグビー群像(齋藤素厳作)ほか
昭和36年(一九六一)	52	11月25日		加藤土師萌個展(日本橋三越)御覧。	
昭和37年(一九六二)	53	7月21日	英国、スウェーデン国の招待により、日英協会・日本瑞典協会の名譽総裁として御訪問(フランス、デンマークお立ち寄り)。		
昭和42年(一九六七)	58	1月27日	ロンドン日英協会の招待により、日英協会創立75周年式典に御臨席のため御訪問。		
昭和44年(一九六九)	60	4月8日	スウェーデン皇帝よりセラフィム大綬章御受領。		
		10月	(財)交通遺児育英会名誉総裁御就任。		
昭和45年(一九七〇)	61	5月8日	旧王族李垠氏の葬儀参列のため大韓民国へ御旅行。		
昭和47年(一九七二)	63	11月	松方三郎編纂「雅仁親王実紀」刊行。		
			新本邸完成。		
昭和49年(一九七四)	65	6月7日	英国の招待により国際親善のため御訪問。	秩父宮記念三峯山博物館開館。	
昭和51年(一九七六)	67	11月9日			
昭和53年(一九七八)	69	10月9日	英国よりセント・マイケル、セント・ジョージ勲綬大綬章を御受領。		
昭和54年(一九七九)	70	6月4日	英国の招待により、国際親善のため御訪問(アメリカ合衆国お立ち寄り)。		
昭和56年(一九八二)	72	10月17日	英国の招待によりロンドンでの江戸大美術展開会式のため御訪問(スイスお立ち寄り)。		
昭和60年(一九八五)	76	3月4日	ネパール国の招待により、国際親善のため御訪問(タイお立ち寄り)。		
昭和62年(一九八七)	78	2月3日	高松宮宣仁親王薨去。		
昭和64年(一九八九)	80	1月7日	昭和天皇崩御。		
平成2年(一九九〇)	81	11月12日	御即位大礼。		
平成3年(一九九一)	82	6月27日	妃殿下御著書「銀のボンボニール」刊行。		
平成7年(一九九五)	85	8月25日	勢津子妃薨去。		
平成8年(一九九六)		9月		秩父宮家御遺贈の美術工芸品が宮内庁二の丸尚蔵館へ移管される。	
平成12年(二〇〇〇)		8月22日		秩父・霧深ヶ峰に妃殿下のレリーフ設置。	妃殿下御肖像レリーフ(法元六郎作)



# 作品解説

※解説中、「実紀」と記すのは『雍仁親王実紀』、『御事蹟資料』は『雍仁親王御事蹟資料』を指す。

## 1 雍仁親王殿下・勢津子妃殿下御肖像

### 1-1 両殿下御写真 (展示は十九点)

明治三十五年～昭和四十年代後半

当庁で保管している秩父宮両殿下の御写真類には、乾板や印画類、また宮家で保存されていた印画類などがある。本展の展示では宮内庁で保管されてきたものと、宮家から当館への御遺贈品の中に含まれていた印画写真を紹介し、また当図録では、両殿下がお二人で過ごされた時期までの御様子をなるべく多く紹介するためにその他の資料も加えている。

雍仁親王殿下の御写真の最初は、『実紀』にも記されているように、明治三十五年八月十七日、宮内省調度寮の囑託であった丸木利陽(一八五四～一九二二)によって撮影されたものである。淳宮殿下生後五十日余、一般の宮参りにあたる賢所参拝を終えて四日後の撮影であった。その後、川村伯爵邸に迪宮殿下(昭和天皇)と共に預けられた淳宮殿下の御姿は、フランスから取り寄せたレースの洋服を召して地球儀や木馬と共に撮影された可愛らしい御写真が遺るほか、ほぼ毎年、何らかの形で記念的に撮影が行なわれている。光宮殿下(高松宮)が誕生されてからは、お三人の写真が多くなるが、迪宮殿下が東宮になられてからは、光宮殿下とお二人のものが多くである。

昭和三年の御婚儀関係の御写真も宮内省によるものであるが、表町御殿の庭園内でお二人で写されている写真は、殿下がお持ちのカメラによるものと思われる。殿下は大正天皇より戴いたカメラを最初として、御自身でも撮影をされていた。また、昭和十二年に英国国王戴冠式参列のため渡英された折には、その御正装がロンドンの王室写真家ヴァンダイク氏によって撮影されている。戦後は、積極的に新聞社や出版社の取材もお受けになっており、その際の御写真が大切に保存さ

れて、両殿下に関わる出版物などでも公開されている。(太田)

### 1-2 雍仁親王殿下・勢津子妃殿下御肖像

熊沢観明 三点

- ① 絹本墨画 五一・三×三六・八 昭和二十四年
- ② 絹本墨画 四七・二×三四・九 昭和二十五年
- ③ 紙本墨画 三七・〇×二六・五 昭和二十三年

殿下が薨去されて間もなくの昭和二十八年一月六日、読売新聞に「差上げた肖像画にお喜び／御署名をいたゞいた熊沢画伯」と題して、秩父宮殿下を偲ぶ熊沢氏の記事が載せられている。これによれば、日本画家・熊沢観明(一九一〇～)は昭和二十三年一月二十日に御殿場御別邸でスケッチしている。「執事を通じて知名人スケッチ集の第一ページを飾りたいからと申入れたところ廿三年の一月廿日お招きがあり参上しました。スケッチは十五分間というお約束で八畳の和室でお会いしたところ「ぼくも知名人の一人なのかね」とおっしゃるほどのくだけた態度にかえってこちらがびっくりし、とうとう一時間以上も何枚も描かせて頂きました。描き上った肖像画を差上げたところたいへんお喜びで、スケッチには「雍仁」とご署名まで頂きました。」とのこと。紙面には、御署名の入ったスケッチも載せられているが、ほぼ本図と同様である。

『実紀』によれば、昭和二十四年四月二十五日にも熊沢氏が参邸している。この折にスケッチをもとにした殿下の肖像画が献上されたかと考えられる。(太田)

### 1-3 勢津子妃殿下御肖像 藤田嗣治 一点

紙本淡彩 一九・一×二二・八  
昭和二十三年

『実紀』によれば、昭和二十三年十二月十二日、洋画家・藤田嗣治(一八八六～一九六八)が、米国美術記者のシャーマン氏と共に別邸を訪れている。本図に記される年号から、この画はこの参邸の折に行なわれたスケッチと考えられる。

素描力に優れ、細かい線描を得意とした藤田の特徴が表れており、また明朗な妃殿下の表情がよく捉えられた佳品である。藤田は明治四十三年に東京美術学校を卒業して後、渡仏して研鑽、活躍した。昭和四年に

一時帰国。その後、日本とフランスを行き来しながら活躍し、国内では二科会会員や帝国芸術院会員などになって活躍。昭和二十四年にはアメリカを経てフランスに渡り、昭和三十年にフランスに帰化。両国で活躍し評価された画家であった。(太田)

### 1-4 勢津子妃殿下御肖像 林武 一点

紙本、パステル 二九・四×三七・八  
昭和三十三年

作品に付属する伝来によれば、昭和三十二年に立教小学校より献上されたもの。立教小学校は、昭和二十三年に開校した年より、初代校長・有賀千代吉が、毎夏キャンピングの際に児童と共に両殿下をお訪ねして交流をはかっていた。本作は、昭和二十七年の夏、両殿下が御別邸で児童たちと交流され、三峰寮で焼き物のお話をされた時の記録写真をもとに、妃殿下の明るい笑顔を洋画家の林武がパステルで描いたもの。さわやかな妃殿下のイメージがよく表れた作品である。林武(一八九六～一九七五)は、二科展で活躍し、戦後は東京芸大の教授を務め、昭和四十二年に文化勲章を受章した洋画家として知られる。

なお、殿下が薨去された際には、殿下を囲んだ楽しい思い出の記念にと、楽しみに笑い集う両殿下と子供たちのブロンズ製レリーフが、昭和二十八年三月に妃殿下に渡されている(当館に現存)。このレリーフは、当時、同校で図工科の非常勤講師を務めていた三坂耿一郎(一九〇八～一九九五)による作品である。三坂は東京美術学校彫塑科を卒業、日展で活躍し、日本芸術院会員にもなった。(太田)

## 2 秩父霊峯春暁 横山大観 一幅

絹本墨画 六七・二×一一三・五  
昭和三年(一九一八)

本作は、秩父宮家創設に際し、埼玉県の秩父神社がその名に因んで献上することを目的として、横山大観(一八六八～一九五八)に制作を依頼したものである。現在の秩父三峯神社には昭和三年当時の『芳名録』と『日誌』が伝えられているが、それによると、横山は作品構想を練るべく、斎藤隆三、中村岳陵、黒須洪志と



もに同年四月二十日夕刻に秩父山に入山し、翌二十一日にかけてスケッチを重ねたのち、下山している。秩父神社をはじめ横山に制作依頼を申し入れた期日についてはつまびらかではないが、横山大観記念館に残される史料から判断すると、横山が神社と正式に契約をとりかわしたのは、帰京後の四月二十七日のことであった。その後、『東京朝日新聞』の伝えるところでは、早くも六月中には額装作品として完成させている。そして、七月六日に神社側に作品が引き渡され、同月十二日には、神社から社司の蘭田稲太郎名をもって殿下に献上されたことが、『三峯神社日鑑』などから確認される。

昭和前期の横山の水墨画には、ともすれば観念的な主題と定型の構図を繰り返しただけの平板な作品も少なくない。しかし、そのなかで本作は珍しく真摯な写実的態度を制作の根幹としており、秩父連峰を包む朝の澄明な空気と清浄な光の輝き、雄大な雲煙の流れが熟達した描法により、あますところなく表現し尽くされている。自然の姿をいつわりなくとらえる写生眼と端正な古典的造型意欲が無理なく調和して、気高い画面をかたちづくることに成功した、昭和前期の横山の画業を飾る傑作である。なお、現在の軸装の形状への改変は、昭和後期になつてからなされたものと考えられる。(大熊)

### 3 奥秩父妙法嶽 和田英作

油彩・カンヴァス 一〇〇・〇×一二・三  
昭和三年(一九二八)

一点

和田英作(一八七四〜一九五九)は昭和期に、あくまでも堅実な写生を基調としつつも、そこに淡く静かな情感を込めた風景画を多く描きあらわした。本作は、そうした和田の後半期の画業のなかでも、もつとも高い完成度をみせる一点である。三峯山妙法ヶ岳の雄渾な山容が、ふもとの秩父峽地から仰ぎみられる構図でとらえられており、初夏のみずみずしい緑に彩られた奥秩父のたたずまいが、絶妙な色彩感覚のもとでいきいきと量感豊かに表現されている。その制作にあたって、和田は「約三ヶ月間他の一切の仕事をなげうち東京、秩父間を往復心血を注い」だという(『東京朝日新聞』昭和三年九月六日付)。画家のそうした熱意が実り、どちら

かという静謐な性格が色濃く和田の風景画のなかでは珍しく、本作の画面には内面から漲るような生命感が息づいている。平板かつ情緒的に流れがちな和田の同時期の他の風景作品とは一線を画した、深みと確かな実在感に満ちた優品といえるだろう。秩父宮殿下御成婚の奉祝品として、学習院の職員および学生一同の依頼により制作されたものである。(大熊)

### 4 妙法山遠望図蒔絵巻筒箱 赤塚自得

木製漆塗、蒔絵 一五・四×二・九×七・五  
昭和三年(一九二八)

一点

眼鏡をかけた登山服の人物が山中にたえずむ姿を蓋表左に配し、山並みの遠景を表した巻筒箱。伝統的な蒔絵技法によりながらも、西洋画を思わせる写生的な表現となつている。本作の外箱に「妙法山遠望図巻筒箱」と蒔絵銘があり、この妙法山とは秩父宮の称号がとられた秩父三峯山・妙法ヶ岳であり、登山姿の人物は雍仁親王殿下であろう。殿下は日本の山々をはじめ、海外御滞在時にも登山に親しまれており、三峯山には大正十四年(一九二五)に初めて登られている。

本作は、昭和三年(一九二八)御結婚の折に蜂須賀正氏(一九〇六〜五三)より献上された。正氏は旧徳島藩蜂須賀家第十八代当主で、ケンブリッジ大学を卒業し、鳥類学者として知られている。雍仁親王殿下とは学習院初等科以来の御学友であり、『実紀』からは、殿下晩年にたびたび参邸してミモザや椰子の植木を献上するなど、交友を温めていたことがうかがわれる。

作者の赤塚自得(一八七四〜一九三二)は、東京に生まれた。赤塚家は代々、平左衛門を名乗り、漆工を業とし、自得はその七代目にあたる。蒔絵を父に学び、日本画を狩野久信、寺崎廣業に師事し、白馬会研究所で洋画の研究も重ねた。大正、昭和初期にかけて活躍、各種展覧会の審査員をつとめ、昭和五年には帝国芸術院会員となり、昭和初期の漆芸界の指導者であった。

(五味)

### 5 ポンボニエル

5-1 鼓形若松に星文ボンボニエル 一点

銀製 四・二五×五・八×四・二五

昭和三年(一九二八)

5-2 手箱形雲鶴文ボンボニエル 一点

銀製 六・三×四・四五×三・一

大正十一年(一九二二)

5-3 文箱形松唐草文ボンボニエル 一点

銀製 五・二五×三・九五×一・九

大正十一年(一九二二)

5-4 文箱形松唐草文ボンボニエル 一点

銀製 五・六五×四・二五×二・二

大正十一年(一九二二)

5-5 鏡箱形雲に鳳凰文ボンボニエル 一点

銀製 D六・一 H三・六

大正昭和前期

ボンボニエルとは、様々な意匠を凝らしたお菓子入りの小箱のことで、皇室では、近代以降、大札や御結婚、成年式など御慶事の折の引き出物としてきた慣わしがある。妃殿下は、その御著書『銀のボンボニエル』の中で、ボンボニエルに対する特別な想いを記されているが、その題名となつたものが、鼓形のボンボニエル(展示番号5-1)である。これは、御結婚を控えた昭和三年(一九二八)七月十二日の貞明皇后が主催された御内宴においてお手ずから両殿下に賜つたもので、その意匠は貞明皇后御自身が御考案されたという。鼓の胴部には若松と星が散らされ、ローズ色の調子が掛けられている。ローズ色は、殿下が留学されたイギリスの国の色であり、若松は殿下のお印、星はアメリカで学ばれた妃殿下を表している。このデザインは、二人で英米との親善につとめよとの貞明皇后の思召によるもの、との妃殿下御自身の書きつけ(P18図版)が作品に伴っている。箱形のもの、いずれも大正十一年(一九二二)の殿下御成年式の時のもの。鏡箱形のもの(展示番号5-5)はその由緒は今のところ明らかでないが、おそらくは御渡欧の折に作られたものではないかと考えられる。

当館は、大正から昭和期にかけて制作されたものを中心に、およそ百五十点余のボンボニエルを収蔵しているが、すべて秩父宮家御遺贈品である。その中には、妃殿下御自身がそれぞれの由緒を小さな紙に認めて中



に納められたものが含まれ、その伝来を知ることができ。技術的にも優れており、年代による変遷も示されている。妃殿下がいくつか作られたこれらのボンボニールは工芸史的にも価値の高いものとなっている。

(五味)

## 6 雍仁親王殿下御愛用関係品

### 6-1 スキーヤー

一点

銀製 H一五・五

昭和三年(一九二八)

### 6-2 スカル(アイシス号)模型

一点

木製 一〇〇・五×一七・〇

昭和三十年(一九五五)

スキーヤーは、昭和三年七月十四日に宮家に到着した英国製の自動車・ランチエスターのボンネット上に飾られた装飾品である。ジャパン・ソサイエティーから御結婚の御祝いとして贈られた。

またスカル模型は、殿下が愛用されていたアイシス号の模型で、昭和三十年十月に福島県漕艇協会から献上されたものである。名のアイシスは、殿下の御遺作文集『思い出の記』の「テムズ河—オックスフォードではアイシス河といっています…」との記述より、留学の思い出の地・オックスフォード、そしてスカルを漕いだ思い出の河の名であることが知られる。

いずれも、スポーツの宮様といわれた殿下を偲ぶ作品である。

(太田)

## 7 陶彫唐獅子 沼田一雅

一对

陶磁 阿像・五六・五×四三・五×六七・五

呼像・五六・〇×四三・五×六八・五

昭和三十四年(一九二八)一九二九

『御事蹟資料』に所収の沼田一雅(一八七三—一九五四)の「陶彫に関する御思出話」によれば、昭和四年(一九二九)、東京美術学校校長正木直彦を通じて秩父宮家より沼田に対し表町御殿玄閑協置物の制作依頼があった。秩父宮殿下より「ブロンズでは面白くないから、是非、陶彫で」との御意向を受け、沼田は同年十月に「陶彫唐獅子一对」を納めた。それをご覧になった殿下が大

変ご満足され、さらにもう一对制作するよう御下命があった。また、正木直彦「十三松堂日記 第二巻」には「陶彫唐獅子」に関する記事が散見され、より詳しい制作の経緯を知ることができる。それによると、昭和三年二月四日に正木から沼田に対し制作依頼がなされた。この時点で、その制作年について昭和四年に依頼を受けたとする沼田との記憶違いがみられるが、日記という性質上、正木の記述の方が正確と思われる。同年九月二十二日の項には秩父宮家玄閑に陶彫唐獅子の据え付けを行い、ちょうど御殿に帰館された殿下がご覧になっている。前述の沼田はこのときに再度の御下命があったことを記憶していて、のちに『御事蹟資料』でそのエピソードを披露したのだろう。

なお、現在、埼玉県秩父郡にある三峯神社内の秩父宮記念三峯山博物館には、秩父宮家から御下賜されたそのどちらかと思われる沼田の「陶彫唐獅子一对」が収蔵されている。全体の寸法などから同じ型から取られたものと思われるが、当館収蔵品よりやや釉薬の色調が薄いほか、台座背面の作者彫銘の大きさや首の後ろあたりのたてがみの流れる方向が異なるなど、部分的にわずかながら違いがみられる。戦災による消失などにより現存する大型の陶彫作品が少ない沼田であるが、本作はその動物陶彫を代表する作品であろう。本作の成果を生かしたのか、沼田は昭和四年第十回帝展に「陶製置物 獸王」と題する獅子像を出品した。(岡本)

## 8 両殿下御遺作類

### 8-1 雍仁親王殿下御遺作類

雍仁親王殿下は、結核の為に御静養の地とされた御殿場御別邸に、陶芸家・加藤土師萌氏の指導を仰ぎ、昭和二十五年に三峰窯を築造、自ら陶芸制作を行われた。体調の良い時期を選んでの制作であり、初窯以来は年に一度の火入れ、窯出し作業で、結局はわずか三窯で終わっている。しかし、わずかな回数とはいえ、製作に打ち込まれた殿下の様子、出来上がった作品は、指導した加藤氏を唸らせるものでもあった。秩父宮御遺作図録『玉葉流芳』の加藤氏の記述によれば、「殿下の製作態度はまことに素直で、我意野心がない、そして堅実そのものである、端正な形で而も決して出たらめに造

形されるのではなく念頭に在る一定の形態を目標とされ、意に添わぬ形のものには折角出来ても直ぐに潰してしまわれる、妃殿下が絶えず添われ、御自身も御鉢に細心の注意を払われて決して御無理を遊ばされなかつた。」とある。また「殿下の御製作態度は極めて良心的であり、土練こそ御鉢にさわるので私がすれ、ろくろの水挽から、削り仕上げ、絵付、釉かけに至るまで一切御自身で処理されたので、秩父宮様の御作品は文字通りの御自作である。土、絵具、釉薬についても夫々の組成、性格につき御質問があり頗る学究的である。」そして「僅々三ヶ年の而も限られた一夏の数日間過ぎぬ御精進を以て、かくの如き気高い格調の御作品をものされた殿下の御素質には実に驚歎すべきである。

殿下の御生命には限りがあったとはいえず、その御作品は貴重な文化財であり、永劫に消えぬ生命として輝き伝えられるであろう。」と、その記述を締めくくっている。殿下と共に陶器製作に携われた加藤氏のこれらの記述に、殿下の陶器製作を語るものはない。

そこで、ここでの各作品解説は、『玉葉流芳』収載される本展示作品①、及び③④⑤⑥⑦⑧については、加藤土師萌氏の記述を引用させていただき、その紹介とさせていただきます。なお、題名の「茶盃」は「茶碗」に、寸法は当館で測定したcm単位に改めている。

また、これらの作品には、妃殿下の御命名による銘が妃殿下直筆によって箱書され、特に「銘 面影」には妃殿下が殿下を偲ばれた御歌も認められている。(太田)

### ①方竹花筒 銘 園生

一点

竹 九・七×九・八×五二・八／五・八×六・六×五三・五

殿下が方竹にも興味をもたれて、御邸内の竹林で数多これを試みられ、その中にこうした美事なものを得られた。利休の小田原陣中ならぬこ御殿場の地で同じく花入に応用されたのである。下版のもの(P22図版右のもの)は、箱造りが小さかつたと見えて、胴に窪みを生じたが、却つて風情を添えて面白い。

(玉葉流芳)加藤土師萌氏文

### ②茶碗(タイ国チュンポット妃殿下と共に絵付)

一点

D二二・九、H七・九 高台D六・三

昭和二十六年(一九五二)



昭和二十六年十一月十一日に、御殿場御別邸に来邸されたタイ国皇族チュンポット殿下と共に、絵付けされたもの。妃殿下の日記『玉葉流芳』及び『銀のボンボンエール』収載には、その製作について「来朝中のタイ国皇族チュンポット両殿下をお迎えするにつき準備忙し。食卓の花は外庭に咲きのこりのりうのうぎくに、りんどう二輪、布目の色の紙型水盤に。御食後のおなぐさみに、加藤先生の説明の下に丁度出来上れる素やきのお茶碗やら小カップに絵付けおすすめする。両殿下とも心よくすぐ筆とられ、子供やら花やらおもしろく書かれる。宮様もチュンポット妃殿下と寄せがきなど遊ばす。」と記されている。(太田)

③茶碗 銘 裾野春

陶磁 D二・七 H六・七 高台D六・八  
昭和二十七年(一九五二)

口辺に皮鯨風にかけられた青釉に春色を想わしめる、この茶碗は最後の御作でいわば絶作ともいえるが又、それだけに風趣があり、底面にも釉がかかり目焼にされている。(玉葉流芳)加藤士師萌氏文

④茶碗 銘 面影

陶磁 D二・〇 H七・七 高台D五・二

端正な形に、結晶質の天目釉が正に垂れ落ちんまできよく熔けて、ろくろ目も鮮かに見事な出来栄である、この天目釉は特に好まれて扱われた釉の一つである。(玉葉流芳)加藤士師萌氏文

⑤茶碗 銘 母衣

陶磁 D一・五 H七・七 高台D五・五  
昭和二十六年(一九五二)

この茶碗は堅手(磁質)で、絵付のあるのはこれ一点だけである。熊谷草の葉を染付で、花を鉄砂で、文様の空間は黒釉で塗り潰されている、この植物がお好きなせいかよくその特徴がとらえてあり、熊谷草に因んで母衣とは実にびつたりしたよい御銘である。(玉葉流芳)加藤士師萌氏文

⑥茶碗 銘 冬籠

陶磁 D二・三 H六・八 高台D五・八  
昭和二十六年(一九五二)

頗る素直な茶碗である、ろくろの泥目を生かして、高台際は半月の土見せに釉が施され、白釉のなだれを水柱に見立てられての御銘である。腰から高台にかけて鮮かに火色が出て一入美しさを添えている。(玉葉流芳)加藤士師萌氏文

⑦茶碗 銘 若竹

陶磁 D一・二 H七・五 高台D七・〇

どつしりとした形、おおらかなろくろの楯目千段に、青釉が濃く美しい発色で、思い切つて大きくとられた高台、到底初歩とは思えぬ大胆なろくろ振りである。胴中と口辺が稍くびれて引締り、内面から口辺に土灰白釉を流しかけてから、仰向けにして青釉に突込みかけられ、高台内に釉窓を生じ、高台先は釉かかりのまま目焼にされている。(玉葉流芳)加藤士師萌氏文

⑧茶碗 銘 つ、鳥

陶磁 D一・四 H八・四 高台D六・二  
昭和二十六年(一九五二)

腰丸の切立形に、黄瀬戸風の釉がかり、背高い形に対処して高台を極めて低くとられた辺り実に賢明である。御別邸の樹々を時折訪れるつ、鳥(ほととぎす科)と碗の筒形とを結ばれての御銘。(玉葉流芳)加藤士師萌氏文

⑨茶碗 銘 紅富士

陶磁 D一・六 H六・七 高台D六・三

単純な形に、釉下に黄土(赤染)をかけてから長石の単味釉が施されている、恰度紅志野同様の技法によつたもので、ほのぼのとした温雅な色感を呈し、曙の富士を連想されたことであろう。(玉葉流芳)加藤士師萌氏文

⑩茶碗 銘 不二月

陶磁 D一・五 H八・八 高台D六・四  
昭和二十六年(一九五二)

形の上からも又、釉調からも一見して宋の均窯を想

わしめる作品である。ふつくらとした腰丸形、引締つた口作り、高目な撥高台に白斑の単色釉が美しい、富士の霊峰と月に寄せられた御銘。(玉葉流芳)加藤士師萌氏文

⑪茶碗 銘 瑞光

陶磁 D一・五 H七・三 高台D六・八  
昭和二十七年(一九五二)

光悦を想しめる作品である、端正な小服の茶碗から次第にろくろの御上達ともにかかる大胆にして佻びな境地のものへと進まれた。この茶碗は水挽きの糸切が見るソギ出し高台の技法によられたものであるがその篋目も鮮かで、古瀬戸風の黄鉛釉が重厚にかかつており、藤原銀次郎氏拜領のもので、同氏はこの茶碗を恰も、愛児を育成するが如く、朝に夕に愛用され今は唯一の家宝といわれている。(玉葉流芳)加藤士師萌氏文

この茶碗は、昭和二十七年十月二十五日、鶴沼の御別邸に来邸した藤原銀次郎に、殿下が下賜された御自作の茶碗である。藤原銀次郎(一八六九—一九六〇)は、三井銀行、富岡製糸所、王子製紙、三井物産などで手腕を發揮した実業家であり、昭和十五年に大王子製紙の会長を辞して後は、商工大臣、国務大臣などの政界の要職も務めた。茶人でもあり、秩父宮殿下が日本瑞典協会の総裁を務められていた関係から、昭和十年三月二十日、スウェーデンに寄贈する茶室「瑞暉亭」を一緒に御覧になったことなどから、以後、ごく親しいお付き合いがあったようである。この茶碗は、昭和六十二年に藤原家より妃殿下に返上された。(太田)

⑫汲出茶碗 銘 残照(鉛釉)

陶磁 D九・〇 H七・〇  
昭和二十五年(一九五〇)

⑬汲出茶碗 銘 野分(黄伊羅保釉)

陶磁 D八・五 H六・〇  
昭和二十五年(一九五〇)

⑭汲出茶碗 銘 牧場(青織部釉)

陶磁 D九・〇 H六・二  
昭和二十五年(一九五〇)



⑮湯呑 銘雪解 一点

陶磁 D六・三 H九・五  
昭和二十六年(一九五二)

偶然による灰被の景色は、茶碗「知命」と好一對である。雪が解けて、地面の一部が覗く様を見立てられての銘であろう。  
〔玉葉流芳〕加藤土師萌氏文

⑯大湯呑 銘五輪 一点

陶磁 D七・五 H一〇・七  
昭和二十七年(一九五二)

最初に試みられた紐造りの御作品である、磁器土はとかく粘力にも乏しく又亀裂を生じ易いのが常であるが、無傷によく出来たものである。染付で即興的に描かれた丸文は、オリンピックを表徴されたものかどうか殿下の意図はわからぬが、恰度五輪が配置されている。  
〔玉葉流芳〕加藤土師萌氏文

⑰栗鼠灰皿 一点

陶磁 D二・五 H二・三  
昭和二十五年(一九五〇)

御殿場の御別邸では、椎茸も栽培されており、この椎茸を食べに時折栗鼠が来るとの事である、その情景を御病床にあられて御覧になり造形に移されたものである。一見稚拙に見えてなかなかその動的な栗鼠の姿態が端的によく捕えてあり、面白いアイデアである。純然たる手ひねりである、之が複製を宮家から依頼され、仿作して見ると更にそのうまさが一入よくわかつたのである。  
〔玉葉流芳〕加藤土師萌氏文

⑱熊谷草灰皿 一点

陶磁 D二・二 H三・七  
昭和二十五年(一九五〇)

御殿場に自生する熊谷草を写生的に造形されたもので、手ひねりの労作で花の萼など実到手の切れるような薄作である。着彩は、柿釉、天目釉、均窯などで、釉の濃淡とその彫刻的技法とよく調和している。  
〔玉葉流芳〕加藤土師萌氏文

⑲殿下御染筆「仁以接事」 篆刻・清水柏翁 一面  
木 二二四・〇×二九・〇

昭和四十四年(一九六九)

殿下御染筆の文字は、大正六年一月二日の御書初のもの。当時、皇子傳育官を務め、後に國學院大学長となった石川岩吉が拝領した御書初(御書初の本書は三峯神社博物館に収蔵されている)の文字を、秩父在住の清水柏翁氏が篆刻して宮家に納めたもの。

清水柏翁(一八八四―一九七九)は、明治期風景写真の草分け的存在。写真業を秩父の写真家として知られる息子・武甲(一九一三―九五)に譲つた後は、篆刻や書道に転じ、第四回日展(昭和二十三年)にも書「倪雲林燕乳歌」を出品している。  
(太田)

8-2 勢津子妃殿下御遺作類

①御染筆茶碗 銘 篠 荒川豊蔵 一点

陶磁 D一・〇 H九・三 高台D六・七  
昭和四十年(一九六五)

②御染筆茶碗 銘 鶴 荒川豊蔵 一点

陶磁 D一・〇 H九・四 高台D六・五  
昭和四十年(一九六五)

昭和四十年十月二十八日、妃殿下が岐阜国体にお出かけの折、荒川豊蔵の水月窯・大萱陶房にお立ち寄りになった際、豊蔵製作の茶碗に御染筆されたもので、いずれも妃殿下の御命名による。①は志野茶碗に篠竹の絵と御名、②は瀬戸黒茶碗に「加、り火」と御名の文字を御染筆されている。高台脇、或いは高台中に豊蔵の号・斗出庵に因む「斗」の刻銘がある。

荒川豊蔵(一八九四―一九八五)は、桃山陶器の再現に取り組み、昭和三十年には重要無形文化財「志野」「瀬戸黒」保持者、いわゆる人間国宝に認定されている。妃殿下がお立ち寄りになったこの年の十一月には紫綬褒章、昭和四十六年には文化勲章を受章している。  
(太田)

③御染筆皿 富士に和歌 香蘭社 一点

陶磁 D二五・〇 H五・〇  
昭和二十六年(一九五二)

昭和二十六年十月二十七日から十一月三日まで、広島と佐賀をご旅行された妃殿下が、佐賀の香蘭社にお立ち寄りになった際に絵付けされたもの。高台中に香蘭社の印と共に、昭和二十六年十一月二日と記される。

日々、御殿場御別邸で殿下と共に御覧になつてゐる富士山の姿と、その姿に馳せる思いを詠まれた妃殿下のお心には、御別邸におられる殿下を気にかけている様子が窺える。  
(太田)

④御染筆茶碗 銘 椿 十二代中里太郎右衛門 一点

陶磁 D一三・八 H七・七 高台D五・七  
昭和三十三年(一九五八)

昭和三十三年二月八日、唐津市の日赤病院の開院式にご出席のために同地を訪られた妃殿下は、唐津焼の名家・中里太郎右衛門を訪ねられ、茶碗に御染筆された。箱蓋裏に妃殿下直筆で「椿」の銘が記される。

十二代中里太郎右衛門(一八九五―一九八五)は、現在の唐津焼隆盛の基を築いた陶芸家。昭和四十四年には大徳寺に参禅して得度、法名・洞翁宗白、号・無庵を受け、昭和五十一年には重要無形文化財「唐津焼」保持者に認定されている。  
(太田)

⑤御染筆茶碗 富士山 五代尾西楽斎 一点

陶磁 D二・〇 H七・〇 高台D六・〇  
昭和二十九年(一九五四)

昭和二十九年三月二十二日―二十四日、日本赤十字社奈良県支部主催同管内の赤十字奉仕団大会にご臨席のため奈良市を訪られた妃殿下は、赤膚焼の窯元である尾西楽斎のもとに立ち寄り、御染筆された。赤膚焼は、古くより茶器の製作を手掛けて知られ、五代楽斎(一九一〇―)も茶陶を得意とした作家である。  
(太田)

⑥妃殿下御染筆「秩父湖」 篆刻・清水柏翁 一面

木 六〇・五×三〇・〇  
昭和三十八年(一九六三)

荒川水系本川上流の埼玉県秩父郡大滝村に、洪水調節、かんがい、発電を目的とした多目的ダムとして昭和三十六年十二月に完成した二瀬ダムによってできた人造湖に、翌三十七年五月、妃殿下が「秩父湖」と名付けられた。現在、秩父湖は奥秩父の観光名所の一つとして親しまれており、湖畔の公園には妃殿下の書による「秩父湖」の石碑が建つ。

本作は、その石碑の拓本から縮小したものを、清水柏翁氏によって昭和三十八年に篆刻され、宮家に納め



られたものである。幼い時期を外国で過ごされた妃殿下は、米国から帰国されて後、皇太后様自ら心得や躰等をお教えたのだと御著書に記されており、また和歌は御歌所寄人の千葉胤明氏、書道を阪正臣氏について稽古したと記されている。妃殿下の残された和歌や書は実に多く、千鳥ヶ淵の昭和天皇歌碑をはじめ、実に流麗な文字を認められている。(太田)

### ⑦御染筆色紙(紫陽花、石榴、蝦夷透かし百合、郁子、秋草)

五点

紙本着色 小三・四・五×四二・〇、大・四三・〇×四五・〇  
制作年不明

妃殿下が特にどなたかに絵画について学ばれたという記事は、様々な資料の中に見いだせなかつたが、唯一、御著書『銀のボンボニール』に「私は母に似て絵が好きなのですが」と記されている。しかし、本作品を見る限り、その柔らかな描写、色彩には、お心のこもった見事な小作品と言えよう。

特にこれらの色紙の画題となっている植物は、殿下と共にとてもお好きであり、昭和天皇とも植物についての語らいをなさつたりしていることから、植物への興味からの熱心な御描写とも受け取れる。(太田)

### 9 堤中納言集(名家家集切) 伝紀貫之

一卷

紙本着色 二七・二×五五六・一

平安時代(十一世紀)

藍と紫に染められた繊維による模様が空に浮かぶ飛雲のように見えることから、飛雲紙と呼ばれる装飾料紙を本紙に用い、これに『堤中納言集』(藤原兼輔集)を書写している。『清原深養父集』などと共に部類名家集として一具を成したもので、古筆切としては「名家家集切」として知られる。王朝文化隆盛期に競って制作された美しい装飾料紙、名筆による調度手本の一つである。もとは冊子本であったものが、後に現状の卷子本に改装されて伝わる。巻末に寛永七年(一六三〇)の烏丸光広の識語が加えられており、筆者を紀貫之としている。

この名品は、大正十一年の秩父宮御成年、そして宮家創立に際し、同年十二月に行なわれた宮中御催の賜宴の後、貞明皇后から拝領、秩父宮家に伝来した。(太田)

### 10 四季絵屏風(俊成卿九十賀屏風) 住吉広行 六曲二双

絹本着色 本紙二〇・〇×二九二・〇

江戸時代(十八、十九世紀)

本屏風は、建仁三年(一一二〇)三月二十三日に催された藤原俊成(一一一四―一二〇四)の九十の賀を行なうにあたり、諸人を召して四季の歌を選出し、その歌絵を絵所の上に描かせて屏風を仕立てたことに則つて、江戸時代に制作された賀の屏風である。俊成九十賀については、後鳥羽院に仕え、『新古今集』の編纂にもあたつた源家長(？―一二三四)の若い日の追想録『源家長日記』、及び『俊成卿九十賀記』に記されている。『俊成卿九十賀記』は後に多く書写され、和歌、そして屏風絵の手本とされた。これらによると十二月の題は、春が「霞、若草、花」、夏「郭公、五月雨、納涼」、秋「秋野、月、紅葉」、冬「千鳥、氷、雪」である。

本屏風の絵は、住吉広行(一七五五―一八一)によるもので、伝統的やまと絵の画風による堅実な画面に仕上がっている。広行は、寛政の内裏造営の際、賢聖障子の下絵を制作してその任に当たつていた狩野典信(一七三〇―九〇)がその最中に病没したため、その後任に命ぜられて障子絵を完成させた。住吉派は、輿絵師となつて江戸に移つた住吉具慶以来、京都の土佐派に対して、江戸における伝統的画風の継承を目指す中心的画派であつた。なお、色紙形に和歌を認めた人物は不明である。

本屏風は、大正十二年十二月、その年の二月に亡くなつた有栖川熾仁親王妃董子殿下の御遺品として、有栖川宮殿下より秩父宮家に渡された品である。(太田)

### 11 承安五節舞絵巻

二卷

絹本着色

三二・七×(上巻)六八一・九、(下巻)七一・九

大正四年(一九一五)

「承安五節」と題す本絵巻は、大正天皇の大札の奉祝品として女子学習院の同窓会である常盤会より献上された作品で、昭和二十七年に貞明皇后御遺品として秩父宮家に伝来したものである。

五節舞は、新嘗祭あるいは大嘗祭の豊明節会において舞姫が舞う華やかな行事である。本絵巻の詞書にも

「この五節は承安元年のことなり」と記され、題名に承安とあるように、承安元年の高倉天皇御時の五節舞の様子を表している。ただ、「承安五節舞絵巻」の原本は今日には伝わらない。しかし、室町時代の御崇光院「看聞御記」には、同絵巻三巻を伏見宮貞成親王が禁裏から借用して返却した記事が永享三年(一四三二)十二月及び翌年一月の記事に見える。また江戸時代には狩野家や住吉家などが絵巻をもとにした屏風絵を制作していたり、数点の模写本が現存している。原本が果たして何時まで伝わつていたのかは不明であるが、『考古画譜』には、住吉如慶(具慶の誤りか)の粉本末に禁裏にあつた巻物を屏風に写す事を申し出た旨が記載されていることから、少なくとも十七世紀までは宮中に伝来しており、その内容も屏風絵や模写を通して伝わってきたと考えられる。ただ、本絵巻がいずれの所蔵の作品から模写されたか、誰によつて描かれたかを伝える資料はない。しかし、その描写は当時の優れたやまと絵系の画家によるものと考えられる。

宮中の伝統行事を描いた絵巻が天皇家、そして宮家と伝えられていることに、皇室の伝統文化の継承の一端が窺える。(太田)

### 12 肇国創業絵巻

横山大観ほか

二卷

紙本着色 四八・〇×八八九・四×九九〇・二  
昭和十四年(一九三九)

二卷からなる本絵巻は、昭和十五年の「紀元二千六百年」の奉祝祝典を推進するために設立された財団法人・紀元二千六百年奉祝会が制作を企画発案したもので、十四年の四月に東京日本橋の高島屋を会場として開催された東京展を皮切りに、十五年五月までの間に大阪、京都、福岡などの計十三都市を巡回した皇紀二千六百年奉祝展覧会などで展示公開された。画題選定は辻善之助、歴史考証は関保之助が担当し、尾上柴舟が詞書の揮毫を受け持っている。

「神武天皇祖肇國」のありさまを描写した全十一図が収められており、第一図の横山大観をはじめ、中村岳陵(第二、十図)、菊池契月(第三図)、安田靉彦(第四図)、岩田正巳(第五図)、長野草風(第六図)、前田青邨(第七図)、吉村忠夫(第八、十一図)、服部有恒(第九図)



という、当時の日本画壇を代表する官展系と院展系の主要画家九名が分担制作をおこなった。このうち第六図は当初、伊東紅雲が担当していたが、下絵を作成した時点で急死したため、長野があとを引き継ぐことになったものである。各画家に正式な制作依頼がなされたのは昭和十四年二月末のことであり、実質的な制作期間はわずか一ヶ月であったため、東京会場の開催までには全巻の完成が間に合わず、詞書と、第二、六、九、十一図を除く七図による未完成の状態で見られることとなった。その後、残る四図が追って仕上げられ、各地を巡回することになったわけである。このように、きわめて短期間に描かれたにもかかわらず、いずれの作も明快な形態把握と端正な描線、抑制された配色を特色とした品格高い画面をかたちづくるっており、当時の日本画の主潮流であった新古典主義の傾向をよく示すものとなっている。「紀元二千六百年奉祝会が同会総裁秩父宮殿下の御偉徳を報謝する為」に、巡回展終了後の昭和十五年十二月に秩父宮殿下に献上された。(大熊)

### 13 漁村曙 横山大観

絹本着色 六二・八×八六・六

昭和十五年(一九四〇)

一幅

昭和十六年の歌会始の勅題「漁村曙」に因んだ作で、当時病氣療養中であつた秩父宮殿下御慰安のために制作され、細川護立公爵を伝献者として、十五年十二月三日付で献上されたものである。帆掛け船が浮かぶ新春の穏やかな海面と、そこに照り映える朝のほのかな浄光が、裏箔の効果を巧みに生かして描きあらわされている。また、海岸に寄せる画面前景の波の描写には、横山の昭和前期の代表作「海十題」の各画面にも共通してみられるような、卓抜した技量が發揮されている。当時の横山の作としては珍しく、気高く凛とした表情のなかにも温和な趣を湛えた秀作である。(大熊)

### 14 四季草花図刺繍屏風 四代飯田新七

四曲一隻

絹・刺繍、木製漆塗・螺鈿 一八一・三×二九八・四

明治三十五年(一九〇二)

本屏風は、もともとは明治宮殿や霞離宮などの宮殿

用装飾調度として制作されたものである。昭和三年九月二十八日の雍仁親王殿下と松平勢津子様の御婚儀装飾用として、宮内省から秩父宮家に渡されたものと見られる。表面は四季の草花を美しい色彩と光沢の絹糸で細緻な刺繍技法で表し、下部は木製黒漆塗として鴛鴦を螺鈿で装飾している。枠に取り付けられる飾金具は唐草文に蝶をあしらった美しい鍍金透彫金具で、その豪華さから御婚儀装飾用として選ばれたものである。ちなみに、裏面は絹地に松図を描いている。

この屏風を納めたのは、飯田新七。飯田新七は、京都烏丸松原で古着・木綿商(屋号「高島屋」)を始めた初代以来、美術的な染織品を制作し、明治二十一年のスペイン・バルセロナ万国博覧会以降の国際的な博覧会に豪華な刺繍作品を出品し、金牌などを受章して名声を高め、明治三十年頃からは宮内省の御用をつとめることになった高島屋の主人である。本屏風を納めたのは、明治二十一年三月に家督を相続した四代新七(鉄三郎、一八五九―一九四四)にあたりと考えられる。四代新七は、海外貿易の必要性を早くから見抜くなど、その経営に手腕を發揮した。(太田)

### 15 百花模様刺繍卓被 四代飯田新七

一枚

絹、刺繍 一七三・〇×一七六・〇

大正期

箱蓋表書に「皇后宮御料／草色石目織百花模様刺繍御卓子掛」と記される本作品は、濃い草色に染めた糸による石目織の裂地にさし織いを主体とした刺繍技法により、菊、薔薇、紫陽花を主体に、和洋の様々な花々を繡い表した鮮やかな卓子掛である。裏面には「S. IIDA / "TAKASHIMAYA" / SILK & EMBROIDERIES / KYOTO」のラベルがあり、飯田新七、高島屋の制作とわかる。貞明皇后の御料としてあつたえられ、後に秩父宮家に譲られた品と考えられる。

四代新七は、織物の改良、海外への進出を目指したが、特に優れた刺繍の制作を始めて、これを輸出の主要产品とした。明治二十二年には、パリ万国博覧会の視察を兼ねて、約七ヶ月間の欧米視察旅行に出かけたが、帰国後、天鵞絨や友禅染などの染織法の研究を重ね、明治二十七年には美術工芸考部を設置、内外の博覧会等

に出品を重ねて受章し、美術的染織作品の発展にも力を注いだ。刺繍において「たかしまや」の名声は世界に知られ、宮内省、両陛下、各皇族方の御用なども数多く手掛けている。(太田)

### 16 葱文大皿 加藤土師蒔

一点

陶磁 D四一・三、H六・八

昭和五年(一九三〇)

加藤土師蒔(一九〇〇―六八)は大正十五年(一九二六)九月以降、多治見の岐阜県陶磁器試験場で陶磁器の図案や原料の研究をしながら帝展へ出品を続けていた。帝展へは「福壽文壺」(昭和二年、第八回帝展)、「仙果春秋水花瓶」(同三年、第九回帝展)、「南海の女」(装飾陶板) (同四年、第十回帝展)と出品し、中国陶磁風あるいは陶板のような図様を主とした作品を特徴としていた。本作もその当時の作風の延長にあり葱を大胆に図案化したものである。

本作は昭和五年の第十一回帝展に出品され、十一月九日に細川護立の案内で同展をご覧になった秩父宮殿下が自らお選びになり買い上げられたものである。秩父宮殿下はこの作品を大変気に入られ、御殿場御別邸ではいつもマントルピースの上に置いて、来訪者に自慢されていたそうである(「加藤土師蒔作品集」、朝日新聞社、昭和四十九年)。殿下が薨去されたあとは御遺愛品として妃殿下から昭和天皇へ献上され、昭和天皇の崩御後、香淳皇后へ引き継がれた。

秩父宮殿下と加藤土師蒔との交流はまさにこの作品を契機に始まったといえる。以下にその後の秩父宮家と加藤の関係を略述する。昭和二十五年、御殿場御別邸に三峰窯を創建し、秩父宮殿下へ数度にわたり作陶指導を行った。同二十八年、秩父宮殿下が薨去されると、秩父宮家の希望により殿下の骨壺を謹作した。そして、同二十九年には三峰窯で殿下がお作りになった陶器を収録した御遺作図録『玉葉流芳』(秩父宮御遺作図録刊行会発行)を編集している。(岡本)



17 孔雀緑鳥文鉢 加藤土師萌

陶磁 D三〇〇、H二二・二  
昭和三十三年（一九五七）

本作はベルシア風の意匠、釉薬を意識して制作されている。この特徴のある釉色はソーダ分を多く含むアルカリ釉に着色剤として酸化銅を添加し酸化焼成することで、深いトルコ青風の発色する。これを孔雀の羽の色に例えて孔雀緑と呼んだ。もともと中東、西アジア一帯で広く用いられた低火度釉であった。時代や地域を越えて、広く様々な陶磁技法を追究した加藤ならではの成果である。

昭和三十三年二月一日に作者より献上された。秩父宮殿下が薨去された後も、加藤は御殿場の三峰窯へ招かれ宮家関係者に作陶指導を行った。加藤は本作のほかにも同二十一年に東京渋谷の東横百貨店で行われた個展で「辰砂花鳥文方瓶」が秩父宮家に買い上げられた（所在不明）。また、同四十年十一月に日本橋三越で開催された「日吉窯創開二十五周年記念加藤土師萌秀作展」の図録へ秩父宮妃殿下が題字「温故知新」の御染筆を賜るなど、殿下薨去後も秩父宮家との関係は続いた。

（岡本）

18 鉄描銅彩松大皿 富本憲吉

陶磁 D四二二、H五・〇  
昭和二十八年（一九五三）

富本憲吉（一八八六〜一九六三）は奈良に生まれ、東京美術学校図案科在学中にウィリアム・モリスの工芸思想に共感しイギリスへ留学した。帰国後、陶磁器制作を研究、特に九谷焼など色絵磁器の研究に力を注いだ。大正末期の民芸運動、昭和二年（一九二七）の国画創作協会展工芸部創設に参加したが、すぐにその両者からは離れて独自の作陶活動を行った。色絵に金銀彩を同時焼付する技法を完成し、同三十年には重要無形文化財「色絵磁器」の保持者に認定された。

本作は昭和二十六年に始められたという鉄描銅彩の技法を用いて松や雲を大胆に描写したものである。昭和二十九年十一月一日に秩父宮妃殿下が総裁を務められた結核予防会の大坂支部長より献上された。（岡本）

19 紅地金襴手吉祥文手鉢 永楽和全か？

陶磁 各D二二・五、H七・八  
明治前期

もともと金襴手は中国・景德鎮の民窯で明時代後期の嘉靖年間（一五二一〜一五六六）に焼造された金箔焼付の色絵磁器で、わが国でも江戸時代以来富豪の間で大変に珍重された。本作は多彩な図案を用いて中国陶磁の写しや茶陶を中心とした京焼の伝統を代々受け継いだ永楽によるものである。周囲には金箔焼付で鳳凰をあらわし、見込には染付により麒麟を描き吉祥文とした非常に手の込んだ作品である。制作時期と金襴手にみられる加飾技術の高さから、永楽和全（一八二三〜一九六）によるものと推定した。底裏に「大日本永楽造」の染付銘がある。昭和二十一年十月十五日に朝香宮殿下より納められたという伝来をもつ。

（岡本）

20 葆光白磁枇杷彫文花瓶 板谷波山

陶磁 D二六、七、H一九・三  
昭和三年（一九一八）

昭和三年九月の秩父宮殿下の御結婚の折に東京府より献上された作品。当時の記録によれば、板谷波山（一八七二〜一九六三）は本作のほかに「氷華磁牡丹彫文花瓶」を併せて制作し、花瓶一对として献上された。東京府はそのほかに香取秀真（一八七四〜一九五四）「狡獪文銅花瓶」一個（所在不明）、津田大壽（信夫、一八七五〜一九四六）「三友鑄銅花瓶」一個（所在不明）を板谷の作品とともに献上した。東京美術学校校長・正木直彦『十三松堂日記』には、同年八月十日に「秩父宮家に東京府より献上すべきものに就きて意見を徴せん為」平塚東京府知事が正木の元を訪れたとあり、つづく同月十二日には東京会館で正木と平塚府知事、板谷波山が会食をしている。これらから正木の意見を採用して東京府の献上品が選ばれたらしいことがわかる。

葆光白磁とは板谷独特のマット調の失透釉を用いた白磁のことで、器体表面の光沢を抑えた淡い釉調が特徴である。一方、氷華磁は器体にほどこした浮彫の凹んだ部分に溜まる青みがかった細かい粒状の透明釉が、氷のように澄んだ冷やかな質感を表す技法である。（岡本）

21 黒飴瓷茶碗 板谷波山

陶磁 D二二〇、H八・五  
昭和二十年代

無文のまま黒飴瓷という漆黒に近い飴釉を全体にかけてあり、器体表面への彫刻を得意とした板谷のなかでは珍しい作品。茶碗の制作は大正年間から晩年まで行われていたが、昭和二十一年（一九四六）、疎開先の茨城郡菅間村洞下（現つくば市）の仮窯で第一回日展出品作「黒飴瓷仏手柑彫文花瓶」など黒飴瓷の作品を制作していた一時期があるので、本作もその頃に制作されたものと推測される。本作が秩父宮家に納められた経緯は明らかではないが、「御事蹟資料」には殿下が茶道具にも非常に高い鑑賞眼をお持ちであったことがいくつも書かれているほか、ご自身も輻輳成形による茶碗作りに挑戦されているなど、殿下が茶道具に対してご関心の高かったことは指摘しておくべき事柄である。

（岡本）

22 青磁菊蘭文様茶碗 二代諏訪蘇山

陶磁 各D二二・三、H五・八  
昭和十年（一九三五）頃

二代諏訪蘇山（一八九〇〜一九七七）は大正十一年（一九二二）に帝室技芸員であった初代諏訪蘇山（一八五一〜一九二二）の跡を継いだ。初代の弟子であった米沢蘇峰、湧波蘇隆、八田蘇谷、滝本蘇嶺らの協力を得ながら初代の技法を受け継いだ。帝室（皇室）より御下命を受けることも多く、各種博覧会や美術展にも出品し数多くの賞を受賞し、京焼でも希少な女流陶芸家として活躍した。

本作は伝来から昭和十年四月の満洲国皇帝溥儀の来日を記念して制作されたものとみられ、日本と満洲国帝室の御紋である菊と蘭が意匠としてそれぞれの茶碗に用いられている。昭和十七年七月十四日に貞明皇后より御拝領になった作品。ちなみに二代蘇山は昭和六八、十年にも大宮御所茶室秋泉亭御用の茶碗、白磁平茶碗、黄磁、秋泉文字入茶碗制作の御下命を受けている（諏訪蘇山作品集「蘇山会、昭和四十六年」）。（岡本）



23 草花文碗 河井寛次郎 一点

陶磁 D一・八、H九・〇

昭和十五年(一九四〇)

24 草花文湯呑 河井寛次郎 二点

陶磁 各D九・〇、H七・二

昭和十八年(一九四三)

25 花文扁壺 河井寛次郎 一点

陶磁 D一四・五、H二〇・二

昭和三十三年(一九五七)

河井寛次郎(一八八九〜一九六〇)は大正末期に柳宗悦らと民芸運動を起し、京都市立陶磁器試験場での研究で培った確かな技術を生かして、独特な力強い作品を生み出した。『実紀』によれば、秩父宮殿下は河井の個展を昭和五年(一九三〇)十一月十九日に東京高島屋「河井寛次郎陶磁展(第七回作品展)」と、同二十七年十月十二日に東京高島屋「河井寛次郎陶器展」をご覧になつている。同書の記述から判断すると、この二十七年の河井の個展をもつて殿下が最後にご覧になつた美術関係の展覧会となる。このほか、民芸関係では同十二年一月十六日に日本民芸館へ御同列でお成りになつたことが同書に記述されている。展示番号23は伝来の詳細不明。展示番号24は昭和十八年三月二十七日に作者より献上された。展示番号25は同三十二年四月六日に作者より献上された。(岡本)

26 鉄絵丸紋蓋物 濱田庄司 一点

陶磁 D二・三、H三・八

昭和前期

木造茅葺きの平屋である御殿場御別邸での両殿下の御生活は、山小屋風の洋式スタイルだけでなく、質素な和風民家の部分もあり、民芸風の陶器を御使用になっていたことも残された写真などからうかがうことができる。河井寛次郎らとともに民芸運動を支え、日本各地の伝統的な製陶技術を取り入れて个性的な作陶活動を行った、濱田庄司(一八九四〜一九七八)の器もそのようなご生活の日常にはまさに相応しいものであったといえよう。本作は昭和十九年六月二十五日付で秩父宮殿下の御誕生祝いとして高松宮殿下より送られたものである。『実紀』には同日の高松宮殿下の御来訪の記述は

ないが、戦時中にあつても高松宮殿下はしばしば御殿場御別邸へご療養中の秩父宮殿下を見舞われていた。それゆえ御別邸との相性を考慮されて濱田の作品を御誕生祝いを選ばれたのかもしれない。(岡本)

27 猿廻し 和彦 一点

象牙 五・八×五・七×一八・一

明治期

近代日本での牙彫界の様相が急激な変化を示すようになったのは、明治十年代前半のことであつた。牙彫工らによる技術の開拓にともない「平彫ヨリ隆彫」、「隆彫ヨリ全彫」が一般的な彫刻技法として確立普及したためであり、これにより牙材のみによる「丸彫ノ人物」像を自由に彫り刻むことが可能となつて、主に欧米人向けのスーベニールとして当時の「下賤ノ風俗」、「俗間ノ卑態ヲ寫出」した置物が数多く生みだされ、「遂ニ東京府下ノ一産物ト」なつたのであつた(『明治十四年 第二回内国勸業博覧会報書』)。この動向は、やがて明治二十年代になつてからの写生写実を奨励する美術、工芸界の風潮と結びつくことで、より熟練した技術とリアルな描写を特色とする風俗ものの制作の隆盛をうながすこととなる。そして以後、ほぼ明治年間を通じて、実に数多くの作品が国内の博覧会や展覧会に出品され続けたのであつた。

本作は、その系譜に位置づけられる一点で、古くは猿曳きとも称され、ことに江戸期に盛んとなつた大道芸の猿廻しの一場面をモチーフとしている。小品ながらも、芸人の相貌や猿の仕草などが表情豊かにあらわされており、手慣れた彫技のほどをうかがわせる。ただし、「和彦」の銘が刻み残されているものの、作者や制作年代、出品歴等については、つまびらかではない。公刊の活字文献を追ったかぎりでは、明治期の国内博覧会や東京彫工会彫刻競技会、日本美術協会美術展覧会の出品作のうち、猿廻しを題材としており、かつ帝室御買上となつたことが確実な記録がみいだせるのは、明治四十四年十一月開催の日本美術協会第四十七回美術展覧会(秋季)で三等賞銅牌を得た金江万年(『牙彫猿曳置物』(出品人・登山長蔵)だけなので、あるいは本作がこれに当たるのかもしれないが、確証は得られない。明

治天皇御遺品として、大正元年(一九一二)に雍仁親王殿下が引き継がれた一点。(大熊)

28 手遊売 林芳山 一点

象牙 九・四×一〇・八×二九・四

明治四十三年(一九一〇)

展示番号27の《猿廻し》と同一傾向の作であるが、ここでは、子供向けのお面などの遊具を売り歩く大道商人の姿がモチーフとなつている。明治四十三年十月開催の日本美術協会第四十五回美術展覧会(秋季)に出品され(出品人・金田兼次郎)、出品人が第二部三等賞銅牌を、作者は同部技藝賞銅牌を受賞しており、その際には作品名は「牙彫玩具賣置物」となつてゐることが、『美術之日本』誌第三卷第二号(明治四十四年二月)所収の褒賞者目録により確認される。ただし、「十月十二日野西侍従來場ニテ繪畫其外十六點ノ御用品撰定アリタリ」折りの作品名は「牙彫手遊賣」と記されている(同誌第二卷第十二号)。本展では、作品が収められている箱に付された題箋にもこの作品名が記されていることから、「手遊売」と作品名を表記することとした。商人の身のこなしや表情がいきいきと活写された佳品であり、明治天皇御遺品として、「猿廻し」と同じく、大正元年に雍仁親王殿下が引き継がれている。明治期に牙彫の大家として活躍した金田が出品人をつとめてゐることから、作者の林は、おそらく金田の工房に所属する弟子であつたと推測される。(大熊)

29 漁船 如月 一点

象牙 四・二×三・四・五×六・六

明治末期

作品本体の底部には「如月」の刻銘が残されているが、明治期の活字文献を瞥見したかぎりでは、各種博覧会や展覧会の出品作家のなかで本銘を有する牙彫家のみい出すことはできない。こうした舟をモチーフとした細かな牙彫細工物は、明治末から大正初期にかけて、どちらかといえば展覧会出品作としてよりも、懐古趣味のある好事家向けとして多くつくられたものであることから、本作もそうした市井の工人のひとりにより、



明治のごく末期につくられたものであったのかもしれない。大正二年(一九一三)に雍仁親王殿下が大正天皇から譲られた一点。(大熊)

30 二童子 木村竜章

象牙 九・〇×九・六×一四・七  
明治四十三年(一九一〇)

金魚鉢を取り落として壊してしまい、ただただ泣きじゃくる幼女と、そのかたわらで一匹の金魚を手にする上げつつも、幼女の様子を意地悪そうな笑みを浮かべて見上げる童子の姿をあらわした、きわめて演劇的性格が色濃くい作である。このように複数の人物を置板状の円形の台座部分に配し、その台座を舞台として、一場の芝居さながらの情景を表現する物語性の優れた丸彫像は、主として明治三十年代以降に多く制作されている。それは、明治二十年代後半を境として、輸出用工芸品としての牙彫置物の欧米での人気が薄れて牙彫界全般が危機的状況に陥ったため、それを打開するべく新たに創出された制作傾向であったが、かえって、結果的には、日本の牙彫置物は芸術的彫刻作品などではなく、単なる玩弄物に過ぎないとの認識を欧米で強めることになってしまったのであった。

本作は、こうした新傾向の牙彫置物の制作期のなかでも、もつとも末期に制作された一点であり、展示番号28の《手遊売》と同じく、明治四十三年の日本美術協会第四十五回美術展覧会に出品されている。褒賞者目録によれば、作者の「木村龍章」が第二部で技藝褒状一等を、出品人の金田兼次郎が褒状一等を得ているが、その折りの作品名は「牙彫小童弄金魚置物」と記されている。しかし、「十月三十一日御豫定ノ如ク 皇太子殿下 行啓アラセラル」際に「當日御用品ノ名譽ヲ得タル」時の作品名は「象牙彫二童児」との箱書が残されていること、蓋表には「象牙彫二童児」との箱書が残されていることから、本展では、これらを検討のうえ、もつとも主題のテーマに即している「二童子」を作品名として定めることにした。また、作品の台座裏には、「木村竜章」の刻銘がみられるが、明治期の活字文献を通覧した結果、「木村竜章」が正確であろうと考えられるため、作者名には、この表記を用いた。金田兼次郎が出品人

をつとめていることからわかるように、木村竜章は、金田の工房に所属していた弟子のひとりであった。大正天皇から雍仁親王殿下に譲られた一点。(大熊)

31 鷹

象牙 七・三×九・五×二一・〇 総高一七・〇  
明治初期

岩上から下を鋭く覗き込む鷹をあらわした作品本体には、側面に波濤の文様が、上部には波濤と貝の文様があしらわれた唐木材の専用置物台が付属している。すなわち、本作の場合は、作品本体と置物台が一体化することではじめて物語性のある主題が明確になるわけである。このように置物台自体が作品の不可欠な一部を構成する形式の置物は、およそ明治十年代前後に海外輸出向け美術工芸品として多く制作されたものであった。また、本作は、鷹の体部は牙彫、脚部は金工、岩は木彫彩色、置物台は唐木彫刻と、それぞれ異なる材質、技法を組み合わせることで全体がかたちづくられているが、こうした複数の材質を用いる手法も、明治初期の海外輸出用置物の作例にしばしばみられる。これらのことから判断して、本作は、おそらくは明治十年代に制作されたものではないかと推測される。彫技は細部にいたるまで丹念で、作品全体の完成度もきわめて高いが、刻銘等は一切残されておらず、作者は不詳である。本作も、雍仁親王殿下が大正天皇から譲られた一点。(大熊)

32 とうもろこし 中川竜英

象牙、色染 七・二×三・〇×二×七・四  
明治末期頃

かつて西欧でも絶大な人気を誇っていた牙彫置物であるが、文部省美術展覧会が開設された明治四十年(一九〇七)以降は、日本においても彫刻ではなく細工物の玩弄品にしか過ぎないと貶められて、芸術としての美術品とはみなされなくなってしまう。そして、大正から昭和前期にかけては、モチーフの外面的な相似性よりも内面的実在感の表出の追求こそが近代彫刻の真髄であるとする風潮のなかで、写生味の優れた牙彫作品は、

国内ではかぎられた好事家のための愛玩物としての命脈を保ち続けることとなる。しかし、そうした牙彫置物の凋落動向と相反するように、この時期に新たな牙材の着色技術が開拓、確立され、それを受けて花開いたのが、写真描写の粋をきわめた、実物と見まがうばかりの果菜花卉置物の分野であった。

本作は、その比較的初期の一例。もぎ取られたばかりのトウモロコシの実を包葉や花柱などの細部にいたるまで精緻な彫技により描写してはいるが、明治末期の作例らしく、まだ着色技法は作品のごく一部にしか用いられていない。「竜英」の刻銘が残されていることから、作者は、明治三十九年から四十三年にかけて東京彫工会牙角部の会員であった中川竜英と判断される。雍仁親王殿下が大正天皇から譲られた品。(大熊)

33 羽箒に子犬

象牙 六・一×二・〇×四×六・一  
明治大正期

円山派の画中にはしばしば描かれる、同派特有の垂れた耳と目の特徴とする太った子犬をモチーフとした作。このような犬の姿は、江戸期には必ずしも円山派の絵画作品ばかりではなく、粉本を通じて根付の意匠にもひろく用いられたものであった。この作品は、その根付の伝統を引いたものではあるが、一方、羽箒の上に乗った犬の姿は、江戸期には縮小されたサイズの犬を載せるといふ発想には、欧米の書斎机用の飾り文房具などにみられる類似したデザインからの影響がうかがわれる。貞明皇后から殿下に贈られた品である。(大熊)

34 西洋蘭鉢植

象牙、色染 一三・五×一七・四×二〇・二  
大正昭和前期

独特の花姿を特徴とした西洋蘭のパフィオペリラムの鉢植をモチーフとした置物。蘭本体はもちろんのこと、鉢や用土までもがすべて牙材でつくりあげられている。着色した牙彫による写実的な果菜花卉置物の制作技法が爛熟し、頂点を示した大正期から昭和前期にかけての作品傾向をもつとも端的に伝えてくれる一点で、向



かつて右側の株のバルブから伸びた茎の根本の虫食い傷までもがリアルに再現されている。ちなみに、パフィオペデイラムが日本国内で高級園芸植物として普及しはじめたのも、ほぼ華族のみを会員とする「帝国愛蘭会」が発足した大正六年（一九一七）から、一般の愛好家の集った「蘭友会」創立の昭和十三年（一九三八）までの間のことであつた。きわめて卓越した技巧による作品であるが、残念ながら作者は明らかではない。

秩父宮殿下は、御発病後の昭和十五年秋からしばらくの間、葉山御別邸で御静養されている。本作は、その間の十六年六月に、葉山御用邸に滞在されていた貞明皇后が殿下を御見舞された折に妃殿下に贈られた品である。（大熊）

### 35 鶯鳥卵蒔絵盃

卵殻、蒔絵 D六・八 H八・四

明治後期

一点

鶯鳥の卵殻の外側に蒔絵で竹と流水の文様を描き、内側は金箔を押しした盃。先が尖つていたり、底に穴が開けられるなどして飲み干すまでは置くことが出来ない可盃（べくさかずき）に倣つて作られたものか。大正元年十二月二十六日に昭憲皇太后より明治天皇御遺品として雅仁親王殿下が引き継がれた品である。卵の殻に蒔絵をして盃としたのは、ジャボンを素地とした菓子器（展示番号36）の例からも、おそらくは明治天皇御自身による御発想かと思われる。本作のような鶯鳥の卵に蒔絵を施した盃や香合の作例は、明治天皇御遺品として明治神宮宝物殿など各所に所蔵されており、『明治天皇紀』明治三十五年五月二十三日には「侍従長侯爵徳大寺實則に鶯卵をもつて製する所の杯五個を賜ふ」とある。ある程度まとまつた数の品が明治期、宮中もしくはその周辺で製作されたのであろう。（五味）

### 36 ジャボン製蒔絵菓子器

果実皮、蒔絵

二合

大一一・七×二・二三×七・五 小九・七×一・〇×六・六  
明治後期

柑橘類のひとつ、ジャボンの実の内側を剥り貫いて乾

燥させた外皮を素地として、外側に蒔絵を施した菓子器で、内側には黒漆を塗り、木製黒漆塗の蓋がともなう。二合のうち、やや大きい方には朝顔の垣と鶏の親子が描かれ、小さい方には桜花が散らされている。いずれも大正元年（一九一七）十二月二十六日に昭憲皇太后より明治天皇の御遺品として雅仁親王殿下に引き継がれた品である。このほか、明治天皇の御遺品としてジャボン製の類品が各所に存在している。特に『日本漆工会雑誌』百三十八・百四十号（大正元年）には、宮内大臣を務め、二代日本漆工会会長でもあつた田中光頭が明治天皇から拝領された品である。「御製ジャボン菓子」の制作方法について記述があり、以下に引用する。「陛下御手製の煙草入れである此品は数年前に佐々木侯爵〔註：もとは高知藩士、侯爵佐々木高行のことか〕が大きな朱欒（ジャボン）を献上すると陛下はその内の実をくり抜かせ給ひ中に藁灰を入れ絹糸にて五箇所を縛り二三年久しき丹精を以て之をお干しになつてカチカチになつた時これに蒔絵を施させられた物である」この後の記述では、さらには台湾産の巨大な柑橘類の実に試みられ乾燥に成功、南瓜も試みられたがこちらは腐つて実現されなかつた等のエピソードが記されている。なお、この記述の作品は、現在、幕末と明治の博物館（茨城・大洗町）に所蔵されるものに一致すると考えられる。

改めて本作を見てみると、紐で縛つて乾燥させた跡が見受けられ、器の形も縛つた結果により瓜形となつている。先の記事にも、第六次漆工競技会の御買上作品の中に瓢に蒔絵を施した作品があつたが、これは「聖上陛下は平素手工の御嗜み深くましませば此品御参考として極めて然るべき物ならんとて特に御用品に」加えた由が記されている。このように明治天皇が様々な自然素材による細工物に対して深い御興味があつたことは、本作によつても示されている。（五味）

### 37 糸瓜製蒔絵花入

へちま、蒔絵 落とし、銀製 D八・二 H二八・五

一点

明治後期 大正期

糸瓜（へちま）の内側を剥抜いて乾燥させた素地に、蒔絵で松を表した花入で、銀製の落としがともなつている。大正六年（一九一七）に両陛下より雅仁親王殿下

が御拝領の品。本作の制作年代等は明確ではないが、明治天皇の御遺品として伝えられるものに、ジャボンや卵殻といった、素材のままの姿を生かした素地に蒔絵をあしらつた品が含まれており、本作にもそうした明治天皇のお好み引き継がれている。（五味）

### 38 金魚

瑪瑙 小：W七・六 大：W八・一

明治期

二点

本作は、リュウキン種の金魚一対を彫りだした瑪瑙製の置物。瑪瑙がもつ色目や透明な質感を生かした、大きさも実物に似せて作られている。江戸末期から明治期にかけて文人趣味の隆盛の中で、清朝風の玉彫細工がもてはやされた。国内でも明治期には玉彫細工が行われており、本作が日本製なのかどうか、確認することは難しい。明治天皇の御遺品として、大正元年（一九一七）十二月二十六日に昭憲皇太后より雅仁親王殿下が引き継がれた品。（五味）

### 39 桑木彫唐子象乗

象牙、桑、蒔絵 一七・五×二二・〇×一六・七

明治前期

一点

チャルメラであろうか、ラッパ様の楽器を構えた唐子が、宝珠や垂飾によつて飾り立てられた象の背に乗った姿を表した作品で、唐子の頭や手、楽器や象の牙、飾りなどは牙彫、象と唐子の身体の部分は桑材を彫りだしている。全体に緻密な蒔絵によつて装束の文様や垂飾が描かれている。象の腹に嵌込まれた牙板に「原舟月作」と刻まれており、江戸末期より江戸で人形師として活躍した三代原舟月（一八二六～九九）の作と考えられる。代々舟月は、山車人形の名工として名高く、古今籬と呼ばれる雛人形も制作した。また、その余技に根付を作つたという。明治期、海外に輸出された工芸作品のコレクションとして、ナセル・D・ハリリコレクションは有名であるが、その中に三代舟月による作品が二点含まれている。本作と同じような技法と材料を用いて、関羽など中国の人物を表した作品で、明治十三年（一八八〇）頃の作である。三代舟月は明治五年頃より象牙、



唐木を用いた輸出向けの置物等の彫刻を手がけた。『建築工芸叢誌』第二期第四冊(大正三年)に掲載の「近世名匠傳 彫刻家三世原舟月」には、帝室技芸員竹内久一の談として、舟月は、特に彫物には桑材を好んで用い、牙彫は弟子の一人であった川本州楽に代作させることが多かったと伝えている。

本作は、伝来によれば大正二年(一九一三)四月十四日に雍仁親王殿下が御父上の東宮職より引き継がれた作品。なお、昭和期に部材が補修されている。(五味)

#### 40 兜形蒔絵香合

木製漆塗、蒔絵、彫金 一一・〇×一一・二×七・三  
明治後期

兜を精巧にかたどった蒔絵の香合で、兜の鉢の部分  
が被せ蓋となっている。施された蒔絵は緻密で、筋の間  
は平日地に桐と葵の唐草文を交互に配し、小札板も細  
かい仕上がりを見せている。また、銀製の鍔形や鍔形  
台に配された龍、吹返し板に彫られた獅子などの彫金  
部分も高い技術によって作り出されている。本作に付  
属している褥から、明治期に柵飾り品などの置物とし  
て宮中で用いられていたものかと考えられる。大正二  
年(一九一三)四月十四日に東宮職より雍仁親王殿下が  
引き継がれた品のひとつ。(五味)

#### 41 月日貝蒔絵香合

貝殻、蒔絵 一一・二×二二・〇×四・五  
明治前期

月日貝(つきひがい)とは、表が朱色、裏が白色の二  
枚貝で、朱(日)と白(月)で見立てて月日貝と呼ばれる  
ものである。本作は、貝殻の内側に下地を付け、縁に  
立ち上がりをつけて合口を作り、蒔絵を施して香合に  
仕立てている。側面に波濤を、内側は梨子地に浜松と  
塩屋を伝統的な蒔絵技法で表している。先行する作例  
として江戸期のものが散見され、特に裏千家十一代  
玄々齋宗室好みの月日貝香合(八代宗哲作)が知られる。  
香合裏面に「珠道 花押」の蒔絵銘があり、同じ号名  
を持つ金沢の蒔絵師、松岡吉平(一八四三頃〜一九〇三)  
の作と考えられる。ただし、他に確認できる吉平の作

例は、現在のところ、石川県立美術館所蔵のもの一点  
のみであり、その作風等についてはほとんど知られてい  
ない。近年の研究により、第二回内国勸業博で褒賞、一  
八九三年のシカゴ・コロンプス博においても受賞、また  
山中や輪島へ技術指導に招かれるなど明治前期に活躍  
した蒔絵師であったことが明らかにされている。

本作の伝来は不明ではあるが、他の秩父宮家旧蔵の  
明治期蒔絵作品が、明治天皇、大正天皇の御遺品とし  
て引き継がれていることから、本作も明治期に何らか  
の形で皇室に入り、宮家に引き継がれたものであると  
考えられる。(五味)

#### 42 山吹蒔絵文台・硯箱

木製漆塗、蒔絵 文台・三三・六×五八・二×二一・五  
硯箱・二五・〇×二二・三・五×五・〇  
明治二十二年(一八九九)

文台と硯箱で一具をなす作品で、文台の天板には山  
水に単と八重の二種の山吹と若松が、硯箱には山吹と  
若松に流水の文様が配されており、全体が吉祥の意匠  
でまとめられている。硯箱内部には硯、水滴、筆などの  
道具一式を納める。

外箱に記された伝来によれば、明治二十二年(一八九  
九)の立太子礼の折に東宮(大正天皇)が皇后宮(昭憲皇  
太后)より御拝領の品である。後の大正二年(一九一三)  
四月に大正天皇より雍仁親王殿下が受け継がれた。ち  
なみに昭和天皇の立太子の折にも御母の貞明皇后より  
「歌絵蒔絵文台・重硯箱」(当館蔵)が贈られており、雍  
仁親王殿下が御成年式の折にやはり貞明皇后から贈ら  
れた文台と硯箱(展示番号43)をみても、このような伝  
統的な文具を、御母・皇后よりの立太子や御成年の祝  
いの品とする慣わしが、大正期にも引き継がれていたこ  
とが示されている。(五味)

#### 43 菊花蒔絵文台・硯箱

木製漆塗、蒔絵 文台・三三・六×六四・三×二一・四  
硯箱・二五・〇×二二・三・〇×五・五  
大正十一年(一九二二)

文台と硯箱を組み合わせた文具で、伝統的な形式を

引き継いでいる。硯箱は隅丸で甲盛のある被蓋造で、  
内部に赤銅製の水滴のほか道具一式を納める。全体が  
八重の菊花と流水の意匠でまとめられ、堅実な蒔絵技  
法で表わされている。大正十一年(一九二二)六月の雍  
仁親王御成年式の折に、貞明皇后より贈られた品で  
ある。

「硯箱の見込みに「船橋舟珙 壺印」の蒔絵銘があり、  
明治から大正期を中心に活躍した蒔絵師・船橋舟珙  
(一八五九頃?)の作であることが示されている。舟  
珙は、十二歳の頃より植松抱民(一八四五〜九九)に蒔  
絵を学び、明治十二年頃に精工社の職工となり、その  
後に独立、保井抱中とともに抱民門下の名手として知  
られた。明治期、内外の博覧会、展覧会へ出品、受賞を  
重ね、大正十五年の聖徳太子奉賛会展覧会には無鑑査  
で出品している。(五味)

#### 44 日月春秋山水蒔絵料紙箱・硯箱

木製漆塗、蒔絵 料紙箱・四〇・〇×三三・二×二二・八  
硯箱・二六・二×二二・三×四・八  
明治後期

印籠蓋造で、蓋の肩の部分を几帳面取に作った料紙  
箱と硯箱のセット。いずれも銀の置口を付ける。その意  
匠は、料紙箱が秋、硯箱は春を表しており、伝統的な図  
様を引き継ぐもので、料紙箱の表側全体には山水と月  
に松、紅葉を、蓋裏に秋草を配している。硯箱の蓋表に  
は山水と山の端に昇る太陽、杉木立に桜を描き、蓋裏  
の文様は春草となっている。その作風から、明治後期の  
作品かと考えられる。大正二年(一九一三)四月十四日  
に大正天皇より雍仁親王殿下が引き継がれた品。(五味)

#### 45 近江八景蒔絵料紙箱・硯箱

木製漆塗、蒔絵 料紙箱・四二・五×三五・〇×一四・七  
硯箱・二五・八×二二・一×六・三  
昭和三年(一九二八)

料紙箱と硯箱で一具の品で、いずれも隅切で面取の  
ある印籠蓋造の形式を持つ。蒔絵に切金や金貝(金属  
板の切抜象嵌)の技法をふんだんに用いた金色の強い  
絢爛な作品で、全体に配された雲の間に近江八景を表



している。昭和三年（一九二八）の御結婚の折に貞明皇后よりお祝いの品として贈られたもの。当時の著名な蒔絵師によって制作されたと考えられるが、現在のところ作者は明らかでない。（五味）

#### 46 桜花折枝蒔絵重硯箱

木製漆塗、蒔絵 一三・六×二二・一×一七・六  
大正四年（一九一五）頃

#### 47 桑地菊花散蒔絵重硯箱

木製、蒔絵 二二・二×二二・三×一六・五  
昭和二十二年（一九四七）

重硯箱は、香席や歌会で用いられるもので、重ねる硯箱の段や列数の組み合わせ、またその装飾には様々なものがある。外箱に若松印と記された、雍仁親王殿下ゆかりの重硯箱（展示番号46）は、五段の重硯箱で、それぞれの段に硯と水滴、筆を納める。全体を黒漆塗として梨子地に桜の折枝と有職文様が蒔絵で表されている。大正四年（一九一五）七月二十八日に雍仁親王殿下が両陛下（大正天皇、貞明皇后）より御拝領の品である。

一方、桑材で作られた五段の重硯箱（展示番号47）は、勢津子妃殿下のもの。上の四段は二列に分けられ、全部で十八分の文具を納める。全体に散らされた様々な菊花が蒔絵で表されている。昭和二十二年（一九四七）九月九日に勢津子妃殿下御誕生日の御祝いの品として御実家の松平家より献上されたもので、御誕生日の重陽の節句にちなんだ意匠である。本作はその内容品から、実際にかなり御使用になっていたことが認められる。（五味）

#### 48 松竹梅蒔絵文箱・色紙箱

木製漆塗、蒔絵 文箱 二六・五×一〇・〇×五・八  
色紙箱 二七・〇×三・一×五・七  
昭和三年（一九二八）

松竹梅の丸文を散らした蒔絵の文箱と色紙箱のセット。伝統的な吉祥の文様に、艶やかな紅紐が付けられ、女性が用いる道具類にふさわしい取り合わせとなっている。本作品の外箱に記された菊のお印と、「昭和三年

御慶事之節東御所より」との伝来から、貞明皇后が勢津子妃殿下に御結婚の折に、中にお祝いの品を納めて贈られたものかと考えられる。（五味）

#### 49 四季草花蒔絵硯箱

木製漆塗、蒔絵 二五・六×三・三×五・一  
昭和三年（一九二八）

隅丸、甲盛のある被蓋造の硯箱で、山吹や藤、牡丹、紫陽花など、四季折々の花々が蒔絵で表された華やかな作品。見込み左下隅に「象彦造」の蒔絵銘と「平安西村象彦謹製」の箱書から、京都の漆器商、八代西村彦兵衛（一八八七〜一九六五）の作であることが知られる。伝来等によれば、三井家より昭和三年（一九二八）に御結婚のお祝いの品として秩父宮家に献上されたものである。当初は料紙箱とセットの道具であったと考えられるが、現在は硯箱のみ伝えられている。（五味）

#### 50 紅葉散蒔絵硯箱

木製漆塗、蒔絵 一三・八×二二・〇×四・六  
大正昭和前期

蓋表に色づいたいろいろな種類の木の葉を散らした硯箱で、黒漆地に研出蒔絵の技法で文様を表している。内部は梨子地で硯や筆、刀子の他、銀製の紅葉形的水滴を納める。外箱に記された伝来によれば、妃殿下が昭和十八年（一九四三）に色紙を御代筆された御記念に貞明皇后から拝領された品である。（五味）

#### 51 竹に雀蒔絵巻筒箱

木製漆塗、蒔絵 一六・三×二二・三×七・八  
明治後期

#### 52 竹に月蒔絵巻筒箱

木製漆塗、蒔絵 一六・二×二二・二×六・九  
明治三十一年（一九〇八）頃

印籠蓋造、蒔絵の巻筒箱で、箱の内側の寸法は、二点ともにほぼ同寸である。今回は紹介していないが、当館所蔵の秩父宮家御遺贈品の中には、本作と同様の形式の蒔絵巻筒箱は他にも数点含まれており、「銀製観

瀑図巻筒箱」（展示番号53）のように銀製のものについても同形式のものが明治三十年代に数多く制作された。巻筒は明治維新後、文明開化の中でハイカラなものとして広まっていくが、納める箱は日本の伝統的な意匠によるものが多く、興味深い。展示番号51は蓋表に竹林に集う雀を表した作品。箱書きによれば明治三十四年（一九〇二）に明治天皇、昭憲皇太后より大正天皇が御拝領のもの。展示番号52は竹林に月、流水を高度な蒔絵技法で表した品で、箱書によれば、明治三十一年（一八九八）に買上げられ、東宮御所に所蔵されていたもの。二点ともに大正二年（一九一三）四月十四日に東宮職より雍仁親王殿下が引き継がれた。（五味）

#### 53 銀製観瀑図巻筒箱

銀製 一四・九×二一・〇×四・一  
明治四十三年（一九一〇）

塚田秀鏡（一八四八〜一九一八）は江戸に生まれ、装剣金工の名家である勝見完齋に入門し、のちに加納夏雄に師事した。一方、絵画を柴田是真に学び、二人の師、加納夏雄と柴田是真の名前をとって真雄齋と号した。明治二十六年（一八九四）シカゴ博、同三十三年パリ博、同三十七年セントルイス博、同四十三年日英博に出品し受賞を重ねた。大正二年（一九一三）には帝室技芸員に選出された。

本作は明治四十三年十一月の第四十五回日本美術協会美術展覧会で御買上になったものである。その後、大正元年十二月二十六日に皇太后宮より明治天皇御遺品として御拝領になった。巻筒の蓋を画面とし柴田是真に学んだ絵画的図様を、加納夏雄から受け継いだ肉彫などの彫金技法と象嵌技法によって見事にあらわしている。大きさからみても、東京国立博物館所蔵の「鶴鶴岩躑躅図巻煙草箱」、「海老図煙草入」などと同種の作品といえよう。蓋面の観瀑図の右隅には「秀鏡」の刻銘とその下に「真」の金象嵌銘がある。「真雄齋 秀鏡」の墨書がある共箱蓋裏には、明治天皇の御遺品であることを示す「大正元年先帝御遺物之章」の朱文方印の札が貼られている。（岡本）



54 橋鉢植銀細工 一点

銀製 D六・八、H九・一

明治期

55 百合鉢植銀細工 一点

銀製 D七・一、H一〇・五

明治期

56 鼬 一点

鑄造・銅 九・三×二八・九×二一・〇

明治期

これらの金工作品は明治天皇の御遺品として御幼少時の秩父宮殿下が引き継がれたものである。橋と百合の鉢植銀細工はボンボニールにも通じる掌に載るような小さなもので、他の宮家にも同種の作品が明治天皇御遺品として引き継がれており、明治天皇のお好みをうかがうことが出来る貴重なものである。鼬もまた細部にまで技巧が凝らされた愛らしい作品で、江戸期以来の金工職人の卓越した技を明治天皇が高く評価されていたことがわかる。展示番号54、55は大正元年(一九一二年)十二月二十六日に、展示番号56は同三年九月二十七日に御拝領になった。

(岡本)

57 牛と童 沼田一雅 一点

鑄造・ブロンズ 一七・三×三六・五×一八・五

大正昭和前期

秩父宮家と沼田一雅との関係を考えて、本作は「陶彫唐獅子」(昭和三十四年、展示番号7)制作以後のものであるかもしれないが、宮家に納められた経緯は明らかではない。ちなみに、昭和七年(一九三二)には沼田は貞明皇后の御下命により、秩父宮殿下陸軍大学校卒業記念として殿下騎馬像を制作し、このとき沼田は宮家へ伺候し殿下を直接モデルとして制作をおこなった。また、同十二年二月、殿下が京都方面にお成りの際、商工省陶磁器試験場へ立ち寄られ、同所に勤務していた沼田より説明を受けられた。このときのことを沼田は「御事蹟資料」(作品解説7を参照)のなかで回想しており、騎馬像制作の折にモデルになられた殿下に沼田が陶磁器試験場のことを話したのを覚えておられたのではないかと述べている。

(岡本)

58 鯉 大島如雲 一点

鑄造・銀 一〇・二×二七・三×一〇・三

大正昭和前期

昭和二十年(一九四五)九月十五日に御殿場御別邸から東京へ戻られて、久々に御参内された両殿下が両陛下から御拝領となった作品。大島如雲(一八五八〜一九四〇)は江戸の鑄物師の家に生まれ、若くして高い技量を認められ明治二十三年(一八九〇)に東京美術学校雇となり、多くの門弟を指導する傍ら、東京彫工会と日本美術協会を中心に活動し、展覧会で審査員を勤めるとともに自作を出品し数々の賞を受賞した。その後も大正七年(一九一八)に東京美術学校教授に任じられ、同十二年には同校鑄造科主任となるなど、晩年まで後進の育成や東京美術学校の委嘱制作にも携わった。

本作がいつ頃皇室へ納められたのかは明らかではないが、「大島如雲先生年譜」(東京鑄金会、昭和十六年)の年譜では展覧会に出品した「鯉置物」として次のものが挙げられている。明治三十四年六月日本美術協会美術展覧会「銅製水中鯉置物」(褒状一等)、同四十二年十一月第四十四回日本美術協会美術展覧会「龍銀素銅鑄遊鯉置物」(技芸賞金牌)、同四十三年十一月第四十五回日本美術協会美術展覧会「鑄銅遊鯉置物」(技芸三等賞銅牌)。作品や置台などの付属物から、本作はそれ以降の制作であると推測される。

(岡本)

59 夕月 藤井浩佑 一点

鑄造・ブロンズ 一一・〇×九・二×四〇・五

大正十一年(一九三二)

藤井浩佑(一八八二〜一九五八)は東京に生まれ、明治三十五年(一九〇二)に東京美術学校へ入学、藤田文蔵、白井雨山に学んだ。文部省展覧会には第一回から第九回まで出品を続けたが、大正五年(一九一六)から再興第三回日本美術展覧会へ出品し同人となった。昭和十一年(一九三二)、再興日本美術院を脱退し帝国美術院に参加、以降、新文展、戦後の日展の重鎮として活躍した。

本作は作品名の通り、夕月を眺めている古代装束姿の女性立像である。大正十一年に秩父宮殿下の御成年を祝して双松会より献上された。共箱の蓋裏には作者

による箱書とともに、献上者である双松会の次の八名の会員名が墨書されている。墨書された会員名は田村不顕、三條公輝、一戸寛、武宮雄彦、八代豊雄、弥富破摩雄、高崎康忠、作間富生の八名で、華族のほかいずれも秩父宮殿下に縁のある傅育官、侍医、御附武官などの面々である。

(岡本)

60 みみずく 根箭忠緑 一点

鑄造・白銅 一五・〇×一五・〇×二七・五

昭和前期

根箭忠緑(一八九七〜一九八七)は大阪に生まれ、大正十五年(一九二六)三月に東京美術学校鑄造科を卒業した。第九回帝展(昭和三年)に「黄銅魚置物」「白銅置時計」を出品、その後も毎年出品を続け、第十四回帝展(同八年)「黄銅鹿置物」で特選、翌年の第十五回帝展でも「黄銅花瓶」が特選となった。「鑄金近代史稿」(鑄金家協会、昭和三十三年)の作家系図には、大島如雲の系統の作家として紹介され、「作品は花瓶、置物、置時計、掛時計等 蠟型を得意とし如雲の技法を現代化した作品にその技を揮い新様式を樹立した」とある。本作の底裏面には「忠緑」の鑄造銘とともに、展示番号62杉田禾堂「兎」の鑄造を担当した工芸成形社のマークと思われる鑄造銘がある。

本作は昭和二十年七月十三日に両陛下より御拝領になった作品である。共箱に貼られた紙札の書付には「戦火をまぬがれし目出度御品として被進」とある。戦火とは同年五月二十五日の東京空襲と考えられ、皇居、大宮御所、表町御殿などの大部分が消失した。

(岡本)

61 兎 杉田禾堂、工芸成形社 一点

鑄造・白銅 一五・二×一七・八×三二・四

昭和十二年(一九三三)

杉田禾堂(一八八六〜一九五五)は、大正十五年(一九二六)に津田信夫を中心に結成された新傾向の工芸家集団「无型」のメンバーであった。第十回帝展(昭和四年)では特選を受賞し、以後、新文展や日展では審査員を務めた。杉田は直線や幾何学的な形態を取り入れた作品を意欲的に発表したが、本作は簡略化した動物像



を数多く制作した津田信夫の作品を彷彿とさせ、杉田の異なる一面をうかがうことができる。

本作は昭和十二年一月十三日、実業家石橋正二郎より献上された。『御事蹟資料』に所収された石橋正二郎「秩父宮様のこと」によると、秩父宮殿下は陸軍大学在学中の昭和五年八月と、陸軍参謀演習のために同六年十一月の二度にわたり、福岡県久留米市の石橋宅にご滞在された。箱蓋裏の「工藝成形社造」と印刷されたシールには「白銅兎置物」、原型及監修として「禾堂」と墨書されている。また、蓋裏隅には服部時計店のものと思われるシールの断片が残る。(岡本)

## 62 母と子の像 北村西望

一点

鑄造・ブロンズ 一二・五×一六・四×三六・五  
昭和五十四年(一九七九)頃

本作は昭和五十四年四月二十一日に作者より献上された。戦後、北村西望(一八八四〜一九八七)は秩父宮殿下のレリーフを制作し秩父・霧藻ヶ峰に設置した。当地は昭和八年(一九三三)八月十九日、両殿下が三峯神社に滞在された折、殿下が白岩山近くの燕岩まで歩かれた際に木々の枝に懸かる霧藻を愛でられ、霧藻ヶ峰と命名されたことに因む場所である。北村は昭和二十〜二十三年の間、秩父鉄道初代社長柿原万蔵の全身像を制作した縁で秩父鉄道沿線の埼玉県秩父郡矢那瀬村の高徳寺に疎開した。疎開先に旧作の原型像を運び、その補修と農耕をする生活であったという。(岡本)

## 63 熊坂長範 森川杜園

一点

木製彩色 H三・五  
明治二十六年(一九三三)

## 64 還城楽 森川杜園

一点

木製彩色 H三〇・〇  
明治二十六年(一九三三)

森川杜園(一八二〇〜一九四)は、一刀彫りの奈良人形の制作を重ねるなかから、気迫のこもった表現力豊かな独自の彫芸を築きあげた作家として知られている。この二点は、その森川の最晩年作であり、ともに宮内省からの御用を受けて制作された。展示番号63《熊坂

長範》は義経伝説に登場する盗賊の姿を、64《還城楽》は、雅楽の舞楽曲の一場面を主題としている。いずれも、大胆な刀法が生み出す確かな量感をなよりの特色としているが、それとともに、相貌や手などには丹念な彫技による細やかな表情が込められており、鮮やかな彩色とあいまって、いきいきとした動感と力感を観者によく伝える作に仕上げられている。高雅な精神性がよくうかがわれる秀作と評せらるる。《熊坂長範》は、大正三年に昭憲皇太后の御遺品として、貞明皇后を通じて秩父宮殿下が引き継がれたもの。一方、《還城楽》は、大正天皇の御遺品として貞明皇后が引き継がれたものを、昭和十年に殿下が譲り受けられた品である。(大熊)

## 65 楽土 平田郷陽

一点

紙製彩色 総高三・六  
昭和十五年(一九四〇)

初期には伝統的な節供人形を手がけていた平田郷陽(本名・恒雄、一九〇三〜八二)は、新時代にふさわしい創作人形運動を展開する場として昭和三年(一九二八)に白澤会の結成に参加、同十年に白澤会を発展解消するかたちで新たに日本人形社を創立、さらに十六年には、同社を解散して日本人形美術院を創立するが、この間に彼が主要な課題とし続けたのは、「実際そのままの写生には美は見られないが、それを美化して行く所に研究の余地がある」という信念に支えられての、精緻な写実的表現の追求であった。その平田が、徹底した写実を消化するなかで、単にリアルなだけの描写に腐心するのみで終始せず、自己の創作様式をかたちづくりはじめ、それを問うかのように一度に八点もの意欲作を発表したのは、昭和十五年十一月に開催された第五回日本人形社展のことであった。そのなかには、《明鏡》のように、以後の昭和前期に展開させる一群の写実的衣裳人形の出発点となる作も少なくはなかったが、その一方で、本作のような極力説明的な要素を省いていこうとする新たな表現傾向を示したものも含まれていた。それは、戦後におしすすめられることになる平田の童児人形の新境地の先がけとなる出来事であったといえる。また、当時の時代状況をそのまま反映した

主題が選択された、いわば「時局人形」となっている点でも注目される作である。昭和十九年に作者により秩父宮家に献上された。(大熊)

## 66 子雀 平田郷陽

一点

木彫胡粉塗(衣裳人形) 総高二八・二  
昭和三十年(一九五五)前後

平田は、昭和期を通じて、小鳥と遊ぶ童児をモチーフとした作を折りに触れ制作している。展示番号65の《楽土》と同じく第五回日本人形社展に出品された《一茶と雀》をはじめ、昭和十九年の《和良辺》、四十一年の《鳥と少女》などがその代表的な例として挙げられるが、本作もその系譜に連なる一点である。子雀を抱いて得意そうな笑みを浮かべる童児の姿を巧みなポーズでとらえており、作風からすると、おそらくは昭和三十年前後の作と考えられる。ただし、主題や人形全体の姿かたちは、《和良辺》ときわめて似ていることが指摘されよう。平成八年に秩父宮妃殿下御遺品として香淳皇后に渡された品で、同十三年に香淳皇后御遺品として、当館に収蔵された。(大熊)

## 67 粧い 町野君子

一点

木彫胡粉塗(衣裳人形) H三・八  
昭和十九年(一九四四)

化粧をする女性の姿を主題とした写実的な衣裳人形では、平田郷陽が昭和六年に制作した《粧ひ》がよく知られている。本作は、それよりもむしろ、顔立ちやポーズなどの点から昭和十年代の平田の作風を想起させる、完成度の高い一点である。作者の町野君子は、町野英彦の依頼により制作し、昭和十六年の第一回人形美術展で発表した肖像人形《町野氏像》を昭和後期に所蔵していたことが、二十九年二月に銀座松屋で開催された《平田郷陽人形展出品目録》から確認される人物である。また本作は、展示番号65の平田の作《楽土》と同じ日に町田の手により秩父宮家に献上されており、これらのことを考えあわせると、町田はおそらくは平田の門下生であったものと推察される。(大熊)



68 鈴を持てる児 野口光彦

一点

木彫胡粉塗 総高三・一五  
昭和期

稚児を題材とした御所人形の制作で知られた野口光彦(一八九六―一九八四)は、鈴を持った右手を大きく天に向かって振りかざすポーズの作品を昭和期を通じて好んで制作し続けた。昭和十七年の第五回新文展に出品した立像の《歡喜童児》や同二十五年頃の座像作品《鈴をもてる児》(東京国立近代美術館工芸館蔵)のほかにも、未完成作を含めて制作年不詳の数点の同主題作品の現存が確認される。本作は、そのうちの一点で、野口の個人様式を典型的に示す丹念な秀作であり、童児の上着には「光彦作」との手書銘も記されているものの、やはり制作年は不詳である。ポーズは昭和十七年の作によく似てはいるが、それ以上のことは判断できない。また、秩父宮家に伝えられた経緯もつまびらかではない。(大熊)

70 花紋硝子花瓶

一点

ガラス D二一〇、H三三・五  
昭和十年(一九三五)頃

各務鑑三(一八九六―一九八五)は東京高等工業学校図案科選科に学び図案を手掛けていたが、大正七年(一九一八)に南満洲鉄道株式会社に入社し満鉄中央試験場に勤務してガラスの研究に従事した。同試験場に着任したドイツ人ガラス技師ルドルフ・イーナーのもとでガラス技法を学び、同十四年満鉄を辞め大連窠業株式会社に入社した。昭和二年(一九二七)、ドイツ国立シユトウツトガルト美術工芸学校に留学、ヴィルヘルム・フオン・アイフ教授に師事し、クリスタル工芸ガラス器の研究および制作を専攻した。同四年に帰国後、各務クリスタル工芸硝子研究所(のち各務クリスタル製作所)を設立し商工展、帝展に出品を続け、同九年第十五回帝展で「硝子花瓶」が特選を受賞した。その後、新文展で無鑑査、戦後の日展では出品委嘱となり晩年まで出品を重ねた。

各務が満洲を去った後であるが、昭和五年五月秩父宮殿下が陸軍大学校御在学中に満鮮戦史旅行で同地を訪れられた。「御事蹟資料」所収の「満鮮旅行追憶座談会摘録」では、秩父宮殿下が大連のガラス工場を熱心に見学され、特にカットグラスにご興味をお持ちであったことが述べられている。本作は昭和二十四年四月五日の御殿場御別邸への行幸啓の折、両陛下より御拝領になつたという伝来をもつ。作風から昭和十年頃に制作されたものと推測されるが、昭和天皇は秩父宮殿下のガラスへのご興味を特に配慮されてお選びになられたのだろうか。(岡本)

71 フォレスト遊園の雪景

一点

油彩・カンヴァス 四六・一×三八・四  
一九三二年

大正十二年(一九二三)の関東大震災の報に接してほだなく、親日国であったベルギーの美術家たちの間では、日本を援助する目的で自作を提供しようとする義捐運動が全国的にひろまっていった。その結果、翌年五月には一三四点の作品がアントワープに集められてベルギーで一般公開され、ついで日本に送られることとなつ

た。この動きを受けて、同年十一月に内務省社会局の主催により東京で開催されたのが、出品作を展示即売する「白耳義国作家寄贈絵画展覧会」であった。同展は、十一月十五日に招待客二千人を集めたプレビューで幕を開き、翌十六日から二十二日にかけて一般公開がなされたが、この間に招待者を除いて約三万五千人が会場を訪れたことが記録されている。また、招待日以前の十二日に皇后陛下が、十四日には閑院宮殿下、東伏見宮妃殿下、久邇宮殿下、李王世子妃殿下が会場を訪れ、御買上をされるなど、帝室や宮家もきわめて高い関心を寄せた展覧会であった。さらに会期終了後の二十四日と二十五日には、それぞれ皇太子同妃両殿下、秩父宮殿下の御台覧がおこなわれている。

ここで紹介するアルベール・パケの作は、皇后陛下御台覧の折りに皇后宮職により買い上げられた十七点のうち的一点であり、その後、貞明皇后御遺品として秩父宮家に引き継がれたものである。平明な自然観照にもとづく小品ではあるが、画面前景の小径に積もる雪や、並木の背後にシルエットとしてひろがる森の描写などには、一九〇〇年代以降にベルギーで展開した、印象主義を再解釈したうえで成立した新印象主義の手法が用いられていることが認められ、美術史的には興味深い一作となっている。(大熊)

72 インクスタンド(蝸牛)

一点

金属・陶磁 八・四×二四・〇×五・二  
二十世紀前期

伝来については、昭和二年七月に貞明皇后より戴かれたものであることが記録されている。この年は、大正天皇の御大葬が二月に終わり、十月には秩父宮の新築の表町御殿が完成して移転、雍仁親王殿下にとつては慌しい年であった。本品が大正天皇を偲ぶ品であったのかどうかは判らないが、こうした時に、このような可愛らしい小品が貞明皇后より秩父宮殿下に贈られていることには、母から子への心遣いを感じる。また、西洋の様々なものを積極的に取り入れられたという貞明皇后を偲ぶ一品でもあろう。(太田)

69 蓋付壺

エドヴァルド・ハルド

(制作・オレフォッシユ・ガラス工場) 一点

ガラス D二一〇、H三三・五  
一九二〇年代前半

一八九八年に設立されたオレフォッシユ・ガラス工場は当初簡素な食器や吹きガラスの器を制作していたが、一九一〇年代の早い段階でガラスの芸術性を認め、優秀なガラス職人とデザイナーを招聘した。本作のデザイナーを担当したエドヴァルド・ハルド(一八八三―一九八〇)は初めて採用されたデザイナーの一人である。ハルドらはエングレーヴィング装飾を研究し、一九二〇年代、同社のエングレーヴィングによる傑作が世界的な評価を確立していくのに貢献した。

(岡本)



## 73 青磁菊唐草文鉢 高麗

陶磁 D一七〇、H七・七  
十一〜十二世紀

深みのある濃いオリブグリーンの釉色に低い高台をもつ深鉢で、外反した口縁部を五弁の輪花としている。口縁部の内側側面には一条の水平にめぐらした陰刻線があり、その線の下に陰刻による菊唐草文がほどこされている。最盛期の翡色青磁になる前の比較的前期の高麗青磁である。

本作には、昭和四年三月十二日に日仏芸術社にて御買上という書付が付属する。日仏芸術社は三越の黒田鵬心とフランス人デルスニスによって組織され、大正期から昭和期にかけて、フランス政府の後援を得てフランスの現代絵画、彫刻、工芸品を将来した「仏蘭西現代美術展」を主催した。フランスの美術工芸品のほか、赤坂溜池のハレービルの日仏画廊ではペルシア工芸展など、各種展覧会も開催していた。秩父宮殿下もこれらの展覧会を何度かご覧になり、本作や展示番号74・75のようにいくつか御買上にもなられたという(黒田鵬心「美術に関する殿下の思ひ出」御事蹟資料)。(岡本)

## 74 白搔落鹿文鉢 イラン

陶磁 D一七・六、H六・八  
十一〜十二世紀

本作は箱書に「ペルシアの北部ガブリーと称する地方の産」とあるが、「ガブリー」とはペルシア語で「ゾロアスター教徒」を意味する。動物など具象的文様が多く非イスラム教的モチーフであるため、ゾロアスター教徒が使用したものではないかという理由で誤って命名された。実際には、イラン西北部カスピ海沿岸のガルス地方で製作されたと推定されている。本作にも鹿と思われる動物が白釉の掻き落としによってあらわされている。昭和四年三月三十一日に日仏芸術社にて御買上という伝来をもつ。

(岡本)

## 75 白釉多彩花卉文皿 トルコ

陶磁 D二六〇、H五・三  
十七世紀

オスマン朝トルコで十六世紀から十七世紀にかけて製作された釉下多彩陶器。首都イスタンブールの建築装飾用に使われるタイルの主要生産地であったイズニックで製作された。白地の上に色鮮やかな赤、青、緑で草花文様が中心に描かれ、縁回りに黒で描かれた渦巻文様は波濤文である。箱書には「西紀十七世紀 ロード皿色絵チユリツップ模様 地中海ロード嶋の産」とある。現在はイズニック陶器と呼ぶが、十九世紀後半にこのような陶器が地中海ロードス島からフランスへ運ばれたため、ロードス陶器(ロード皿)などと呼ばれた。後世のものであろうが、本作は高台に穴が開けられ、壁に掛けて飾ることができるように針金が通されている。本品も、昭和四年三月三十一日、日仏芸術社にて御買上という伝来をもつ。(岡本)

## 76 弘前の秋―田園風景 パーナード・リーチ 一点

紙、インク 一四・二×二五・〇  
昭和二十八年(一九五三)

イギリスの陶芸家であり、わが国でもよく知られるバーナード・リーチ(一八八七―一九七九)は、昭和二十八年二月、前年秋から柳宗悦と濱田庄司と共に米国を巡歴した後に十九年ぶりに来日し、翌年十一月末に帰国するまで日本各地を巡っている。この様子は、『バーナード・リーチ日本絵日記(講談社学術文庫)』に詳しい。この絵日記によれば、リーチは十月に東北から北陸地方にかけて旅している。本図はこの日記の挿画に用いられている「弘前付近」と記されるものと同一図である。本図右下隅には「33 Mt. Hirosaki B. I」と記されている。弘前は、昭和十年八月、殿下が陸軍歩兵少佐三十一聯隊大隊長に任ぜられて妃殿下と共に約一年余を過ごされた地であり、そうした事情から、本図が宮家に贈られたものと考えられる。

しかし、本図がどのような事情で秩父宮家に伝来したのかは不明で、展示番号77のルーシー・リーの作品が昭和48年にリーチ夫人によってもたらされた時と同時かとも考えられるが、現在の所、明確ではない。

## 秩父宮両殿下とリーチとは、殿下の生前に交流があったようではなく、殿下薨去後の昭和二十八年六月二十三日に、英国文化振興会の開所式で初めて妃殿下と

会ったこと、妃殿下から手元にリーチ氏の作品を所持していらつしゃるとの話があったことが日記に記されている。一方で、雍仁親王殿下は早くより陶磁器にご興味があり、既にリーチと親しい柳宗悦氏、富本憲吉氏、濱田庄司氏、河井寛次郎氏らとは交流があった。また高松宮殿下もご興味があり、リーチと親しくされていたことなどから、こうした人々との関係から本図が秩父宮家に伝来したとも考えられるが、この点については今後調査を要する。(太田)

## 77 鉢 ルーシー・リー

陶磁 D一三・四、H八・〇  
一九七〇年頃

ルーシー・リー(一九〇二―九五)はオーストリアのウィーンに生まれた。ウィーン工業美術学校に学んだのち、様々な展覧会へ出品し陶芸家としての地位を固めつつあったが、一九三八年ナチスから逃れるためイギリスへ渡った。当初、イギリスでは不遇であったが、陶芸技法に習熟とともに象嵌や掻き落としなど独自の作風を確立した。その後は国内外の展覧会に出品、九一年には大英勲章第二位を授与されるなど、イギリス陶芸界を代表する作家となった。

ルーシー・リーはイギリスへ渡ってから早い段階で、当時すでに陶芸界では著名であったバーナード・リーチと交流をもったことが知られている。しかし、作品の上ではリーチのような重厚さとは対照的に、デザイン性の強い薄づくりの作風を指向していた。本作も薄づくりの茶碗のような白地の器形に青を象嵌し、口縁には褐色の釉葉を垂らし、内と外で変化をつけている。昭和四十八年(一九七三)十月十二日にバーナード・リーチ夫人より献上された。(岡本)



# 出品目録

番号	作品名	作者、あるいは制作地	員数	制作時期	材質	法量	由来	展示期間
1	1 雍仁親王殿下・勢津子妃殿下御肖像		十九点	明治三十五年 昭和四十年代後半				全期
	1 両殿下御写真							
	2 雍仁親王殿下・勢津子妃殿下御肖像	熊沢観明	三点	昭和二十三年 二十五	絹本墨画、 紙本墨画	殿下：五・三×三六・八、妃殿下：四七・二×三四・九 (スケッチ)三七・〇×二六・五		全期
	3 勢津子妃殿下御肖像	藤田嗣治	一点	昭和二十三年	紙本淡彩	一九・一×一三・八		全期
4 勢津子妃殿下御肖像	林武	一点	昭和三十三年	紙、バステル	二九・四×三七・八		全期	
2	秩父霊峯春暁	横山大観	一幅	昭和三年	絹本墨画	六七・二×一一三・五	宮家創立御祝い	後期
3	奥秩父妙法嶽	和田英作	一点	昭和三年	油彩・カンヴァス	一〇〇・〇×二二・三	御結婚御祝い	前期
4	妙法山遠望図蒔絵巻貫箱	赤塚自得	一点	昭和三年	木製漆塗、蒔絵	一五・四×二二・九×七・五	御結婚御祝い	後期
5	ボンボニエール							
	1 鼓形若松に星文ボンボニエール		一点	昭和三年	銀製	四・二五×五・八×四・二五	貞明皇后より	前期
	2 手箱形雲鶴文ボンボニエール		一点	大正十一年	銀製	六・三×四・四五×三・一	御成年式	全期
	3 文箱形松唐草文ボンボニエール		一点	大正十一年	銀製	五・一五×三・九五×二・九	御成年式	全期
	4 文箱形松唐草文ボンボニエール		一点	大正十一年	銀製	五・六五×四・二五×二・二	御成年式	全期
5 鏡箱形雲に鳳凰文ボンボニエール		一点	大正、昭和前期	銀製	D六・一、H三・六		前期	
6	雍仁親王殿下御愛用関係品							
	1 スキーヤー		一点	昭和三年	銀製	H一五・五		全期
2 スカル(アイシス号)模型		一点	昭和三十年	木製	一〇〇・五×一七・〇			
7	陶彫唐獅子	沼田一雅	一对	昭和三、四年	陶磁	阿像：五六・五×四三・五×六七・五 卍像：五六・〇×四三・五×六八・五	殿下御依頼	全期
	両殿下御遺作類							
8	1 雍仁親王殿下御遺作類		二点		竹	九・七×九・八×五二・八／五・八×六・六×五三・五	殿下御自作類	前期
	①方竹花筒 銘 園生		一点	昭和二十六年	陶磁	D二二・九、H七・九		後期
	②茶碗(タイ国チンポット妃殿下と共に絵付)		一点	昭和二十七年	陶磁	D二二・七、H六・七		後期
	③茶碗 銘 裾野春		一点	昭和二十七年	陶磁	D二二・〇、H七・七		前期
	④茶碗 銘 面影		一点	昭和二十六年	陶磁	D二〇・五、H七・七		後期
	⑤茶碗 銘 母衣		一点	昭和二十六年	陶磁	D二二・三、H六・八		前期
	⑥茶碗 銘 冬籠		一点	昭和二十六年	陶磁	D一一・二、H七・五		前期
	⑦茶碗 銘 若竹		一点	昭和二十六年	陶磁	D一一・四、H八・四		後期
	⑧茶碗 銘 つゝ鳥		一点	昭和二十六年	陶磁	D一一・六、H六・七		前期
	⑨茶碗 銘 紅富士		一点	昭和二十六年	陶磁	D一一・五、H八・八		前期
⑩茶碗 銘 不二月		一点	昭和二十六年	陶磁			前期	

24	草花文湯呑	河井寛次郎	二点	昭和十八年	陶磁	各D九・〇、H七・二		後期	
23	草花文碗	河井寛次郎	一点	昭和十五年	陶磁	D一一・八、H九・〇		後期	
22	青磁菊蘭文様茶碗	二代諏訪蘇山	二点	昭和十年頃	陶磁	各D二二・三、H五・八	貞明皇后より	前期	
21	黒鉛瓷茶碗	板谷波山	一点	昭和二十年代	陶磁	D二二・〇、H八・五		前期	
20	葆光白磁枇杷彫文花瓶	板谷波山	一点	昭和三年	陶磁	D二六・七、H一九・三	御結婚御祝い	前期	
19	紅地金襴手吉祥文手鉢	永楽和全か？ 十客のうち	一点	明治前期	陶磁	各D二二・五、H七・八	朝香宮殿下より	全期	
18	鉄描銅彩松大皿	富本憲吉	一点	昭和二十八年	陶磁	D四一・二、H五・〇		全期	
17	孔雀緑鳥文鉢	加藤土師蒔	一点	昭和三十二年	陶磁	D三〇・〇、H二二・二		前期	
16	葱文大皿	加藤土師蒔	一点	昭和五年	陶磁	D四一・三、H六・八	殿下御買上げ	後期	
15	百花模様刺繡卓被	四代飯田新七	一枚	大正期	絹、刺繡	一七三・〇×一七六・〇	貞明皇后より	後期	
14	四季草花図刺繡屏風	四代飯田新七	四曲一隻	明治三十五年	絹・刺繡、木製塗漆・螺鈿	一八一・三×二九八・四	御婚儀につき	前期	
13	漁村曙	横山大観	一幅	昭和十五年	絹本着色	六二・八×八六・六		前期	
12	肇国創業絵巻	横山大観ほか	二卷	昭和十四年	紙本着色	四八・〇×八八・九・四		前期	
11	承安五節舞絵巻		二卷	大正四年	絹本着色	三二・七×六八・九	貞明皇后御遺品	全期	
10	四季絵屏風(後成卿九十賀屏風)	住吉広行	六曲一双	江戸時代(十八、十九世紀)	絹本着色	一一・〇×二九二・〇	有栖川宮殿下より	後期	
9	堤中納言集(名家家集切)	伝紀貫之	一卷	平安時代(十一世紀)	紙本墨書	二七・二×五五六・一	宮家創立につき、貞明皇后より	全期	
2									
勢津子妃殿下御遺作類									
①	御染筆茶碗	荒川豊蔵	一点	昭和四十年	陶磁	D一一・〇、H九・三		前期	
②	御染筆茶碗	荒川豊蔵	一点	昭和四十年	陶磁	D一〇・五、H九・四		後期	
③	御染筆皿	富士に和歌 香蘭社	一点	昭和二十六年	陶磁	D二五・〇、H五・〇		前期	
④	御染筆茶碗	富士に和歌 十二代中里太郎右衛門	一点	昭和三十三年	陶磁	D一三・八、H七・七		前期	
⑤	御染筆茶碗	富士山 五代尾西榮斎	一点	昭和二十九年	陶磁	D一二・〇、H七・〇		後期	
⑥	妃殿下御染筆「秩父湖」	篆刻・清水柏翁	一面	昭和三十八年	木	六〇・五×三〇・〇		全期	
⑦	御染筆色紙(紫陽花、石榴、蝦夷透かし百合、郁子、秋草)		五点	不明	紙本着色	小・三四・五×四二・〇 大・四三・〇×四五・〇		全期	
⑧	熊谷草灰皿	篆刻・清水柏翁	一点	昭和四十四年	木	一一・四×二九・〇		全期	
⑨	殿下御染筆「仁以接事」		一面	昭和四十四年	木	一一・四×二九・〇		全期	
⑩	茶碗	瑞光	一点	昭和二十七年	陶磁	D一一・五、H七・三		後期	
⑪	汲出茶碗	銘 残照	一点	昭和二十五年	陶磁	D九・〇、H七・〇		後期	
⑫	汲出茶碗	銘 野分	一点	昭和二十五年	陶磁	D八・五、H六・〇		後期	
⑬	汲出茶碗	銘 牧場	一点	昭和二十五年	陶磁	D九・〇、H六・二		後期	
⑭	湯呑	銘 雪解	一点	昭和二十六年	陶磁	D六・三、H九・五		前期	
⑮	大湯呑	銘 五輪	一点	昭和二十七年	陶磁	D七・五、H一〇・七		前期	
⑯	栗鼠灰皿		一点	昭和二十五年	陶磁	D二二・五、H一一・三		全期	
⑰	熊谷草灰皿		一点	昭和二十五年	陶磁	D二二・二、H三・七		全期	
⑱	殿下御染筆「仁以接事」		一面	昭和四十四年	木	一一・四×二九・〇		全期	
妃殿下御自作類									



25	花文扁壺	河井寛次郎	一点	昭和三十三年	陶磁	D二四・五、H二〇・二		後期
26	鉄絵丸紋蓋物	濱田庄司	一点	昭和前期	陶磁	D二・三、H一三・八		後期
27	猿廻し	和彦	一点	明治期	象牙	五・八×五・七×一八・一		前期
28	手遊壳	林芳山	一点	明治四十三年	象牙	九・四×一〇・八×二九・四		後期
29	漁船	如月	一点	明治末期	象牙	四・二×三四・五×六・六		前期
30	二童子	木村竜章	一点	明治四十三年	象牙	九・〇×九・六×一四・七		後期
31	鷹		一点	明治初期	象牙	七・三×九・五×二・〇 総高一七・〇		後期
32	とうもろこし	中川竜英	一点	明治末期頃	象牙、色染	七・二×三〇・二×七・四		後期
33	羽箆に子犬		一点	明治大正期	象牙	六・一×二〇・四×六・一		前期
34	西洋蘭鉢植		一点	大正昭和前期	象牙、色染	一三・五×一七・四×二〇・二		前期
35	鶯鳥卵蒔絵盃		一点	明治後期	卵殻、蒔絵	D六・八、H八・四		前期
36	ジャボン製蒔絵菓子器		二合	明治後期	果実皮、蒔絵	大一一・七×一二・三×七・五 小九・七×一〇・一×六・六		後期
37	糸瓜製蒔絵花入		一点	明治後期大正期	へちま、蒔絵	D八・二、H二八・五		後期
38	金魚		二点	明治期	瑪瑙	小W七・六、大W八・一		全期
39	桑木彫唐子象乗	三代原舟月	一点	明治前期	象牙、桑、蒔絵	一七・五×二二・〇×二六・七		前期
40	兜形蒔絵香合		一合	明治後期	木製漆塗、蒔絵、彫金	一一・〇×一一・二×七・三		後期
41	月日貝蒔絵香合	松岡吉平	一合	明治前期	貝殻、蒔絵	一一・一×二二・〇×四・五		前期
42	山吹蒔絵文台・硯箱		一具	明治二十二年	木製漆塗、蒔絵	文台三三・六×五八・二×一一・五 硯箱二五・〇×二三・五×五・〇		前期
43	菊花蒔絵文台・硯箱	船橋舟珉	一具	大正十一年	木製漆塗、蒔絵	文台三六・八×六四・三×一一・四 硯箱二五・〇×二三・〇×五・五		後期
44	日月春秋山水蒔絵料紙箱・硯箱		一具	明治後期	木製漆塗、蒔絵	料紙箱四〇・〇×三三・二×一一・三・八 硯箱二六・一×二二・三×四・八		前期
45	近江八景蒔絵料紙箱・硯箱		一具	昭和三年	木製漆塗、蒔絵	料紙箱四二・五×三五・〇×一四・七 硯箱二五・八×二二・一×六・三		後期
46	桜花折枝蒔絵重硯箱		一合	大正四年頃	木製漆塗、蒔絵	二二・六×二二・一×一七・六		前期
47	桑地菊花蒔絵重硯箱		一合	昭和二十二年	木製、蒔絵	二二・二×三三・三×二六・五		後期
48	松竹梅蒔絵文箱・色紙箱		一具	昭和三年	木製漆塗、蒔絵	文箱二六・五×一〇・〇×五・八 色紙箱二七・〇×二三・一×五・七		前期
49	四季草花蒔絵硯箱	八代西村彦兵衛	一合	昭和三年	木製漆塗、蒔絵	二五・六×二三・三×五・一		後期

50	紅葉散蒔絵硯箱	一合	大正、昭和前期	木製漆塗、蒔絵	二三・八×三・〇×四・六	貞明皇后より	後期
51	竹に雀蒔絵眞箱	一合	明治後期	木製漆塗、蒔絵	一六・三×二・三×七・八	大正天皇より	前期
52	竹に月蒔絵眞箱	一合	明治三十一年頃	木製漆塗、蒔絵	一六・二×二・二×六・九	大正天皇より	後期
53	銀製観瀑図巻眞箱	一点	明治四十三年	銀製	一四・九×一・〇×四・一	明治天皇御遺品	前期
54	橘鉢植銀細工	一点	明治期	銀製	D六・八、H九・一	明治天皇御遺品	前期
55	百合鉢植銀細工	一点	明治期	銀製	D七・一、H一〇・五	明治天皇御遺品	前期
56	鼬	一点	明治期	鑄造・銅	九・三×二・八・九×一・〇	明治天皇御遺品	後期
57	牛と童	一点	大正、昭和前期	鑄造・ブロンズ	一七・三×三・六・五×一・八・五		後期
58	鯉	一点	大正、昭和前期	鑄造・銀	一〇・二×二・七・三×一・〇・三	昭和天皇より	前期
59	夕月	一点	大正十一年	鑄造・ブロンズ	一一・〇×九・二×四・〇・五	御成年御祝い	前期
60	みみずく	一点	昭和前期	鑄造・白銅	一五・〇×一・五・〇×二・七・五	昭和天皇・香淳皇后より	前期
61	兎	一点	昭和十二年	鑄造・白銅	一五・一×一・七・八×三・一・四		後期
62	母と子の像	一点	昭和五十四年頃	鑄造・ブロンズ	一二・五×一・六・四×三・六・五		後期
63	熊坂長範	一点	明治二十六年	木製彩色	H三一・五	貞明皇后より	前期
64	還城楽	一点	明治二十六年	木製彩色	H三〇・〇	貞明皇后より	前期
65	楽土	一点	昭和十五年	紙製彩色	総高三二・六		後期
66	子雀	一点	昭和三十年前後	木彫胡粉塗(衣裳人形)	総高二八・二		後期
67	粧い	一点	昭和十九年	木彫胡粉塗(衣裳人形)	H二三・八		後期
68	鈴を持てる児	一点	昭和期	木彫胡粉塗	総高三二・五		後期
69	蓋付壺 エードヴァルド・ハルド(制作・オレフォッシュ・ガラス工場)	一点	一九二〇年代前半	ガラス	D二二・〇、H三九・五	昭和天皇より	前期
70	花紋硝子花瓶	一点	昭和十年頃	ガラス	D二二・〇、H三五・五	昭和天皇・香淳皇后より	後期
71	フォレスト遊園の雪景	一点	一九二二年	油彩・カンヴァス	四六・二×三八・四	貞明皇后御遺品	全期
72	インクスタンド(雛と蝸牛)	一点	二十世紀前期	金属・陶磁	八・四×二・四・〇×五・二	貞明皇后より	全期
73	青磁菊唐草文鉢	一点	十一、十二世紀	陶磁	D一七・〇、H七・七	殿下御買上	全期
74	白搔落鹿文鉢	一点	十一、十二世紀	陶磁	D一七・六、H六・八	殿下御買上	全期
75	白釉多彩花卉文皿	一枚	十七世紀	陶磁	D二六・〇、H五・三	殿下御買上	全期
76	弘前の秋―田園風景	一点	昭和二十八年	紙、インク	一四・二×二五・〇		全期
77	鉢	一点	一九七〇年頃	陶磁	D一三・四、H八・〇		全期



# 主な参考文献

## ●秩父宮家関連

『秩父宮と勢津子妃』秩父宮殿下御成婚記念会、昭和三年（一九二八）初版、

平成十五年復刻版

アサヒグラフ臨時増刊『秩父宮殿下御慶事奉祝號』東京朝日新聞、昭和三年（一九二八）

加藤土師萌編『秩父宮御遺作図録 玉葉流芳』秩父宮御遺作図録刊行会、

昭和二十九年（一九五四）

財団法人秩父宮記念会『雅仁親王御事蹟資料』全六巻私家版、昭和三十五年（一九六〇）

財団法人秩父宮記念会『思い出の記 秩父宮雅仁親王文集』私家版、

昭和三十九年（一九六二）

『秩父宮雅仁親王』秩父宮を偲ぶ会、昭和四十五年（一九七〇）

財団法人秩父宮記念会『雅仁親王実紀』吉川弘文館、昭和四十七年（一九七二）

秩父宮妃勢津子『銀のボンボニール』主婦の友社、平成三年（一九九二）

保坂正康『秩父宮 昭和天皇弟宮の生涯』中央公論新社、平成十二年（二〇〇〇）

## ●書籍

三井高徳『陶工永楽伝』私家版、昭和十四年（一九三九）

香取秀真『大島如雲先生年譜』東京鑄金会、昭和十六年（一九四二）

『鑄金近代史稿』鑄金家協会、昭和二十二年（一九五七）

正木直彦『十三松堂日記』中央公論美術出版、昭和四十年（一九六五）

『諏訪蘇山作品集』蘇山会、昭和四十六年（一九七二）

加藤千代編『加藤土師萌作品集』朝日新聞社、昭和四十九年（一九七四）

『明治天皇紀』吉川弘文館、昭和四十九年（一九七四）

崔淳雨・長谷部楽爾編『世界陶磁全集十八 高麗』小学館、昭和五十三年（一九七八）

北村西望『北村西望 百寿の譜』新三多摩新聞社、昭和五十七年（一九八二）

荒川浩和監修『近代日本の漆工芸』京都書院、昭和六十年（一九八五）

三上次男編『世界陶磁全集二十一 世界（二）』小学館、昭和六十一年（一九八六）

『朝倉彫塑館』財団法人台東区芸術文化財団、昭和六十一年（一九八六）

三上次男『イースラム陶器史研究』中央公論美術出版、平成二年（一九九〇）

『高松宮宣仁親王殿下』朝日新聞社、平成三年（一九九二）

『御所人形作家 野口光彦作品集 稚児たちが語る世界』光陽出版社、

平成三年（一九九二）

田中喜男『伝統工芸 職人の世界』雄山閣、平成四年（一九九二）

東京都写真美術館『日本写真家事典』淡交社、平成十二年（二〇〇〇）

バーナード・リーチ『バーナード・リーチ日本絵日記』講談社学術文庫、

平成十四年（二〇〇二）

絵守すみよし『人形師「原舟月」三代の記』青蛙房、平成十五年（二〇〇三）

## ●展覧会図録等

『平田郷陽人形展』松屋、昭和二十九年（一九五四）

『近代陶彫の創始者 沼田一雅遺作展』福井県立陶芸館、昭和五十二年（一九七七）

『秩父宮記念三峯山博物館要覧』秩父宮記念三峯山博物館、昭和五十二年（一九七七）

『明治天皇を偲びたてまつる 臨幸百五十年特別展』霞会館、昭和六十年（一九八五）

『明治の彫金—加納夏雄とその時代—』たばこと塩の博物館、昭和六十二年（一九八七）

『白夜の国の抒情 スウェーデンのガラス 一九〇〇—一九七〇』朝日新聞社、

平成四年（一九九二）

『珠玉の陶芸 板谷波山展』朝日新聞社、平成七年（一九九五）

『生誕百年記念クリスタル・輝きへの祈り 各務嶺三展』岐阜県美術館、

平成八年（一九九六）

『バーナード・リーチ展』バーナード・リーチ展実行委員会、平成九年（一九九七）

『特別陳列「秩父宮妃殿下御寄贈御装束」文化庁・東京国立博物館・京都国立博物館、

平成九年（一九九七）

『明治文化への誘い—おゆかりの品々に見る明治の至宝』明治神宮、

平成九年（一九九七）

『天皇陛下御在位十年記念「宮廷の装束」京都国立博物館・高倉文化研究所、

平成十一年（一九九八）

『秩父宮妃殿下記念展—勢津子さまを偲びたてまつりて』会津武家屋敷文化財管理室、

平成十一年（一九九八）

『加藤土師萌展—近代陶芸の精華—』東京国立近代美術館、平成十一年（一九九八）

『近代陶芸の巨匠 河井寛次郎の世界』日本経済新聞社、平成十一年（一九九八）

『生誕百年記念 ルーシー・リー展—静寂の美へ—』

滋賀県立陶芸の森、ミウラート・ヴェレージ（三浦美術館）、平成十四年（二〇〇二）

『文化学園服飾博物館名品選』文化学園服飾博物館、平成十五年（二〇〇三）

## ●定期刊行物

『日本漆工会雑誌』第一三八・一四〇号、日本漆工会、大正元年（一九一三）

『建築工芸叢誌』第二期第四冊、大正三年（一九一四）

『みつみ祢山特集号—秩父宮家と三峯山』三峯神社々務所、平成七年（一九九五）

【謝辞】

本展を開催するにあたり、左記の機関、方々に御協力戴きました。記して御礼申し上げます。

青森県スポーツ資料館、朝倉彫塑館、唐津市役所、京都国立博物館、秩父宮記念スポーツ博物館、秩父宮記念公園、鶴岡文庫、文化学園服飾博物館、三峯神社、立教小学校  
今井敦、岩壁義光、岡野智彦、加藤佳明、幸坂勉、佐藤洋一、清水喜久子、清水武司、鈴木真弓、千島幸明、寺尾健一、樋口満希子、三浦弘子、山口峯生、横溝廣子

若松と菊―旧秩父宮家つくしみの品々

三の丸尚蔵館展覧会図録No. 33

編集 宮内庁三の丸尚蔵館

制作 株式会社 東京美術

翻訳 横溝廣子

発行 宮内庁

平成十六年一月六日発行

© 2004, Museum of the Imperial Collections



- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

若松と菊―旧秩父宮家つくしみの品々

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 33

編集 宮内庁三の丸尚蔵館

制作 株式会社 東京美術

翻訳 横溝廣子

発行 宮内庁

平成十六年一月六日発行

©2004, Museum of the Imperial Collections

- 52  
Tobacco box with design of bamboo and the moon in *makie*  
c.1898  
lacquer on wood, *makie*  
16.2×12.2×6.9  
gift from Emperor Taisho
- 53  
Tobacco box with waterfall scene  
Tsukada Shukyo  
1910  
silver  
14.9×11.0×4.1  
inherited from Emperor Meiji
- 54  
Planted *tachibana* in silverwork  
Meiji period  
silver  
D6.8, H9.1  
inherited from Emperor Meiji
- 55  
Planted lily in silverwork  
Meiji period  
silver  
D7.1, H10.5  
inherited from Emperor Meiji
- 56  
Weasel  
Meiji period  
cast bronze  
9.3×28.9×11.0  
inherited from Emperor Meiji
- 57  
Cow and a boy  
Numata Ichiga  
Taisho to early Showa period  
cast bronze  
17.3×36.5×18.5
- 58  
Carp  
Oshima Joun  
Taisho to early Showa period  
cast silver  
10.2×27.3×10.3  
gift from Emperor Showa
- 59  
Evening moon  
Fujii Koyu  
1922  
cast bronze  
12.0×9.2×40.5  
gift celebrating Prince's coming of age ceremony
- 60  
Horned owl  
Neya Churoku  
early Showa period  
cast nickel  
15.0×15.0×27.5
- gift from Emperor Showa and Empress Kojun
- 61  
Rabbit  
Sugita Kado, Kougei Seikeisha  
1937  
cast nickel  
15.1×17.8×32.4
- 62  
Mother and child  
Kitamura Seibo  
c.1979  
cast bronze  
12.5×16.4×36.5
- 63  
Kumasaka Chohan  
Morikawa Toen  
1893  
color on wood  
H31.5  
gift from Empress Teimei
- 64  
Genjoraku  
Morikawa Toen  
1893  
color on wood  
H30.0  
gift from Empress Teimei
- 65  
Paradise  
Hirata Goyo  
1940  
H32.6  
color on paper-mache
- 66  
Small sparrow  
Hirata Goyo  
c.1955  
*gofun* on carved wood  
H28.2
- 67  
Making up  
Machino Kimiko  
1944  
*gofun* on carved wood  
H23.8
- 68  
Child holding a bell  
Noguchi Mitsuhiko  
Showa period  
*gofun* on carved wood  
H32.5
- 69  
Covered jar  
Edward Hald (Orrefors Glasshouse)  
early 1920s  
glass  
D21.0, H39.5  
gift from Emperor Showa
- 70  
Glass vase with flower design  
Kagami Kozo  
c.1935  
glass  
D21.0, H35.5  
gift from Emperor Showa and Empress Kojun
- 71  
Snowy landscape in Forest park  
1922  
oil on canvas  
46.1×38.4  
inherited from Empress Teimei
- 72  
Inkstand (chick and snail)  
France  
early 20th century  
metal  
8.4×24.0×5.2  
gift from Empress Teimei
- 73  
Bowl, celadon ware with chrysanthemum and arabesque design  
Koryo  
11-12th century  
ceramic  
D17.0, H7.7  
purchased by the Prince Chichibu
- 74  
White bowl with deer design scraped off  
Iran  
11-12th century  
ceramic  
D17.6, H6.8  
purchased by the Prince Chichibu
- 75  
Dish, white glazed with various colored flowers  
Turkey  
17th century  
ceramic  
D26.0, H5.3  
purchased by the Prince Chichibu
- 76  
Autumn in Hirosaki, a countryside scene  
Bernard Leach  
1953  
ink on paper  
14.2×25.0
- 77  
Bowl  
Lucie Rie  
c.1970  
ceramic  
D13.4, H8.0



- 27  
Monkey showman  
Kazuhiko  
Meiji period  
ivory  
5.8×5.7×18.1  
inherited from Emperor Meiji
- 28  
Toy seller  
Hayashi Hozan  
1910  
ivory  
9.4×10.8×29.4  
inherited from Emperor Meiji
- 29  
Fishing boat  
Kisaragi ?  
late Meiji period  
ivory  
4.2×34.5×6.6  
gift from Emperor Taisho
- 30  
Two children  
Kimura Ryusho  
1910  
ivory  
9.0×9.6×14.7  
gift from Emperor Taisho
- 31  
Falcon  
early Meiji period  
ivory  
7.3×9.5×12.0 total height 17.0  
gift from Emperor Taisho
- 32  
Corn  
Nakagawa Ryuei  
late Meiji period  
ivory  
7.2×30.2×7.4  
gift from Emperor Taisho
- 33  
Puppy and feather duster  
Meiji to Taisho period  
ivory  
6.1×20.4×6.1  
gift from Empress Teimei
- 34  
Potted western orchid  
Taisho to early Showa period  
ivory  
13.5×17.4×20.2  
gift from Empress Teimei
- 35  
Wine cup with *makie* and goose egg shells  
late Meiji period  
egg shell and *makie*  
D6.8, H8.4  
inherited from Emperor Meiji
- 36  
Confectionary container, *makie* on zamboa  
late Meiji period  
*makie* on fruit skin  
small container : 11.7×12.3×7.5  
large container : 9.7×10.1×6.6  
inherited from Emperor Meiji
- 37  
Vase, *makie* on gourd  
late Meiji to Taisho period  
*makie* on gourd  
D8.2, H28.5  
gift from Emperor Taisho and Empress Teimei
- 38  
Goldfish  
Meiji period  
agate  
small fish : W7.6 large fish : W8.1  
inherited from Emperor Meiji
- 39  
Chinese child on an elephant, carved mulberry  
Hara Shugetsu III  
early Meiji period  
ivory, *makie* on mulberry  
17.5×12.0×16.7  
gift from Emperor Taisho
- 40  
Incense caddy in helmet shape with *makie*  
late Meiji period  
lacquer on wood, *makie*, metalwork  
11.0×11.2×7.3  
gift from Emperor Taisho
- 41  
Incense caddy with design of the sun and  
moon with shells and *makie*  
Matsuoka Kichihei  
early Meiji period  
shell, *makie*  
12.1×12.0×4.5
- 42  
Set of stationary stand and ink-stone box with  
design of a Japanese rose in *makie*  
1889  
lacquer on wood, *makie*  
stationary stand : 33.6×58.2×11.5  
ink-stone box : 25.0×23.5×5.0  
gift from Emperor Taisho
- 43  
Set of stationary stand and ink-stone box with  
design of a chrysanthemum in *makie*  
Funabashi Shumin  
1922  
lacquer on wood, *makie*  
stationary stand : 36.8×64.3×12.4  
ink-stone box : 25.0×23.0×5.5  
gift from Empress Teimei in celebration of  
Prince's coming of age ceremony
- 44  
Set of stationary box and ink-stone box with  
design of the sun and moon, and spring and  
autumn landscapes in *makie*  
late Meiji period  
lacquer on wood, *makie*  
stationary box : 40.0×32.2×13.8  
ink-stone box : 26.1×22.3×4.8  
gift from Emperor Taisho
- 45  
Set of stationary box and ink-stone box with  
design of eight scenes of Oumi in *makie*  
1928  
lacquer on wood, *makie*  
stationary box : 42.5×35.0×14.7  
ink-stone box : 25.8×22.1×6.3  
wedding gift from Empress Teimei
- 46  
Layered ink-stone boxes with design of cherry  
blossom branches in *makie*  
c.1915  
lacquer on wood, *makie*  
22.6×12.1×17.6  
gift from Emperor Taisho and Empress Teimei
- 47  
Layered ink-stone boxes with design of  
chrysanthemums in *makie* on mulberry ground  
1947  
*makie* on wood  
22.2×22.3×16.5
- 48  
Set of letter box and *shikishi* box with design  
of pine, bamboo and plum blossoms in *makie*  
1928  
lacquer on wood, *makie*  
letter box : 26.5×10.0×5.8  
*shikishi* box : 27.0×23.1×5.7  
wedding gift from Empress Teimei
- 49  
Ink-stone box with design of flowers and  
plants of the four seasons in *makie*  
Nishimura Hikobei VIII  
1928  
lacquer on wood, *makie*  
25.6×23.3×5.1  
wedding gift
- 50  
Ink-stone box with design of scattered maple  
leaves in *makie*  
Taisho to early Showa period  
lacquer on wood, *makie*  
23.8×22.0×4.6  
gift from Empress Teimei
- 51  
Tobacco box with bamboo and sparrow design  
in *makie*  
late Meiji period  
lacquer on wood, *makie*  
16.3×12.3×7.8  
gift from Emperor Taisho

- ceramic D12.2, H3.7
- ⑩ Writing by the Prince  
wood carving by Shimizu Hakuo  
1969  
wood 124.0×29.0
- 8-2  
Works by Princess Chichibu
- ① Tea bowl with painting by Princess Chichibu named “Shino”  
Arakawa Toyozo  
1965  
ceramic D11.0, H9.3
- ② Tea bowl with writing by Princess Chichibu named “U”  
Arakawa Toyozo  
1965  
ceramic D10.5, H9.4
- ③ Dish with painting and writing by Princess Chichibu, Mt. Fuji and *waka* poem  
Koransha  
1951  
ceramic D25.0, H5.0
- ④ Tea bowl with painting by Princess Chichibu named “Tsubaki”  
Nakazato Taroemon XII  
1958  
ceramic D13.8, H7.7
- ⑤ Tea bowl with painting by Princess Chichibu named “Fujisan”  
Onishi Rakusai V  
1954  
ceramic D12.0, H7.0
- ⑥ Writing by Princess Setsuko, “Chichibu Lake”  
wood carving by Shimizu Hakuo  
1963  
wood 60.5×30.0
- ⑦ Paintings by Princess Chichibu on *shikishi* sheet  
date unknown  
color on paper  
small size : 34.5×42.0  
large size : 43.0×45.0
- 9  
Poems from anthology *Tsutsumi Chunagon Kashu*, one of *Meika Kashugire*, Detached segment of calligraphy by great masters attributed to Ki-no Tsurayuki  
11th century  
ink on paper  
27.2×556.1  
gift from Empress Teimei when the Chichibu Family was established
- 10  
Scenes of the four seasons (in the 90th celebration for Toshinari)
- Sumiyoshi Hiroyuki  
18-19th century  
color on silk  
110.0×292.0  
gift from Prince Arisugawa
- 11  
Scenes of Joan Gosechinomai dance  
1915  
color on silk  
32.7×681.9~711.9  
inherited from Empress Teimei
- 12  
Scenes of the creation of the country  
Yokoyama Taikan and others  
1939  
color on paper  
48.0×889.4~990.2
- 13  
Dawn at a fishing village  
Yokoyama Taikan  
1940  
color on silk  
62.8×86.6
- 14  
Flowers and plants of the four seasons in embroidery  
Iida Shinshichi IV  
1902  
embroidery on silk, lacquer on wood, mother of pearl inlay  
181.3×298.4  
artwork for wedding
- 15  
Table cover with various flower designs in embroidery  
Iida Shinshichi IV  
Taisho period  
embroidery on silk  
173.0×176.0  
gift from Empress Teimei
- 16  
Large dish with leek design  
Kato Hajime  
1930  
ceramic  
D41.3, H6.8  
purchased by the Prince Chichibu
- 17  
Bowl with bird design, Persian blue glaze  
Kato Hajime  
1957  
ceramic  
D30.0, H12.2
- 18  
Large dish with pine design in ferrous and copper glazes  
Tomimoto Kenkichi  
1953  
ceramic
- D41.2, H5.0
- 19  
Bowl with auspicious designs in *kinrande* style on red ground  
Eiraku Wazen ?  
early Meiji period  
ceramic  
D12.5, H7.8 each  
gift from Prince Asaka
- 20  
Vase, *Hoko* (unique technique of relief coated with a type of mat glaze), white ware carved with loquat design  
Itaya Hazan  
1928  
ceramic  
D26.7, H19.3  
wedding gift
- 21  
Tea bowl with black glaze  
Itaya Hazan  
c.1945—1955  
ceramic  
D 12.0, H8.5
- 22  
Tea bowl, celadon ware with chrysanthemum and orchid design  
Suwa Sozan II  
early Showa period  
ceramic  
D12.3, H5.8 each  
gift from Empress Teimei
- 23  
Tea bowl with flower and plant design  
Kawai Kanjiro  
1940  
ceramic  
D11.8, H9.0
- 24  
Cup with flower and plant design  
Kawai Kanjiro  
1943  
ceramic  
D9.0, H7.2 each
- 25  
Flat bottle with flower design  
Kawai Kanjiro  
1957  
ceramic  
D14.5, H20.2
- 26  
Covered jar with round designs in ferrous glaze  
Hamada Shoji  
early Showa period  
ceramic  
D12.3, H13.8  
gift from Prince Takamatsu



# List of Exhibits

- 1-1  
Photographs of the Prince and Princess  
1902-1970s
- 1-2  
Portraits of Prince and Princess Chichibu  
Kumazawa Kanmei  
1948-1950  
ink on silk, ink on paper  
Prince : 51.3×36.8, Princess : 47.2×34.9  
(sketch) 37.0×26.5
- 1-3  
Portrait of Princess Chichibu  
Fujita Tsuguharu  
1948  
light color on paper  
19.1×13.8
- 1-4  
Portrait of Princess Chichibu  
Hayashi Takeshi  
1957  
pastel on paper  
29.4×37.8
- 2  
Holy Peaks of Chichibu at Spring Dawn  
Yokoyama Taikan  
1928  
ink on silk  
67.2×113.5  
in celebration for the establishment of the  
Chichibu Family
- 3  
Myohodake at Okuchichibu  
Wada Eisaku  
1928  
oil on canvas  
100.0×121.3  
wedding gift
- 4  
Tobacco box with scene of distant Mt. Myoho  
Akatsuka Jitoku  
1928  
lacquer on wood  
15.4×21.9×7.5  
wedding gift
- 5  
Bonbonnière  
5-1  
Bonbonnière, drum shaped with young pine  
and star design  
1928  
silver  
4.25×5.8×4.25  
gift from Empress Teimei
- 5-2  
Bonbonnière, *tebako* box shaped with cloud  
and crane design  
1922  
silver  
6.3×4.45×3.1  
in celebration for the Prince's coming of age  
ceremony
- 5-3  
Bonbonnière, letter box shaped with pine and  
arabesque designs  
1922  
silver  
5.15×3.95×1.9  
in celebration for the Prince's coming of age  
ceremony
- 5-4  
Bonbonnière, letter box shaped with pine and  
arabesque designs  
1922  
silver  
5.65×4.25×2.2  
in celebration for the Prince's coming of age  
ceremony
- 5-5  
Bonbonnière, mirror box shaped with phoenix  
and arabesque designs  
Taisho to early Showa period  
silver  
D6.1, H3.6
- 6  
Artworks possessed by Prince Chichibu  
6-1  
Skier  
1928  
silver  
H15.5
- 6-2  
Model of a scull ("Isis")  
1955  
wood  
100.5×17.0
- 7  
Ceramic Chinese lions  
Numata Ichiga  
1928-1929  
ceramic  
lion with mouth open : 56.5×43.5×67.5  
lion with mouth closed : 56.0×43.5×68.5  
commissioned by the Prince
- 8  
Works by the Prince and Princess  
8-1  
Works by Prince Chichibu  
① Bamboo cylindrical vase named "Sonou"  
bamboo  
9.7×9.8×52.8 5.8×6.6×53.5
- ② Tea bowl (painted together with Princess  
Chumbhot of Thailand)  
1951  
ceramic D12.9, H7.9
- ③ Tea bowl named "Susononoharu"  
1952  
ceramic D12.7, H6.7
- ④ Tea bowl named "Omokage"  
ceramic D12.0, H7.7
- ⑤ Tea bowl named "Horo"  
1951  
ceramic D10.5, H7.7
- ⑥ Tea bowl named "Fuyugomori"  
1951  
ceramic D12.3, H6.8
- ⑦ Tea bowl named "Wakatake"  
ceramic D11.2, H7.5
- ⑧ Tea bowl named "Tsutsudori"  
1951  
ceramic D11.4, H8.4
- ⑨ Tea bowl named "Benifuji"  
ceramic D11.6, H6.7
- ⑩ Tea bowl named "Fujizuki"  
1951  
ceramic D11.5, H8.8
- ⑪ Tea bowl named "Zuiko"  
1952  
ceramic D11.5, H7.3
- ⑫ *Kumidashi* (ladled hot water from kitchen)  
tea bowl named "Zansho"  
1950  
ceramic D9.0, H7.0
- ⑬ *Kumidashi* (ladled hot water from kitchen)  
tea bowl named "Nowake"  
1950  
ceramic D8.5, H6.0
- ⑭ *Kumidashi* (ladled hot water from kitchen)  
tea bowl named "Makiba"  
1950  
ceramic D9.0, H6.2
- ⑮ Tea cup named "Yukidoke"  
1951  
ceramic D6.3, H9.5
- ⑯ Large tea cup named "Gorin"  
1952  
ceramic D7.5, H10.7
- ⑰ Ashtray with squirrel design  
1950  
ceramic D12.5, H11.3
- ⑱ Ashtray with Japanese lady-slipper design  
1950

## Foreword

In 1996, approximately 900 artworks were donated to our museum from the late Princess Chichibu, and within this exhibition, we will introduce the cultural activity of Prince Chichibu-no-miya Yasuhito and Princess Setsuko, through the artworks they cherished among them.

The Prince Chichibu Family was established in 1922 on the occasion of the coming of age ceremony of Prince Yasuhito, born as the second son of Emperor Taisho on June 25, 1902. Prince Yasuhito married Matsudaira Setsuko in 1928, and since then together they carried out various activities as members of the Imperial Family. However, within the period of disorder during the second World War, the Prince contracted tuberculosis, and past away at age 50 in 1955. The Princess continued activity as the head of the Family as well as a member of the Imperial Family. The seal of Prince Yasuhito was a young pine, and that of the Princess was a chrysanthemum. The boxes containing their various artworks bear these seals indicating their owner, showing how the Prince and Princess cherished these items.

Prince Yasuhito is well known to have been fond of sports, but he also showed understanding towards art and literature from a young age, often visiting art exhibitions. Various old and new art works from various countries along with works from Japan, have been inherited from three generations of Emperors, namely Meiji, Taisho and Showa (Prince Yasuhito's elder brother) and his mother Empress Teimei. After the Prince contracted tuberculosis, he began to create ceramics while recuperating at Gotenba. The Princess created paintings and calligraphy herself, and also carefully organized the precious family artworks.

It has been 80 years since the Late Prince Chichibu Family was established, 50 years since the Prince has past away, and 10 years since the Princess has past away. We hope this exhibition is able to show the achievements and personalities of the Prince and Princess Chichibu through the artworks passed down within their Family.

January, 2004

Museum of the Imperial Collections,  
Sannomaru Shōzōkan

*(Translated by Hiroko Yokomizo)*





*Items Cherished by Late Prince and Princess Chichibu*

---

January 6 (Tue.) — March 7 (Sun.)

Museum of the Imperial Collections,  
Sannomaru Shōzōkan